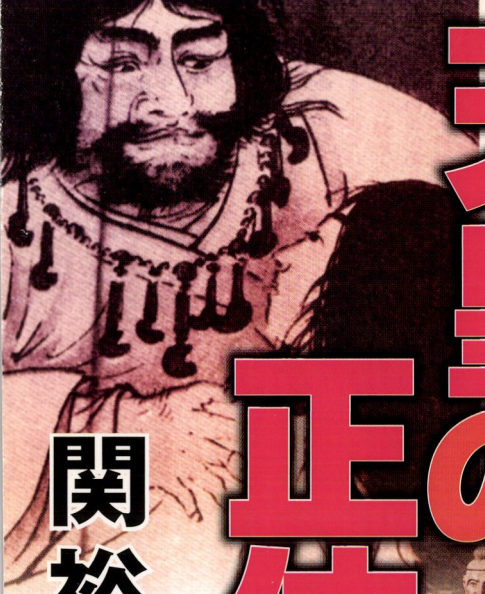
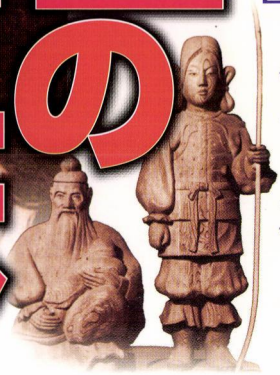
『日本書紀』が隠し通した

天皇の正体





関裕二

廣済堂文庫

『日本書記』が隠し通した
天皇の正体

ヒューマン文庫

関 裕二

KOSAIDOBUNKO

『日本書紀』が隠し通した天皇の正体

ヒューマン文庫

関裕二

廣済堂文庫

はじめに

日本人にとって、「天皇とは何か」という問いかけは、避けては通れない問題である。まず、歴史を知る上で重要な意味を持っている。国の始まり、根幹が、「天皇」と大いにかかわっているからだ。

また現代を語る上でも、「天皇」というキーワードを、無視することはできない。なにしろ、日本の元首は天皇であり、大統領というシステムは存在しない。政治形態そのものにも、「天皇」は組み込まれているわけである。

当然、国民であるならば、最低限の知識は必要であろう。

科学万能の時代に、なぜ日本では、王家が必要なのか。なぜ天皇家は千数百年生きながらえてきたのか、あなたは明確に答えられるだろうか。外国人だけではない。子供に聞かれて、なんと答えるのだろう。問題は、「天皇とは何か」を、学校でも教えず、はっきりと解き明かした本がないことである。

なぜ天皇は強大な権力を握っていなかったのだろう。なぜそのような王権が必要とされ守られ続けてきたのだろう。ひとつとして解き明かされてはいない。

「天皇」は円の中心にあって、「無」だからこそ意味がある、とする老荘思想的な指

摘もある。さらにこの考えは、王家に限らず「無力な者は害されることはない」という幻想を生み出しているように思えてならない。

だがこれは、現実の歴史を無視した発想だ。王家誕生以来、多くの皇族が、権力者の手で葬り去られてきたからだ。

では、「天皇」とはいったい何者なのだろう。一言で言い当ててしまえば、それは「祟る王」である。

「祟る王」だからこそ、敬われ、恐れられ、守られてきたのだ。天皇に手をかければ、何が起きるか分からないという幻想に、人々は畏怖してきたのである。だから、

「そんな非科学的な王家を、この後われわれは守っていく必要があるのか」

と問い直してみる必要がある。

「なぜ日本人は、いまだに王家を大切に守っているのだ」

と、諸外国に問われた時、明確に答えるだけの根拠を持たねばなるまい。

結論を先に言ってしまえば、「天皇」こそ、日本人の精神構造の象徴的存在であり、八百万の神々を奉斎する日本人の「信仰心」の中心に立っているから守られてきたのである。

「われわれは科学の時代に生きているのだから、信仰とはかかわりがない」

とおっしゃるかもしれない。けれども、「自覚のない信仰」をかたくなに守り続けていることを、日本人自身が気づいていないだけの話である。

たとえば、ロボットの分野で日本が最先端を走っているのも、「多神教的風土」が原因とされている。多神教世界の住民は、「石や岩にも神は宿る」と考えるのだから、ロボットを擬人化して平気でいるのだ。

これに対し、「神が万物を創造した」という一神教（いっしんきょう）世界から観れば、人間が「人間もどき」を創作し、名前をつけ、魂を吹き込むかのような行為は、理解しがたく、人間の形を模したロボットは、なかなか製作されない。

ここに、日本のような多神教世界と西洋の一神教世界の埋めようのない溝が横たわる。原始から継承された日本人の発想が世界に理解してもらえなければ、日本はいよいよ孤立していくことになるだろう。

混迷と停滞の時代だからこそ、「祟る天皇の正体」「祟る王を支え続ける日本人の正体」を認識しておかなければならないのである。

一神教世界が行きづまりをみせている今、日本人が一神教や多神教のそれぞれの長所と短所をわきまえたうえで、新たな発想を世界に向けて発信していく必要があろう。

だから、「祟る天皇」の正体を解き明かしてみたいのである。

●―目次

はじめに 3

第一章　祟る天皇と祟られる天皇

祟る王が弥生時代の戦乱を収拾させた？12 ● 戦争の始まりは農業を発明したから？14 ● 神聖な者は恐ろしい人18 ● 祟る豪族たち22 ● 親に放逐されていたヤマトタケル24 ● なぜヤマトタケルは祟ったのか27 ● 祟る神功皇后と宗像神30 ● なぜ聖徳太子は童子姿なのか32 ● 祟る長屋王37 ● 井上内親王の悲劇を招いた天智と天武の確執39 ● 桓武天皇がおびえた井上内親王の祟り41 ● 早良親王の恨み45 ● 蘇我入鹿は祟る鬼48 ● ピンポイントで政敵に祟った菅原道真51 ● 蘇我氏と菅原道真が出雲とつながる謎54 ● 祟る平将門59 ● 祟る人が天皇や出雲とかかわった謎61

第二章　多神教と戦争

家畜となった日本人 64　一神教を受け入れない日本人の体質 68　日本的な文化を恥じた日本のインテリ 70　日本を捨てた明治維新が讃美され続けた謎 72　『茶の本』の衝撃 75　白人キリスト教徒の論理 78　民主主義も共産主義もキリスト教のなれの果て 81　なぜ一神教は多神教を野蛮視するのか 84　日本人があいまいなのは多神教信者だから 86　一神教が砂漠で生まれた意味 88　一神教の限界 90　見直されつつある多神教 92　反発する一神教的世界 96　なぜクジラを捕ってはいけないのか 98　多神教の神は正義の神ではない 100　神と鬼は表裏一体 103　基本的に神は祟る鬼だった 106　日本人に横たわる諦念 108

第三章　祟られる天皇の謎

なぜ天皇は祟られるのか 114　出雲神・大物主神の祟りにおびえたヤマト

の初代王 116
● なぜ神話の世界で去っていった出雲神がヤマトに蘇ったのか 118
● 大物主神がヤマトにやってきたいきさつ 121 ● 垂仁天皇と出雲 124 ● 出雲大神の祟り 126 ● 巨大建造物だった出雲大社 129 ● 天照大神も恐ろしい神だった 132 ● なぜ黎明期のヤマトの王家に恐ろしい神々がまとわりつくのか 135 ● いじめられる出雲 137 ● 出雲で起きた悲劇 139 ● ヤマトタケルの出雲成敗 142 ● 海の女神に呪われた皇祖神 144 ● 祟られる天皇の共通点 147 ● 呪われた船出をしたヤマト 149 ● 神武天皇の呪い 151 ● 応神天皇がヤマトタケルの孫であったことの意味 154

第四章　皇祖神と出雲神の謎

● 「祟る天皇」は古代日本人の大発明? 160 ● 天照大神と大物主神は一体分身? 162 ● 出雲神は皇祖神? 164 ● 伊勢の神の妻だった斎王（斎宮） 167 ● 『日本書紀』は何かを隠してしまったのか 169 ● 『日本書紀』編者は愉快犯? 171 ● ヤマトを恨んでいたヤマトタケルと神武天皇 174 ● 『日本書紀』は持統天皇と藤原不比等の歴史書 176 ● 蘇我氏の祖が抹殺された理由 179 ● 武内宿禰と

よく似た塩土老翁 182
応神の父は住吉大神だった？ 184
応神は住吉大神の子だった？ 187
宇佐の行幸会と放生会の謎 190
敗れた住吉大神の鎮魂 193
謎解きの鍵を握るのは浦島太郎 195
重なってくる浦島太郎と住吉大神と武内宿禰 197
誰も語ってはいけないタブー 200

第五章　祟る天皇の正体

なぜ出雲の王家は潰され復活したのか 206
ヤマト建国の歴史 208
ヤマト建国にもっとも貢献したのは吉備 210
饒速日命は吉備からやってきた？ 213
出雲との主導権争いに勝利した吉備 216
出雲と吉備それぞれの思惑 218
神功皇后と邪馬台国のつながり 222
神功皇后は日本海の女王 224
邪馬台国論争迷走の始まり 227
邪馬台国偽僭説を見直す 229
卑弥呼と台与のカラクリ 233
天孫降臨神話は史実だった 235
天孫降臨の地にリアリティがある 238
祟る天皇の正体 242

おわりに 245

第1章　祟る天皇と祟られる天皇

崇る王が弥生時代の戦乱を収拾させた？

崇る天皇（皇族）に注目するのは、「恐ろしい王」を生み出したことで、弥生時代の戦乱を収拾させたのではないかと思える節があるからなのだ。

三世紀後半から四世紀にかけてヤマトが建国され（これが古墳時代の始まり）、「崇る王」というカラクリが生まれ、この時以来、日本には「平和を維持するためのシステム」が完成していたのではないかと思えてならないのである。

なぜこのようなことを言い出すかというと、ヤマトに都が置かれる直前まで、日本列島は戦乱の渦中にあったからだ。「魏志倭人伝」に登場する邪馬台国のヒミコも、邪馬台国の南方の狗奴国と交戦していた。この時の様子を「魏志倭人伝」は魏が檄を飛ばしていたといい、ヒミコ亡き後も、国が乱れ、戦争が起きていたと、記録している。

そして、ヤマトの纒向（奈良県桜井市）に都が置かれ、王の墓＝前方後円墳が出現するとほぼ同時に、それまでの争乱が嘘であったかのように、安定した社会が出現していたのである。

強大な権力、強い王が発生し、周辺を力ずくで押さえ込んだというシナリオを想定

すべきだろうか。けれども、ヤマト建国時の王に、権力が集中していたとは考えられなくなっている。

前方後円墳がいい例だ。巨大な前方後円墳が出現したのだから、ついつい力強い王を連想しがちである。けれども、前方後円墳という新たな埋葬形態が、弥生時代後期の日本列島の各地で盛行した埋葬文化を寄せ集めて造られていた可能性が高くなってきている。

前方部の出っ張りは、出雲の四隅突出型墳丘墓から、前方後円墳の墳丘上に並べる特殊器台形土器は吉備から、豪奢な副葬品は、北部九州の埋葬文化に由来すると考えられている。

土器も、東海、北陸、近江、山陰、吉備、河内などから流入していて、都づくりにも、いくつもの地域が参加していたことがわかっている。

問題は、日本列島に稲作が伝わって以降古墳時代に至るまで、人々は互いに覇を競い、中世戦国時代を彷彿とさせるかのような戦いをくり広げていたことである。その彼らが、なぜ突然、ヤマトを作り上げてしまったのだろう。その直後から、争乱がピタッとなくなってしまったのは、なぜだろう。

ここに、「崇る王」というシステムの効能を見る思いがする。「力はないが、手にか

けると何が起きるかわからない恐ろしい王」の存在が、あてどなく続く戦乱を押しとどめたとすれば、このシステムの完成こそ、古代日本人の大発明だったことになるのである。

戦争の始まりは農業を発明したから？

人類が戦争を始めたのは、農業を始めたこととかかわりがあったのではないかとする説がある（『農業は人類の原罪である　進化論の現在』コリン・タッジ著　竹内久美子訳（新潮社）。

理由はいたって簡単なことだ。

それまで狩猟採集（しゅりょうさいしゅう）生活を送っていた人類は、大地を耕し計画的に食料を生産するすべを得て、余剰を生み出し、豊かになり、人口を増やした。

すると今度は、新たな農地が必要となり、お隣の地域の土地を奪い、また、双方で水利をめぐる争いが起きる。こうして戦争が始まり、強い首長が求められていった、ということになる。

ちなみに、マンモスの滅亡も、狩猟採集民が取りすぎたのではなく、「マンモスが滅

亡しても、食いっぱぐれない」と考えた農耕民が、「つい贅沢をしてしまった」から、ということらしい。狩猟民は必要以上の獲物を取れば、自ら首を絞めることになると本能的に理解していた。だから、農耕民の乱獲と農地の膨張は、狂気に思えただろう。

現実に、日本列島では稲作文化がもたらされてからしばらく時間を置いて、戦乱が始まっている。農業が定着し、新たな耕地を求めはじめたのだろう。

具体的には、弥生前期の前半期（紀元前三世紀前半、あるいはさらに遡る可能性がある）の玄界灘や響灘周辺の遺跡から、戦死した遺骨が発見されている。なぜ戦死したことがわかるかというと、鏃や剣の先端が骨に突き刺さったままであったり（骨が腐ってなくなっていても、傍らに破片が転がっている）、首がない死体であったりしたためだ。

ここから、時間の経過とともに、筑紫平野や佐賀平野といった内陸部に戦死した遺骸が広がっていったのである。

この後、戦乱の波は東に伝播し、弥生時代中期になると、瀬戸内海を中心に、防御性の高い高地性集落が無数に造られていった。殺傷能力を高めた鏃（刺さりやすく、大きくなる）も増えていったのである。

中国側の史料にも、日本の戦乱の様子が記録されている。『漢書』地理志には、倭国

は百余国に別れていると記録され、『後漢書』東夷伝によれば、後漢の桓帝から霊帝の間（一四七～一八九年）、倭国は大いに乱れていたという。これがいわゆる「倭国乱」「倭国大乱」である。

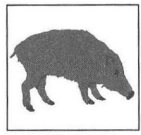
さらに、「魏志倭人伝」には、邪馬台国のヒミコの登場にまつわる、次のような話を載せている。これは、古墳時代の始まる直前の話である。

「その国、元男子を王に立てとどまること七、八十年。倭国は乱れ、抗争をくり返した。そこでともに女王を立てた。名づけて卑弥呼という。鬼道を駆使し、よく民衆を惑わした」

ところが、卑弥呼存命中、邪馬台国の南方の狗奴国の男王と「素より和せず」、つまり、折り合いが付かなかったのだろうか、戦闘がはじまっている。魏は卑弥呼に檄を飛ばしたが、この直後、卑弥呼は亡くなった。男王が立てられたが、国中が服さず、戦乱が起こり、千人ほど戦死者が出たという。そこで、卑弥呼の宗女・台与がにわかに立てられ、混乱は収拾されたという。

この邪馬台国の時代は、ヤマト建国とほぼ同時であり、三世紀に、「王が共立された」ことによって、戦乱は克服されていったことがわかる。

古代日本における戦争の始まり



狩猟民 ← 縄張りと獲物の捕獲量を守る生活



農耕民 → 土地の所有権や水利権など財産や所有の生活

小さな争いごとから戦乱に拡大

＝

「倭国乱」「倭国大乱」…『後漢書』
卑弥呼の時代

神聖な者は恐ろしい人

なぜ三世紀後半、弥生時代の戦乱状態は、収拾されたのだろう。ここに、ヤマトの王の秘密が隠されていたのではあるまいか。

まず指摘しておきたいのは、「天皇は現人神（あらひとがみ）」とされ、恐れられてきたということである。

現人神とは、神が人の姿になってこの世に現れることを言うが、この現人神、「神のように立派な人」だったのかというと、そうではなく、「鬼のようにおそろしい人」を意味しているのではないかと思える節がある。

あまりむずかしく考える必要は無い。日本人にとって神聖な者は恐ろしい者なのだ。ちょっと前までは、町中のあちこちの塀や壁の足元に、鳥居のマークが記されていたものだ。なんのためかといえば、ここで小用を足してしまう不逞の輩を撃退するためのおまじないである。

日本人は、あの鳥居のマークを汚すことに、強い罪悪感を感じてしまうはずだ。罪悪感という言葉は正確ではない。「おそろしい」のだ。

そして、この「深い意味を知っているわけではないが、なぜか、おそろしい存在」「起きるはずもないが、粗末にすれば、罰が当たりそうな存在」が、天皇なのではないかと、疑っているのである。

詳述は避けるが、「神」の一字をあてがわれた天皇と皇族は、「初代神武」「第十代崇神」「第十五代応神」「神功皇后」の四人存在するが、四人に共通するのは、「祟りと密接にかかわっていた」ということで、「現人神」の「神」が、「祟り神」の意味に近かった疑いが強い。それに、「現人神」はのちに「荒人神」とも書かれるようになるのだから、古代人は「アラヒトガミ」を、「立派な方」とは思わずに、「それはそれは恐ろしい人」と、考えていた疑いが強い。

ただし、天皇だけが現人神なのではない。雄略天皇と邂逅した葛城の一言主神、宇佐神宮の祭神・八幡神、住吉大社の祭神・住吉大神、北野天神の祭神・菅原道真も、現人神（荒人神）と考えられていたのである。

神社で祀られる神や、すでに亡くなった菅原道真をも「現人神」と呼ぶのはなぜだろう。くり返すが、「現人神」は、「神なのに人の姿となってこの世に現れたもの」だから不思議なことだ。

そこで、これらの神々は、普通の神ではなく、非常に霊威が強い神だからだろうと、



宇佐神宮（上）の周辺には、現在も特殊神事が残されている

考えられている。この場合、「現人神」は、「荒人神」の意味をさすことになる。そして、「荒人神」とは、ようするに「荒々しいおそろしい神」であり、「祟る神」のことをさしている。

代表的な現人神である住吉大神と八幡神が祟る恐ろしい神であったことは、宇佐神宮周辺に残される特殊神事からも、容易に想像の付くところである。

宇佐八幡宮の祭神は、誉田別尊、比売大神、大帯姫の三柱で、誉田別尊は応神天皇に、大帯姫は神功皇后をさしている（ただし、異論もある）。

宇佐神宮とその周辺では、かつて放生会と行幸会が盛大に執り行われていた。あまりにも規模が大きかったせいか、

往時の祭事が完璧に残されることはなかった。ただ、いくつかの特殊神事が守られている。

これらの特殊神事は、養老四年（七二〇）に大隅と日向の隼人を成敗し、隼人らの鎮魂を目的に始められたとも、あるいは神功皇后の三韓征伐の凱旋を祝って始められたともいうが、はっきりしたことはわからない。けれども、何者かの祟りを恐れていたと思われる。とくに放生会の中で傀儡子舞が演じられるが、登場する傀儡子（人形）は、神功皇后の眷属（一族）の神という設定だ。その人形たちが、東西に分かれ、相撲を行なう。これを古要相撲という。最初は東側の優勢、その後、住吉さま（海神・住吉大神）が出現し、西軍に加勢し、東軍を次々に倒していくのである。

東西の傀儡子の対戦には、深い歴史が隠されていて、それが何を意味しているのかについては、第五章で触れるが、祭りの中で、神々が争い、最後に住吉さまが勝利するという設定には、ひとつの目的があったと思う。それは、住吉さま（住吉大神）の憂さ晴らしの場が、古要相撲だったということである。

神社で執り行われる伝統的な祭りの最大の目的は、おそろしい神に暴れ回っていただき、恵みをもたらす優しい神に鎮まっていただくことだ。そうであるならば、恨みを抱いた住吉さまに、ご機嫌を直していただくのが、古要相撲の目的だったというこ

とになる。

つまり、住吉さまは祟る恐ろしい神だからこそ、祭りの中で、胸のつかえを下ろしていただこうというのである。

やはり、現人神は、祟る神でもあり、そうなると、現人神である天皇は、祟りと無縁ではないことがわかる。

祟る豪族たち

現代風な祟りといえば、動かしてはいけない祠（ほこら）を動かし、壊してはいけない墓地を破壊し、切ってはいけない樹木を切ったために、工事関係者が怪我をしたり亡くなったりしたといった類の話が主流だろうか。ある一定の場所で交通事故が多発するのも、何かの祟りとして語られることが多い。

これに対し、歴史に登場する「祟る話」は、多くの場合、「貴種」「位の高い人物」が、罪なくして殺され、祟って出てくるという話がほとんどである。

その中でも、圧倒的に「皇族」の占める割合が高い。

その例を、いくつかあげてみよう。

日本の歴史の中で、最初に出現する「祟る王（皇族）」は、ヤマトタケル（日本武尊、倭建命）だろう。

ヤマトタケルが祟った話など、聞いたことがないかもしれない。ヤマトタケルといえば、古代史の英雄で、悲劇的な最期を遂げた人物、というのが一般的なイメージだからである。

だがそれは、大きな誤解だ。この人物、古代人なら誰もが震え上がる、おそろしい男だったようなのだ。

われわれがヤマトタケルを悲劇のヒーローと考えるのは、『古事記』に記された後半生の虐げられたイメージが、強烈に焼き付いているからだろう。

ヤマトタケルは南部九州のクマソ（熊襲、隼人）を征討しヤマトに舞い戻ったが、休む間もなく、父（第十二代景行天皇）に東国征討を命じられた。ヤマトタケルは東国赴任に際し伊勢に立ち寄り、倭姫命に向かって、「父は私に死ねといっているのだろうか」と、嘆いたのだった。

そしてこの後、ヤマトタケルは各地の神々の抵抗に遭いながらも奮闘し、東国を平定し終えた。ところが最後に、伊吹山の神の毒気にやられ、ヤマト帰還を夢見ながら、能褒野（三重県亀山市・鈴鹿市）で亡くなられたのである。

この一連の『古事記』の説話を見てくれば、ヤマトタケルが祟る恐ろしい存在とは、とても想像が付かない。だが、ヤマトタケルは正真正銘の、祟り神なのである。

親に放逐されていたヤマトタケル

あまり知られていないが、ヤマトタケルがクマソ征伐に向かわされたのは、彼が強暴で手に負えない性格だったからである。

『古事記』には、次のような話が載っている。

景行天皇は美濃の国造の二人の娘が美人であることを知り、ヤマトタケルの兄・大碓命を差し向け、召し上げさせた。ところが、大碓命は娘たちをわがものにし、ほかの女性を偽って献上した。景行天皇は、その事情を知っていて、献上された女性と閨をともにすることはなかった。

そんなある日、大碓命が朝夕の大御食（食膳）に参上しないことを不審に思い、ヤマトタケル（小碓命）に、

「ねぎらい、教え諭してきなさい」

と命じた。ところが、数日たっても、大碓命は出仕しない。不審に思った景行天皇は、

ヤマトタケルに、わけを尋ねると、

「すでに懇ろに教え諭してまいりました」

というので、どのように教え諭してきたのか景行天皇が問うと、ヤマトタケルは何食わぬ顔で、

「厠で待ち伏せし、明け方やってきたところを捕らえ、押しつぶし、手足をもぎ取り、薦にくるんで投げ捨てました」

と報告したのだった。ようするに、バラバラ殺人をやってのけたわけである。

通説は、この場面でヤマトタケルが「ねぎらう」の「ねぎ」の意味をはき違えたのだというが、それはそうとしても、景行天皇がヤマトタケルの荒々しい性格を恐れたという話の設定を無視することはできない。

ヤマトタケルがこの後、征討戦に明け暮れるのは、景行天皇の恐怖心ゆえである。ヤマトタケルは英雄どころか、親に放逐されたのである。

ヤマトタケルが鬼のようなおそろしい人物であったこと、そのあとの記述からもうかがえる。

ヤマトタケルは大男だったと記されるが、クマソタケルを成敗する時、彼は童女の姿に化けて、敵を欺いたという。これは、単純な仮装ではない。第一、大男が童女の

姿になって、ばれないはずもない。これは、一種の呪術である。

古くは「童女」「童子」は、神聖なものとみなされ、その一方で鬼のようにおそろしい存在で、鬼退治ができるのは、童子、童女に限られると信じられていた。裏返せば、童子や童女は鬼そのものとみなされていたわけで、ヤマトタケルが童女に化けて鬼のようにおそろしいクマソタケルを退治したという説話には、深い意味が隠されていたのである。

ちなみに、昔話に登場する一寸法師（いっすんぼうし）は、住吉大神の申し子なのだが、両親は、いつまでたっても背の伸びない一寸法師を気味悪がり、「こいつは化け物か何か、そういう類にちがいない」と思い、追っ払おうとしたところ、一寸法師が家を飛び出したというのが、本当の話だ。一寸法師の体が小さかったのは、この男が「童子」であり、「鬼」だったからで、だからこそ、鬼退治に活躍したのである。

さらに余談ながら、一寸法師は人を騙してきれいな姫を手に入れたのであり、けっして英雄ではなかったのだ。この点、ヤマトタケルと一寸法師は、どこか似たところがある。

なぜヤマトタケルは祟ったのか

それはともかく、ヤマトタケルは晩年、ヤマトに恋い焦がれ、有名な次の歌「倭は国のまほろば　たたなづく　青垣　山隠れる　倭しうるはし」を残し、能褒野で亡くなる。このとき家族はヤマトから駆けつけ、御陵を作り、水が張られた田を這いずり回り、泣きはらし、ヤマトタケルを偲ぶ歌を作ったという。するとヤマトタケルは「八尋の白ち鳥（白鳥）」となって飛び去ったといい、后や御子たちは、小竹（篠）の切り株で足を傷つけても、痛みを忘れて泣きながら追ったという。

問題は、この時彼らの歌った「ヤマトタケルの死を悼む歌」が、歴代天皇の葬儀の場で歌われ続けてきたという事実である。

なぜ、ヤマトタケルは、特別扱いされたのだろう。通説は、「ヤマトタケル説話は絵空事」と言い、ほとんど関心を示さない。しかし、天皇家がヤマトタケルを重視し、忘れられなかった事実を無視することはできない。ヤマトタケルの死を悼む歌を、なぜ千年以上、歌い続けたのだろう。

興味深いのは、後の世に、ヤマトタケルが祟って出たことである。

『続日本紀』大宝二年（七〇二）八月八日の記事に、次のようなものがある。

倭建命の墓に震す。使を遣して祭らしむ。

すなわち、ヤマトタケルの陵墓が鳴動し、あわてて使者を遣わして、丁重に祀った、といい、またこの直後、持統太上天皇は老骨に鞭打ち、東国行幸を敢行している。持統太上天皇の行動は、ヤマトタケルを意識したものと思われる。

この記事にかかわりがあると思うのは、草薙剣が祟ったという話である。

時代は少し遡る。天武天皇の晩年、天武天皇が病の床に伏せり、その原因を占ってみると、草薙剣の祟りによるという結果が出たという。そこで、宮中で祀られていた草薙剣は、急遽東国に移しやられた、というのである。

草薙剣を手放したことによってヤマトタケルは、伊吹山の悪神の魔の手にかかった。一方天武天皇は草薙剣におびえ、また、天武の皇后であった持統も、そしてこの後の歴代天皇も、なぜかヤマトタケルの霊威に震え上がっているのである。

なぜ、ヤマトタケルは恐れられたのだろう。なぜヤマトタケルは、祟ると信じられていたのだろう。

ヤマトタケルが有する二面性



ヤマトタケルが童女に化けてクマソタケルを成敗する

二面性を持つ

「童女」「童子」

退治

恐ろしい ⟷ 神聖（正反対）

ヤマトタケル

鬼

クマソタケル

祟る神功皇后と宗像神

祟る皇族の二番手は、神功皇后である。

『続日本後紀』の承和十年（八四三）四月条、『三代実録』元慶元年（八七七）七月条には、神功皇后が祟ったという記事が載り、山陵に使者が遣わされ、丁重に祀ったと記されている。

神功皇后といえば、第十五代応神天皇の母であり、夫はヤマトタケルの子・仲哀天皇である。祟るヤマトタケルの家系に、神功皇后は組み込まれ、やはり祟る人物と見なされていたわけである。

ところで、先述の宇佐八幡の祭神・誉田別尊は神功皇后の息子だが、北部九州を代表する神社・宗像大社の伝承によれば、宗像（女神）の子が住吉神で、住吉神の子が宇佐（誉田別尊）だという。そして、宗像三神（田心姫・湍津姫・市杵島姫）も、祟る神であったと『日本書紀』には記されている。

履中五年三月条には、宮中に宗像神が現れ、

「なぜ私の民を勝手に使役するのだ。おまえに恥をかかせてやる」

と呪ったという。そこであわてて祈祷をしたが、宗像神を祀らなかった。すると九月、妃のひとりが急死し、天皇は悔いたというのである。

さらに、雄略九年二月条には、宗像の神を祀るために使者を送ったが、使者は同行した采女（うねめ）を神前で手込めにしてしまった。神は怒り、雄略天皇が新羅（しらぎ）征討を目論んだが、これを許さなかったという。

祟る神功皇后は、祟る宇佐八幡、祟る宗像大社と強い因果で結ばれていた。すると、ここに、「祟りのトライアングル」を見出すことができる。これはいったい何だろう。

『日本書紀』や『古事記』の記事を信じるならば、神功皇后は北陸から北部九州に赴き、かの地を平定し、その勢いをもって朝鮮半島に遠征を敢行。凱旋後は瀬戸内海を東に向かい、ヤマトの政敵を蹴散らし、摂政（せっしょう）として六十九年間君臨した歴史の勝者であり、恨みを抱く必要もない。

それにもかかわらず、神功皇后の身辺に「祟り」にまつわる民間伝承が残り、九世紀の朝廷まで震え上がっていたのは、なぜだろう。

神功皇后の悲劇は、正史から抹殺されたが、人々の記憶にしっかり留められていた、ということであろう。

宇佐神宮の放生会では、宇佐神宮の御神体「薦枕（こもまくら）」を海に放つのだといい、御神体

はかならず「東」に向かって流れていくのだという。この話、『日本書紀』の記事とは裏腹に、神功皇后の一行が、ヤマトへの帰郷を夢見ながら、望みは叶えられなかったことを暗示しているのではあるまいか。だからこそ、神功皇后や宗像神は、祟ると恐れられたのだろう。

なぜ聖徳太子は童子姿なのか

次に歴史に登場する祟る皇族といえば、聖徳太子である。

ヤマトタケルにもまして、聖徳太子といえば、古代史の英雄というイメージが強い。したがって、聖徳太子が祟っていたなどと言い出せば、首をかしげられるかもしれない。けれども、聖徳太子が恐れられていた証拠は、いくつもある。

まず、『日本書紀』に描かれた聖徳太子の誕生場面、幼少時の描写からして、じつに怪しい。

推古元年（五九三）夏四月、推古天皇は聖徳太子を皇太子と摂政に定め、万機を委ねたとあり、聖徳太子出生の詳細を述べる。

聖徳太子の母は用明天皇の皇后・穴穂部間人皇女で、母は出産予定日に宮をめぐり、

馬屋の戸にあたって、その拍子に聖徳太子を産み落としたといい、この話は、中国に伝わっていたキリスト教（景教）のキリスト生誕説話を元に創作されたとされている。

聖徳太子は生まれた直後から言葉を発し、聖の智があったという。成長すると、一度に十人の訴えを聞き漏らさず、予知能力があったという。

このように、聖徳太子は生まれながらにして聖者の資格をもっていたのだが、『日本書紀』の中でこれほどまでに、神聖視された人物は、他にいない。

いったい、聖徳太子がどのような業績を残したのか、はっきりとわからないとされている。ところが、『日本書紀』は、必要以上に聖徳太子を礼賛している。聖徳太子は仏教興隆に尽力したが、だからといって出家したわけではない。在俗の為政者であるにもかかわらず、聖者扱いされる者は、たいがいの場合、非業の死をとげた者だ。しかもそれは、罪なくして殺されたことで、自分を陥れた張本人に対して、恨みを抱いている者が多いのである。

つまり、『日本書紀』の異常なまでの太子礼賛には裏があって、聖徳太子に対し、『日本書紀』編者や時の権力者が、やましい心をもっていたのではないかと思えてくる。過剰な礼賛が、かえって疑わしいのである。

具体的に言えば、「祟る聖徳太子」を連想するのである。

たとえば、聖徳太子は物部守屋討伐戦に参加しているが、このとき聖徳太子は、「鬼の姿」をしている。

守屋を滅ぼした最大の功労者は聖徳太子であったと、『日本書紀』はいい、聖徳太子が呪いをかけたという。この時聖徳太子の髪型を、童子の束髪於額と言及しているのは、聖徳太子が「鬼の物部氏」を成敗した「童子」だったからだろう。

すでに触れたように、童子は鬼と同等の鬼を意味するのであり、聖徳太子は鬼と見られていた可能性が高い。

聖徳太子の母の名の「神前」をわざと「鬼前」と呼ぶ金石文があったり、聖徳太子ゆかりの寺々で、聖徳太子が童子姿で祀られる例が多いのも、聖徳太子を「おそろしい鬼」とみなしているからだろう。「おそろしい鬼」とは、ようするに「祟る者」のことをいっている。

『日本書紀』に描かれた聖徳太子の死も、尋常ではない。

推古二十九年（六二一）春二月、聖徳太子は亡くなる。この時、諸王・諸臣および天下の農民たちは、悲嘆に暮れた。老人は愛しい子を失ったように悲しみ、塩や酢をなめても味がわからず、幼い者は慈しむ父母を亡くしたように泣きはらし、その声は巷にあふれた。耕す者、稲つく女は手を休めた。



聖徳太子二王子像（御物唐本御影）。右が太子の子・山背大兄王、左が弟の殖栗王といわれている。

「太陽や月は輝きを失い、天と地が崩れたようになってしまった。これから先、誰を頼りにしていけばいいのだろう」

と人々は話し合ったという。

こののち、太子礼賛と死を嘆く記事は、さらに続くのである。

やはり、これは不自然である。『日本書紀』を記した八世紀の朝廷は、何かを隠している。

聖徳太子に寵愛されていたという秦氏（はたし）は、京都太秦（きょうとうずまさ）に広隆寺（こうりゅうじ）を建立したが、この寺の本尊は聖徳太子三十三歳像で、歴代天皇は即位儀礼に用いた服を、この本尊＝聖徳太子に送り続けている。したがって、広隆寺の聖徳太子像は、新帝誕生のたびに、「もうひとりの王」として、即位儀礼を行なっていたのだ。

聖徳太子は、死してのち、「永遠の王」であるかのように、即位し続けているのである。

『日本書紀』の記事を信じるならば、聖徳太子は皇太子のまま病没したのであり、即位できなかった恨みを抱いて亡くなったわけではない。ところが、歴代天皇は、自らの即位にはばかりを感じているかのように、儀礼に用いた服を送り続け、聖徳太子を即位させている。

童子のような聖徳太子は、やはり、祟る鬼である。

問題は、なぜ聖者のような聖徳太子が「祟る人」と目されていたのか、ということになるが、その理由については、ここでは割愛する（詳細は『大化改新の謎』ＰＨＰ文庫などを参照していただきたい）。

祟る長屋王

次の祟り神も、「この人物は祟った」と正史に記されたわけではない。朝廷は認めないが、他の文書や状況証拠から見て、明らかな祟り神なのだ。それが、天武天皇の孫の長屋王である。

長屋王は、藤原氏が権力の中枢に登りつめつつあったその時、反藤原派の旗頭として、また、反骨の皇族として頭角を現したのだった。だが、朝堂独占の野望に燃える藤原氏（藤原不比等の四人の子、武智麻呂、房前、宇合、麻呂）は、天平元年（七二九）二月、いうことを聞かない厄介者を、陰謀にはめて一族滅亡に追い込んでしまったのである。そして、一族の遺骸は生駒山に葬られたと、『続日本紀』はいう。

長屋王が無実の罪で殺されたことは、正史も認めている。

そして、藤原四兄弟はわが代の春を謳歌していたが、天平九年（七三七）、藤原四兄

弟は九州から伝染してきた天然痘の病魔に襲われ、一気に全滅してしまったのである。

正史は、これを「長屋王の祟り」とは記録しない。だが、この時代、疫病は悪神がもたらすものと考え、また、祟りとも信じられていた。長屋王の死から八年後というタイミングが絶妙で、しかも長屋王を追いつめた張本人たちが狙い撃ちされたように葬り去られただけに、誰もが、震え上がったにちがいないのである。

仏教説話集『日本霊異記』には、長屋王が館を囲まれた時、「罪なく捕らえられるのなら」と、子供たちに毒を飲ませ絞め殺し、自らも毒をあおって亡くなったとある。その遺骸は生駒山ではなく、平城京の外に持ち出された。焼かれ、砕かれ、その灰を河や海に捨てたのだという。ただし、長屋王の骨は、土左国（高知県）に流された。ところが、農民がばたばたと死に、「長屋王が祟っている」と、大騒ぎになった。そこで朝廷はやむなく、遺骸を紀国（和歌山県）の小島に移したのである。

このように、長屋王は祟る恐ろしい存在と、誰もが考えていたのだろう。当然、藤原四兄弟の全滅も、長屋王の祟りと恐れられただろう。正史がそれを認めず、無視するのは、長屋王が藤原四兄弟に祟ったと記録してしまえば、藤原氏の陰謀が露見するためであろう。

井上内親王の悲劇を招いた天智と天武の確執

平安京遷都（七九四年）で名高い桓武天皇も、「祟る王」におびえた人物であった。桓武天皇といえば、平安京遷都を成し遂げた偉大な王として知られるが、実際には、祟りがおそろしくて、旧都に住んでいられなくなった可能性も高い。

桓武天皇が恐れたのは、井上内親王（内親王とは天皇の娘のこと）の祟りである。ただし、井上内親王の祟りの真相を知るためには、すこし時間を遡り、遠回りをしておかなければならない。

それは、近江の大津（滋賀県大津市）に都を定めた第三十八代天智天皇（中大兄皇子）と大海人皇子（のちの第四十代天武天皇）の兄弟の話だ。

二人は仲が悪く、この後の王家は、天智系と天武系に別れていく。ここに、この時代の悲劇が横たわっていたのである。

『日本書紀』によれば、大海人皇子は天智天皇の弟で、皇太子だった。ところが天智天皇は晩年、息子の大友皇子の即位を願うようになり、大海人皇子は身の危険を感じ、出家して吉野に隠遁したのだった。

天智天皇の崩御ののち、大津宮の大友皇子と大海人皇子は、一触即発の危機に直面した。天智天皇→大友皇子のラインは人気がなく、大海人皇子の即位を願う人々が多かったためである。

そして、大海人皇子は東国に逃れ、一気に近江朝を攻め滅ぼした。これが、いわゆる壬申の乱（六七二）だ。

大海人皇子は都を飛鳥（奈良県高市郡明日香村）に戻すと、即位する。天武天皇の誕生である。

天武天皇の王統は、曾孫の聖武天皇の娘、称徳天皇の時代まで続く。称徳天皇は独身女帝で、子がなかったから、ここで皇位継承問題が勃発し、藤原氏が後押しする光仁天皇が即位した。この人物は天智系で、天武の王家はここで途切れたのである。

ただし、藤原氏は「親天武系」の人々を懐柔するために、光仁の皇后（正室）には、井上内親王を、皇太子には、内親王の子の他戸親王を立てた。

井上内親王は聖武天皇と県犬養広刀自の間に生まれた女人で、斎王に選ばれ、伊勢に赴任していたが、弟の安積親王が急死し、都に呼びもどされた。

安積親王は有力な皇位継承候補だったが、藤原腹でなかったことから、藤原氏に睨まれ、暗殺された疑いが強い。手を下したのは藤原仲麻呂（のちに恵美押勝を名乗り、

専横を極める）であろう。このことは、正史には記されていないが、暗殺説はほぼ通説も認めている。

桓武天皇がおびえた井上内親王の祟り

それはともかく、井上内親王は弟の死後、天智系の白壁王に嫁ぎ、他戸王を生む。つまり、この白壁王がのちに即位する光仁天皇である。

天武系から天智系への王家の入れ替わりには、藤原氏が深く関与していた。

藤原氏が出世の糸口をつかんだのは、中臣（藤原）鎌足が天智天皇（中大兄皇子）に近侍し、蘇我入鹿暗殺（乙巳の変）を敢行したことによるが、大友皇子の滅亡によって一度没落している。かたや大海人皇子は、蘇我氏と目に見えぬ糸で結ばれていた。したがって藤原氏は、明らかに「親天智派」で「反天武派」であったから、天武系王家の断絶、天智系王家の復活は、長年の夢であった。

そして、だからこそ、天武系でしかも県犬養の血を引く井上内親王は、「皇后に立てざるを得なかったが、邪魔な存在」であり、いつか排除しなければならぬ宿敵だった。この母子を排除すれば、天武系の血筋を完璧に消し去ることができるのである。

井上内親王を追い落とすのに、「陰謀」と言えるほど、手の込んだ策略が用いられたわけではなく、ほとんど言いがかりといっても良かった。

宝亀三年（七七二）三月、井上内親王とともに巫蠱（呪い）を行っていたという人物が「自首」してきたことによって、井上内親王は皇后位を剥奪されてしまった。事件はでっち上げだった。その証拠に、親王とともに呪いをかけていたはずの密告者は、処罰されるどころか、すぐに出世してしまっていたのである。

二ヶ月後、今度は他戸王も、「厭魅大逆（妖術を用いて君主を呪うこと）」に加わった罪で、廃太子を言い渡された。

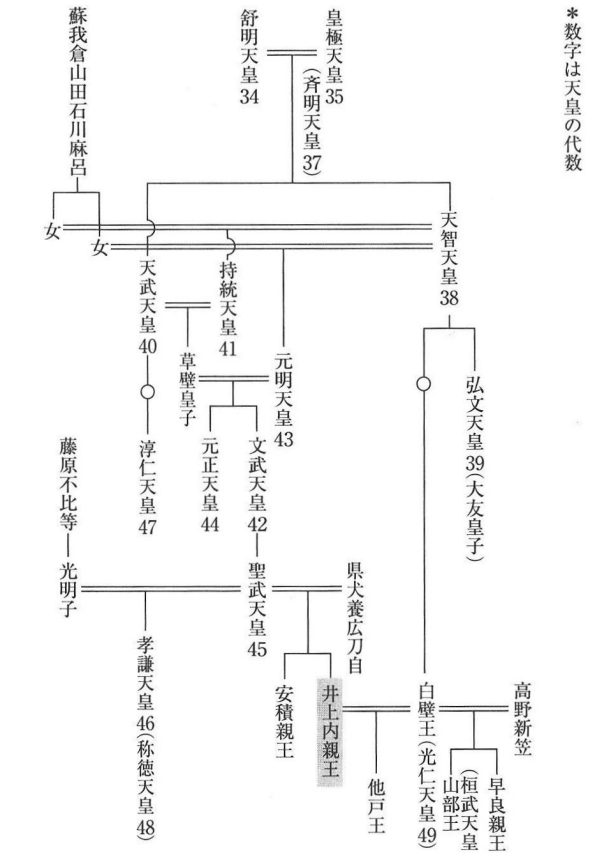
父親の光仁天皇は、次のように言う。

「皇太子他戸は、母井上内親王とともに厭魅大逆を何度も行っていた。皇位はわたくし個人のものではなく公のものだ。私情でわが子を皇太子にすることはできない。謀反大逆の子を皇位につければ、後の世に平穏をもたらす政治はできない」

天智系の光仁天皇と藤原氏が手を組み、天武系の皇后と皇太子を、潰しにかかったということになる。そして、事件はこれで終わったわけではない。

翌年十月、井上内親王は、懲りずに光仁天皇の親族を呪い殺したのだと、いいがかりをつけられ、母子は捕らえられた。

井上内親王の系譜


＊数字は天皇の代数
蘇我倉山田石川麻呂
女
女
舒明天皇34
皇極天皇35
（斉明天皇37）
天智天皇38
天武天皇40
持統天皇41
草壁皇子
元明天皇43
元正天皇44
文武天皇42
聖武天皇45
淳仁天皇47
藤原不比等
光明子
孝謙天皇46（称徳天皇48）
県犬養広刀自
安積親王
井上内親王
他戸王
弘文天皇39（大友皇子）
白壁王（光仁天皇49）
高野新笠
早良親王
（桓武天皇50）
山部王

大和国宇智郡に幽閉された二人は、二年後まったく同じ日に亡くなっている。密殺されたのだろう。

『公卿補任』はこの悲劇を、「藤原の策謀だった」と記録し、『本朝後胤紹運録』には、母子は獄中で亡くなり、竜になって祟って出たといい、『水鏡』は、井上内親王の祟りに、「藤原」は苦しんだと記されている。

のちに御霊信仰が隆盛すると、井上内親王と他戸親王は祟り神として御霊神社（奈良市）で丁重に祀られることとなる。

この母子は、祟る恐ろしい皇族の代表例と言っていい。

そしてなぜ、桓武天皇の話をする前に、この母子の話をしたかというと、皇太子・他戸親王が排斥された結果、光仁天皇と高野新笠の間の子・山部王が皇太子に冊立されたからだ。山部王こそ、のちの桓武天皇なのである。

つまり、桓武天皇は直接の加害者ではないが、当事者のひとりということができよう。

藤原氏は山部王立太子のために、邪魔者を排除したのだから、桓武天皇はそのことを承知していて、井上内親王と他戸親王の祟りに怯えていた可能性が高いのである。

早良親王の恨み

祟る天皇の代表的な例は崇道天皇である。この人物は、平安京遷都を敢行した桓武天皇の弟なのだが、崇道天皇（早良親王）は兄を恨み、祟り、都中を恐怖のどん底に突き落としたのだった。

いきさつは以下の通り。

平安京遷都といえば、西暦七九四年の出来事だが、平城京（奈良県奈良市）から直接この地に移ってきたのではなく、その前に延暦三年（七八四）から、平安京の南西側で長岡京の造営工事が進められていたのだ、十一月には平城京は捨てられ、桓武天皇は工事中の長岡京に引っ越していた。

ところが、アクシデントによって、工事は中断されてしまう。延暦四年（七八五）四月、桓武天皇が都を留守にしていた時、工事責任者で、桓武天皇の寵愛していた中納言藤原種継が、何者かの手で射殺されてしまったのである。

正史『続日本紀』によれば、首魁は藤原種継と同じ中納言で東北に赴いていた大伴家持だったという。すなわち、大伴家持は皇太子の早良親王をそそのかし、藤原種

継暗殺計画を練っていたというのである。

事件勃発当時、すでに大伴家持は任地で死んでいたが、共謀者はみな捕らえられ、早良親王は廃太子の上、淡路配流と相成った。

だが、この事件には裏があったようなのだ。というのも、大伴家持は早良親王の春宮大夫（皇太子の身の回りの世話をする役人）だったから、もちろん早良親王派で、東北に赴任させられたのは、左遷と見られる。

桓武天皇と早良親王は、何かしらの政争に巻き込まれた可能性が高い。早い話、皇位継承問題が持ち上がり、早良親王は抹殺された可能性が高い。そして裏から操っていたのは、大伴家持というよりも、藤原氏だったと考えられる。

藤原種継でさえも、他の藤原氏から「ひとり勝ちは許されない」と、邪魔にされていた疑いがある。種継の母は山背に広大な領地を有していた秦氏だったから、長岡京遷都が成功すれば、藤原種継と秦氏の繁栄は盤石なものになってしまうという読みが、「その他の藤原氏」にはあったのだろう。彼ら「反種継派」は、早良親王を排斥し、桓武天皇の子の安殿親王の即位を願ったと思われ、早良親王の配流によって夢は叶うのである。

そして、早良親王は、淡路国に送られる途次、抗議の断食を始め、そのまま亡くなっ

てしまうのである。

早良親王が訴えたかったことは、身の潔白であったろう。そして、この訴えは、早良親王の死後、証明される。

延暦七年（七八八）、桓武天皇の縁者が、次々に亡くなっていった。后・旅子、早良親王の母・高野皇太后、安殿や賀美能親王の母で桓武天皇の皇后・乙牟漏である。桓武天皇には、「心当たり」があったのだろう。早良親王の御陵のある淡路国府に命じ、御陵に塚守を置き、周辺での殺生を禁じた。

つまり、早良親王の「恨み」「祟り」を、桓武天皇は恐れたことは明らかだ。早良親王を罠にはめたことを、桓武天皇自身が承知していたからこそ、縁者の死に、早良親王の祟りを連想したのである。

しかしこれだけで早良親王の祟りがおさまったわけではなかった。延暦九年（七九〇）の秋から冬にかけて、天然痘が流行した。この時代、天然痘は、悪神や祟り神がもたらすおそろしい病気と考えられていた。

また、安殿親王の体調が思わしくなかったので、占ってみると早良親王の祟りとわかった。安殿は伊勢神宮に参拝、桓武天皇は改めて早良親王を祀ったという。そうして、早良親王に「崇道天皇」の尊号が送られ、淡路国に寺院が建立されたのである。

蘇我入鹿は祟る鬼

このように、古代史の中で「祟る人」は、罪なくして政敵に葬り去られ、あるいは恨みを抱いて亡くなっていった人だったことがわかる。そして、「祟る人」は、皇族に限られていたところに特徴がある。

ただし、例外がある。それが、蘇我入鹿と菅原道真、そして平将門（たいらのまさかど）なのだ。だが、この三人には、はっきりとした「祟る理由」があって、しかも彼らは普通の豪族ではない。神話の神々や皇室と、少なからず因縁があったところに特徴がある。

そこで、順々に彼らの祟る理由を探ってみよう。

さて、一般には、蘇我入鹿が祟って出ていたことは、あまり知られていない。だが、古くは、「蘇我入鹿は鬼」と恐れられていた気配がある。

蘇我入鹿と言えば、西暦六四五年に中大兄皇子と中臣鎌足に殺された、古代史最大の悪人として知られる。

『日本書紀』には、蘇我入鹿は専横をくり広げ、改革事業の邪魔になったとある。王家を蔑（ないがし）ろにしたばかりか、王位を狙っていたという。この皇室の危機に立ち上がった

のが中臣鎌足であり、協力したのが、中大兄皇子である。

『日本書紀』の記事を信じる限り、蘇我入鹿は大悪人であり、守旧派なのだから、殺されても仕方ない人物だった、ということになる。したがって、祟って出てくるいわれはないし、それが本当ならば、逆恨み、ということになる。

では、蘇我入鹿はどのように化けて出たのだろう。

『日本書紀』斉明元年（六五五）五月の条には、奇妙な記事が載る。大空に竜に乗った男が現れた。身なりは唐人に似ていて、青い笠をかぶり、葛城山から生駒山に飛び、さらに、住吉の方角に向かって去っていったという。この男、笠をかぶっているところから見て、鬼と考えられる。古くは簑や笠を着て隠す者を鬼とみなした。

ちなみに、ときの斉明天皇は、蘇我入鹿の暗殺劇を目撃した皇極天皇（重祚して斉明天皇）と同一人物である。

それはともかく、斉明七年（六六一）、斉明天皇は、百済救援の遠征軍を指揮するため、九州の朝倉橘広庭宮（福岡県朝倉市）に赴き、ここで亡くなるが、死の直前、例の奇妙な鬼が、再び現れる。

宮を建てるために神社の木を伐採したところ、神が怒り、雷を落としたといい、宮中に鬼火（人魂か）が現れたという。そして、近侍の者がばたばたと死んでいったと

いう。この事件の二ヶ月後、斉明天皇も崩御されたのである。

この時、朝倉山の上に大笠を着た鬼が現れ、葬儀の様子をじっと見守っていたという。じつに不気味な鬼ではないか。

平安時代末期に記された『扶桑略記』には、この『日本書紀』の記事とそっくりな説話が載っている。そして、件の笠をかぶった鬼をさして、「それは蘇我」と言い、斉明天皇の側近たちが亡くなったことについて、「豊浦大臣の霊魂の仕業」と断言している。豊浦大臣とは、蘇我入鹿（あるいは蝦夷）のことをさしている。

このように、のちの時代、蘇我入鹿は祟る鬼と考えられていたことがわかる。

しかし、不可解なのは、「祟る者は、罪なくして殺され、だからこそ恨みを抱く」のだから、蘇我入鹿には祟る資格がなかったはずなのである。

しかし、他の拙著の中で繰り返し述べてきたように、蘇我入鹿は『日本書紀』の言うような悪人ではなく、むしろ改革派で、守旧派の中大兄皇子や中臣鎌足に殺され、しかも、改革事業の手柄を横取りされていたのではないかと、筆者は疑っている。

ピンポイントで政敵に祟った菅原道真

皇族でない者で、祟って出て人々を恐怖のどん底に突き落としたのは、蘇我入鹿ともうひとり、菅原道真である。

菅原氏は儒官を輩出する一族で、菅原道真も優秀な学者だったが、宇多天皇に見出され、政治家として頭角を現した。ちなみに宇多天皇は、一度臣籍降下し、「源氏」を名乗っていたが、ひょんなきっかけで皇位についた人物である。また、藤原腹ではなく、藤原氏に対し恨みを抱き（阿衡事件）、藤原時平と衝突していた。そこで菅原道真は頼りにされ、反藤原派の旗頭となった。また、菅原道真は娘を後宮に入れるなど、権力基盤を着々と築いていったのである。

宇多天皇は三十一歳で退位し、上皇になると、菅原道真を幼い醍醐天皇の後見役に指名し、右大臣に抜擢した。ただし、政敵・藤原時平は左大臣だったから、道真が絶大で、安定した権力を握ったわけではなかった。また一方で、「他者との共存を拒む藤原氏」は、当然のことながら、菅原道真追い落としの陰謀を企てていくのである。

延喜元年（九〇一）、藤原氏の策によって、菅原道真は九州大宰府に左遷させられる。

菅原道真は、次の歌、

東風吹かば　にほひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春を忘るな

を残し、都を去ったのである。

ところで、菅原道真は左遷される直前まで、画期的な行政改革を断行していたのではないか、とする説がある。それが平田耿二の『消された政治家菅原道真』（文春新書）だ。十世紀に古代の延喜の改革と呼ばれる大転換があって、これまで、藤原時平の手腕と考えられてきた。ところが、もともとの立案者は菅原道真で、改革事業を断行しようとしたその時、藤原時平は道真を左遷に追い込み、その上で手柄を横取りし、歴史から道真の業績を抹殺したというのである。

もしこれが本当なら、「祟る菅原道真」の理由もはっきりとする。

菅原道真は大宰府の次官という地位で九州に赴いたが、実際には幽閉で、その生活は悲惨なものであった。

雨漏りする部屋で石を焼いて暖をとり、脚気と皮膚病に苦しんだ。また、子供たちも地方に流された。

道真の朝廷に対する恨みは強く、深かった。そして、左遷から二年後の延喜三年（九〇三）、菅原道真は、都の藤原氏を恨み、憤死した。藤原氏は邪魔者が消え、安堵するのである。

ところが、延喜八年（九〇八）から先、都で異変が相次ぐ。まず、菅原道真左遷の謀略に一枚噛んでいた藤原菅根が急死、翌年には首謀者の藤原時平が三十九歳の若さで亡くなった。

延喜二十三年（九二三）、醍醐天皇の皇太子保明親王が二十一歳の若さで急死してしまう。醍醐天皇は、藤原時平の讒言を信じ、菅原道真を排除した天皇である。

人々は、「ついに復讐が始まった」と考えたのであろう。『日本紀略』は、

世をあげて云ふ。菅帥の霊魂の宿忿のなす所なり

つまり、菅原道真の宿忿が原因なのだ、と語りあったという。崇る菅原道真像の完成である。

恐れおののいた朝廷は、菅原道真を右大臣に復し、正二位を追贈した。そして、左遷の詔を捨てたのである。

だが、菅原道真の祟りは、これで終わったわけではない。これから二年後、保明親王と藤原時平の娘の間にできた子で、皇太子の慶頼が急死、さらに五年後、都の上空ににわかに黒雲がわき起こり、宮中の清涼殿（天皇の日常の公務を営まれる建物）に落雷があり、菅原道真のライバルだった藤原清貫が即死した。ショックからだろうか、直後に醍醐天皇も崩御され、ピンポイントで道真の政敵が滅ぼされていくさまに、朝廷は恐怖のどん底に突き落とされた。

正暦四年（九九三）、菅原道真に正一位・左大臣が追贈され、それでも足りないと考えたのか、太政大臣の位が贈られている。

蘇我氏と菅原道真が出雲とつながる謎

祟って出た蘇我入鹿と菅原道真。

二人には、いくつかの共通点が隠されている。

まず第一に、両者ともに改革事業に専念していたこと、それにもかかわらず、政敵（どちらも藤原氏だが）に手柄を横取りされ、さらに、改革派であったことも、歴史から抹殺されてしまったことである。

それどころか、蘇我入鹿は、中臣鎌足の子の藤原不比等が朝堂のトップに躍り出た頃編纂された『日本書紀』の中で、守旧派の首魁として、大悪人に仕立て上げられてしまったのである。

つまり、二人とも歴史の敗者で、しかも政敵に恨みを抱いて亡くなったと、誰もが感じていたから、何か事件が起きるたびに、「あいつの仕業だ」と、「祟る人」と考えられるようになったのである。

そして第二に、両者ともに、なぜか神話の「出雲」と深くつながっていたことなのである。

蘇我氏と出雲のつながりについては、他の拙著の中で繰り返し述べてきた。出雲大社本殿真裏のスサノオを祀る摂社が素鵞社であること、スサノオの最初の宮「須賀宮」の「スガ」が音韻変化して「ソガ」になったであろうこと、飛鳥も出雲の「スガ」とかかわりがあること、七世紀の蘇我氏が、出雲で盛行した「方墳」を独占的に造営していたことなどである。

このため、蘇我氏は出雲系ではないかと、指摘してきた。ここに言う「出雲」とは、島根県東部の狭い意味での「出雲」ではなく、弥生時代後期に四隅突出型墳丘墓文化圏でつながっていた山陰地方と越（北陸地方）を含めた、日本海地域を言っている。

蘇我氏の勃興は、六世紀初頭、越から継体天皇がヤマトに乗り込んでからのちのことで、蘇我氏は日本海と東国の利害を代弁する一族だと、筆者は考えている。

では、菅原氏の場合はどうだろう。

菅原氏の祖は土師氏で、この一族は出雲からやってきたと『日本書紀』は言う。

『日本書紀』垂仁天皇七年七月七日の条に注目してみよう。

第十一代垂仁天皇の父・第十代崇神天皇は、実在したヤマトの初代王と考えられているから、この記事は、ヤマト建国直後の話ということになる。

さて、ヤマトの当麻に天下一と名高い強者当麻蹶速がいることを知った垂仁天皇は、蹶速にかなう者はいないものかと探し求めた。すると、出雲に野見宿禰がいることを知り、二人の力比べを行わせてみたのだった。

この戦いを制した野見宿禰は、宮廷に仕えるようになり、また、垂仁天皇の皇后の逝去に際しては、殉死の風習を改める妙案を献策する。人身御供の埴輪を陵のまわりに並べてはどうかといい、策は取り入れられた。

このため、野見宿禰は埴輪をつくる「土師部」を出雲から呼び寄せ、野見宿禰には「土師臣」の姓が与えられたのである。

問題は、土師氏の祖が天穂日命で、出雲国造家と同族であること、『日本書紀』の掲

祟る蘇我氏と菅原氏の共通点

蘇我氏	菅原氏
共に藤原氏によって滅ぼされた歴史的敗者で恨みを抱いている	
「出雲」と深くつながる	
日本海と東国の利害を代弁する一族	祖先の土師（はじ）氏は出雲出身の一族

彼らが祟る存在で
出雲と結ばれていたことに
深い意味があった！？

げる系譜を信じるならば、出雲国造家は天皇家と同族ということになる。また、出雲国造家の祖は、出雲乗っ取りのために出雲に送り込まれるが、出雲神と同化してしまうという不思議な役回りを演じている。

そして、土師氏は桓武天皇の時代、菅原氏に姓を改めたのである。

このように、蘇我氏と菅原氏は、ただの豪族ではない。神話の世界の出雲と、深く結びついた人々だったことがわかる。

かつて、「出雲」と言えば、神話の世界の絵空事と信じられていた。しかし、山陰地方の開発が進み、各地で発掘調査が行なわれ、弥生時代後期の山陰地方に、けっして侮れない勢力が実在したこと、しかも、ヤマト建国にかかわりをもち、しかもヤマト建国後、なぜか没落していたこともわかってきたのである。

この経過、神話の世界の「国を譲り渡した出雲神」の姿に似ている。そして、第三章でも触れるように、ヤマト朝廷は、なぜか出雲の神々を恐れ続けたのである。

したがって、蘇我氏や菅原氏が祟り、人々に恐れられたこと、しかも彼らが「出雲」と強く結ばれていたことに、「祟り」の深い意味が、隠されているように思えてならないのである。

祟る平将門

古代を代表する「祟り神」と言えば、あともうひとり、有名人がいる。それが、平将門（？～九四〇）である。

平将門といえば、十世紀半ばの坂東（関東）で、反乱を起こし、新皇（新たな王）を自称し、関東の独立を目指したことで知られる。もちろん、天慶三年（九四〇）に鎮圧されるのだが、のちに祟って出たとされている。

平安時代は、蝦夷征討を除けば、おおむね「平安」な時代というイメージがある。しかし、律令制度の諸矛盾は、地方経済を疲弊させていた。国司や郡司の不正行為に対する不満は、蓄積される一方であった。

承平年間（九三一～九三七）には、坂東や西国で、徐々に、不穏な空気が漂い始めていた。そして、天慶二年（九三九）、平将門は、坂東の独立を目論み、挙兵したのだった。関東に境を接する信濃国の国府が、「坂東が平将門らによって攻略された」と、報告してきたのである。

この時、平将門は無位無冠で、朝廷側からは、「武夫」と呼ばれていた。中央の貴種

が地方に下り定着し、土豪らと力を合わせ、強大な勢力を確保しつつあったのである。

平将門は、祖父の代に都から上総に赴任し、土着化した。だから、平将門は、都人が「東夷」と蔑んだ坂東で生まれ、育った人間である。

坂東の地は、ヤマト建国以前、縄文的な文化が残存する未開の地であったとされている。そして、ヤマト建国後、西から多くの文物と移民が流れ込み、一気に発展し、人口を増やしていく。そして、五世紀になると、朝廷の軍事力として期待されていくようになったのである。

さらに、八世紀に東北蝦夷征討が本格化すると、坂東の民が狩り出され、征討に向かわされ、兵糧を提供したのである。

このように、古代の坂東は、常に朝廷に対する不満を抱えた地域となっていったのである。特に蝦夷征討が始まって以降の坂東は、虐げられ、鬱屈した社会になっていったのであり、この不満を吸収し、爆発させたのが、平将門だったわけである。

つまり、時代の流れから見て、正義は平将門にあったといえる。だからこそ、平将門は殺されたのち、大いに祟って出たということになる。

祟る人が天皇や出雲とかかわった謎

平将門を祀る神社として名高いのは、神田明神（東京都千代田区外神田）で、祭神は大己貴命と平将門だ。江戸時代に至って、幕府が坂東の地に開かれると、信仰はさらに厚みを増したようだ。

関ヶ原の合戦の行なわれた日（九月十五日）に祭りが執り行われていたのは、政権を東国に打ち立てることが、平将門以来の宿願だったからだろう。しかし、西国中心の明治政府は、これにいちゃもんをつけるかのように、平将門を逆臣扱いした。蘇我入鹿、弓削道鏡、と並ぶ三悪人のレッテルを貼ったのである。

けれども、いくら明治政府が平将門を毛嫌いしようと、庶民の将門信仰が衰えることはなかった。「祟りの恐怖」は増幅され、祟る平将門は、まことしやかに語り継がれたのである。

戦後すぐ、進駐軍が首塚（千代田区大手町）のあたりに駐車場を造ろうとして、ブルドーザーが横転、死者が三名出て、「平将門の祟りにほかなるまい」と、工事が中断されたり、周辺のサラリーマンも、いまだに首塚には折に触れ、参拝するのである。

このように、平将門は、日本を代表する祟り神である。

ここで注目すべきは、平将門も、天皇家とかかわりをもっていたことである。つまり、宇多天皇が「源氏」から王家に逆戻りしたように、「源氏」や「平家」は、天皇家から派生した氏族であり、平将門が「坂東の王」に立とうとしたその根底には、「王家の末裔」という裏付けが存在したのである。

このように考えてくれば、「祟る天皇」の背後に、ヤマト建国や神話の世界から連綿と続く、何かしらの伝統が秘められていたのではないかと思えてくるのである。

すなわち、祟る王や祟る人々が天皇や出雲神とかかわりをもっていたからこそ、恐怖が増幅されたのではないかと思えてくるのである。

そこで、知りたくなるのは、なぜそれほど古い歴史の記憶が、今日まで継承されているのか、ということではなかろうか。

そこで次章では、天皇家にまつわるもうひとつの謎に迫ってみたいのである。

第2章　多神教と戦争

家畜となった日本人

世の中に、不思議なことは、山ほどある。崇る天皇だけが謎ではない。

たとえば、日本国憲法だ。

日本国憲法は、人類の平和を願い、「戦争はやめよう」と訴えている。そして、日本は二度と戦争をしません、と宣言している。

これは、人類にとっての理想であり、実現できれば、どれほどすばらしいだろう。

しかし世界は、いまだに弱肉強食の論理で動いているのだから、日本だけが平和を享受できるわけがない。こちらが「平和、平和」と叫んでいても、侵略される可能性がなくなったわけではないのだ。だから当然、理想と現実の廻間で戦後日本は揺れ動いているのである。

日本が今日まで安穏と暮らせていたのは、じつは日本国憲法があったからではなく、アメリカの庇護のもとにあったからだという現実も、認識しておく必要がある。

冷戦時代、米軍が日本と韓国に駐留していなければ、この一帯は中国、北朝鮮、ソ連のいずれかの勢力圏に組み込まれ、日本は共産国の仲間入りをしていただろう。ま

た日本国内には、日本が共産主義国家になることを本気で望んでいた「インテリ」が、わんさかといたのだ（共産革命が無理とわかり、飛行機を乗っ取り、北朝鮮に亡命する輩まで現れた）。

この点、日本は果報者であった。憲法とアメリカ軍の庇護のもと、ぬくぬくと平和を謳歌することができたのである。こんな幸運な敗戦国が、歴史上存在しただろうか。

そこで改めて不思議に思うのは、戦争に勝ったアメリカが、なぜ「ありがたい憲法を下さった」のか、ということである。なぜ「日本はもう、軍備を持つ必要はない」「平和に暮らしなさい」と諭したのだろう。そしてなぜ、アメリカは日本が近隣諸国から侵略されることを防いでくれたのだろう。

くどいようだが、これほど恵まれた敗戦国が、いったい世界の歴史の中で存在しただろうか。

憲法の恩恵によって、戦後の日本の国防費は安く上がり、右肩上がりの経済成長をもたらすことができた。タダほど高いものはないと言うが、ここに、何かカラクリが隠されているのではあるまいか。なぜアメリカは、敗戦国に、ありがた〜い憲法を授け、恐ろしい冷戦から、日本を守ったのだろう。

それは、日本が軍事的に重要な場所にあったからにほかなるまい。そして、アメリ

カは敗戦国日本に、次のように要求したことになる。

「餌と安全を、タダでやる。ただし、もしいうこと聞かなかったり用がなくなったら屠殺するよ……」

つまり、アメリカは日本人を家畜にするために、「理想的な憲法」を授けたということになる。

鈍感になった日本人は、自分たちが飼育されていることも忘れている。なんとむごたらしい光景であろう。その事に気づかず、「平和憲法はありがたい」「日本の憲法は世界に誇るべきだ」と、呑気なことを言っている。

その一方で、

「なぜ戦後日本は、アメリカのいいなりになったのだ」

と憤慨するのもおかしい。よもやお忘れではあるまいな、日本が対米戦争に負けたことを。

ならば、日本人はこのまま、家畜として朽ち果てていくのであろうか。

もう、多くの日本人が、過去の戦争とはかかわりがない。冷戦も終わった。そろそろ日本人は、自身の意志を、はっきりと世界に示す時期に来ているのではあるまいか。

まず、自分たちで、自分たちの憲法を作り直す必要があろう。そして、自分たちの

国は自分たちで守るという気概を持つ必要がある。

もし、「戦争は絶対悪」「平和が一番」というのなら、現行憲法の条文と、まったく同じでもかまわない。国民の多数決でそうなったのなら、従うしかない。問われるのは、国民の意志であり、国民の自覚である。

ただし、ソマリア沖で海賊の襲来におびえ、自衛隊に護衛要請を出したピースボートのような無様な真似は、金輪際できないことを、肝に銘じねばなるまい。

本当に現行の憲法で良いというのならば、そして第九条を厳密に解釈したいというのならば、自衛隊を解体し、「いつ北朝鮮や中国、ロシアが侵略してきても、誰の助けも借りず、暴力はいけないと、日本は白旗を挙げる」「隣人や大切な人が凌辱されても、敵兵に媚びを売り、笑顔で過ごす」という覚悟が必要である。

しかし、本当にそれでよいのだろうか。末裔に対し、それで、顔向けできるのだろうか。なぜ、自国を守るための軍備をもってはいけないのだろう。

要は、腹をくくれ、と言っているのだ。自分の国の防衛は、自分たちで責任を持ち、家畜であることに甘んじるな、と言いたいのである。

一神教を受け入れない日本人の体質

古代史の本なのに、なぜこのようなことを言い出したかといえば、古代史と現代史は、つながっているからだ。

たとえば、日本人が大きな戦略を立てるのに不向きなのは、縄文時代以来継承されてきた、一万年以上の歴史をもつ固有の宗教観に起因しているように思えてならない。

一神教世界では、それぞれが「絶対の正義」を掲げている。正義を実現するために、不正義な相手を打ち負かす必要がある。だから、戦略を立て、敵を攻撃する。これに対し多神教世界の住民であるわれわれは、確固たる正義を掲げることはない。八百万の神々は、すべてが「正しい神」ではない。恵みをもたらす神もいれば、災いをもたらす神もいる。日本人にとって、神々は「絶対の正義」ではなく、「怒らせたら何をしでかすかわからない、恐ろしい存在」なのである。日本人は、神々が怒り狂わないように、神を敬い、神の怒りを鎮め、神のご機嫌をとって暮らしてきたのである。そこに「正義を実現するための戦略」は、必要ない。

このように、「正義を掲げ、戦略を立てて他者を圧倒する一神教世界」に、多神教世

界はなかなか太刀打ちできない。流動化する世界情勢の中で、日本が常に受け身であるのも、このような「戦略ベタ」という国民性と大いにかかわりがあろう。

ならばわれわれも、一神教的発想をもたねばならぬのだろうか。

これは不思議なことなのだが、なぜか日本人は、一神教になじめないのである。

すでに戦国時代、キリスト教の宣教師は日本にやってきていたし、布教活動を行なっていた。それなりの信者を獲得していたが、日本にキリスト教が根づいたとは言い難い。もちろん、徳川幕府が取り締まったことも大きな原因だが、近代、現代に至っても、キリスト教徒の数は、あまり伸びていない。人口比一パーセントで、お隣韓国では半数近くがクリスチャンなのだから、その差は歴然としている。

キリスト教の活動がなかったのではない。日本の大学に占めるミッション系の大学は、立教大学、同志社大学、青山学院大学、関西学院大学、明治学院大学、フェリス女学院などなど、数え上げたらきりがない。それにもかかわらず、卒業生がみなクリスチャンになったかというと、それはありえない話だ。

戦後の東大総長を二期六年務めた矢内原忠雄は、内村鑑三や新渡戸稲造の感化を受けたクリスチャンで、日本を「キリスト教的世界」に導こうと画策していたという。

このように、近代から現代に至るまで、日本にはキリスト教の強い働きかけがあった。

ところが、日本人はキリスト教の洗礼を受けることはなかった。

いったいなぜ、日本人は、一神教を受け入れられないのだろう。少なくとも、明治維新によって、日本は一神教の国々に憧れ、一神教の国々を真似ていたのである。

そこでしばらく、明治維新と一神教について、考えてみたい。

日本的な文化を恥じた日本のインテリ

明治維新以来、日本は西洋社会に追いつき、追い越すことを目標に掲げてきた。西洋の文物を学び取り、模倣しようと心がけてきたのである。

もちろん、そうしなければならぬ事情もあった。砲艦外交の前になすすべもなく不平等条約を結ばざるを得なかったからだ。それだけならまだしも、日本列島が西欧列強の手で支配される可能性も高かった。したがって、西欧列強の圧倒的な軍事力をはね返すには、西洋文明を学び取らなければならなかったのである。

明治時代、日本の文化は全否定された。

明治九年に来日したドイツ人医師・ベルツは、明治九年十月にドイツに宛てた手紙の中で、日本がたった十年で、ヨーロッパの中世の文化レベルから、十九世紀の全成

果を即座に手に入れようとしていること、けれども、ヨーロッパの文化をそのまま日本に押し込むのではなく、日本文化をよく知ってから、ゆっくりと、適応させることが肝腎と、理にかなったことを述べ、そのあとに、次のように述べている。

ところが―なんと不思議なことには―現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした［言葉そのまま！］」とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。（中略）

その国土の人たちが固有の文化をかように軽視すれば、かえって外人のあいだで信望を博することにもなりません。これら新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をほめてもらう方が、はるかに大きい関心事なのです。（『ベルツの日記　上』トク・ベルツ編　菅沼竜太郎訳　岩波文庫）

情けない話だが、これが明治維新の「伝統破壊」の実体である。そして日本のインテリ層は、つい最近まで、西洋文明に媚びへつらってきたのである。

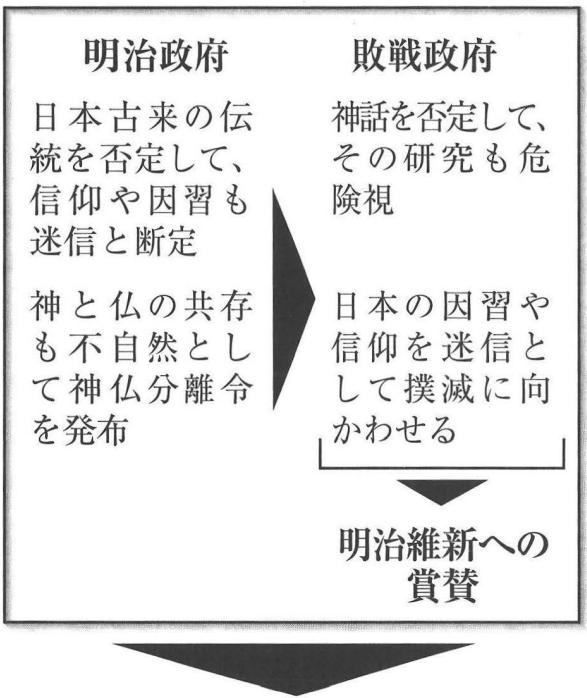
また、日本人の抱き続けた伝統的な信仰や風習は、猥雑で迷信として恥じられるようになる。神道と仏教が混淆した状態も不自然として、神仏分離令が発布された。

それだけならまだしも、神道が顕彰される一方で、名だたる仏教寺院の多くが、衰退し、破壊された。多神教世界の神々を祀る天皇の存在も、一神教的で「絶対的存在」として祀りあげられた。近代日本が構築した、いわゆる「天皇制」とは、王家の突然変異だった。本来の「天皇というカラクリ」とは、似て非なるものだったのである。

日本を捨てた明治維新が讃美され続けた謎

敗戦直後の日本でも、「日本的なものを捨てる」作業がくり返されたものだった。昭和天皇は現人神であることを、自ら否定した。八百万の神々を描いた神話は、危険視され、見向きもされなくなった。今でこそ、『古事記』神話の本が飛ぶように売れるが、神話を研究するだけで、「反動学者」とレッテルを貼られかねない時代がしばらく続いた。西洋は普遍的文明を築きあげたのに対し、日本はローカルで特殊な文化を

日本文化を否定した明治政府と敗戦政府



保ち続けているという考えが、日本の「インテリ」の間に浸透していったのである。

昭和二十一年（一九四六）には、文部省（現文部科学省）が、「文化国家にふさわしくない迷信の調査」を行ない、魔女狩りのように、日本の因習、信仰の撲滅に尽力している。日本の伝統文化が、国民生活の科学化の障壁になっているというのである。

昭和二十四年（一九四七）には、その調査結果が『日本の俗信1　迷信の実態』（迷信調査協議会編　洞史社）に、「科学的データ」としてまとめられている。

このように、国家ぐるみで、「日本の伝統」を、葬り去っていたのである。

今思えば驚くべきことだが、筆者が小学生の頃、「明治百年」が大いに喧伝（けんでん）され、子供向けの雑誌の中で、明治維新によって日本が西欧文明を受け入れたことが取りあげられ、「野蛮で未開だった日本は、明治維新によってようやく発展するきっかけを作った」といった内容が記されていたものだ。はっきりしたことは覚えていないが、チョンマゲをなかなか切ろうとはしなかった人々、牛肉を食べようとしなかった人たちの話が、「軽蔑すべき頑迷（がんめい）」の例として、採りあげられていたものだ。

子供のころ読んだ明治時代の偉人の伝記には、合理的な発想をもって伝統的な文化を打ち破った業績が綴られていた。一事が万事、そういった具合だった。

当時の「風潮」は、子供の心にしっかり刻まれ、「西洋の普遍性」「日本文化の低俗」

という漠然とした思いは、自分自身の中に、しばらく生き続けることとなる。

だが、日本が西洋と同じになることは、所詮不可能なことだった。西洋社会の成り立ち、歴史と文化が、日本とは相容れぬものだったからだ。そして、日本的なものが西洋的なものに比べて劣っているわけではないことに日本人が気づき始めたのは、戦後しばらくたってからのことであった。

それは、日本が経済成長し、西洋と肩を並べることができたことと、無関係ではあるまい。けれども、それだけが原因ではない。

『茶の本』の衝撃

西洋文明は、日本人にとって、あこがれの存在であった。そして、筆者自身も、青年期にいたるまで、西洋文明の優位性を疑ってかかることはなかったのである。

だが、いくつかの疑念が、次第に頭をもたげ始めた。

水俣病や駿河湾のヘドロ、大気汚染といった「公害」が大きな社会問題となった。現実に、東京（しかも環七の悪名高き姥川橋の近く）で暮らしていた筆者は、光化学スモッグの受難者でもあった。現在でも、年に一度か二度、光化学スモッグが発生す

るが、症状を良く覚えているから、少しでも胸が苦しくなると、「今日は外に出まい」と判断できる特技を身につけている。

昭和四十七年（一九七二）、ローマクラブが『成長の限界』（ドネラ・H・メドウズ　ダイヤモンド社）を発表し、科学文明の末路を暗示し、大きな衝撃を与えた。地球を宇宙船になぞらえ、無限と思われた資源と生命は限られたものとする警告がつづられていた。これが人々の自覚を促し、それまで憧れていた「合理的で便利な生活」に、疑問符が打たれ始めたのである。

さらに、冷戦によって、人類滅亡の危機も叫ばれるようになった。人類を何度も殺戮できるだけの核兵器がそろったのである。当時ノストラダムスの予言書にまつわる書籍が飛ぶように売れたのも、世界を牛耳る一神教の論理に対する疑念が、芽生えつつあったからではなかろうか。一神教の掲げる正義の戦いが、狂気にみえてきたのである。

筆者の意識を変えたのは、一冊の本との出会いだった。それが、昭和初期に出版された、岡倉覚三（岡倉天心）の『茶の本』（岩波文庫）であった。長くなるが引用する。

おのれに存する偉大なるものの小を感ずることのできない人は、他人に存する小な

るものの偉大を見のがしがちである。一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚気をなしている千百の奇癖のまた例に過ぎないと思って、袖の下で笑っているであろう。西洋人は、日本が平和な文芸にふけっていた間は、野蛮国と見なしていたものである。しかるに満州の戦場に大々的殺戮を行ない始めてから文明国と呼んでいる。

（中略）

もしわれわれが文明国たるためには、血なまぐさい戦争の名誉によらなければならないとするならば、むしろいつまでも野蛮国に甘んじよう。われわれはわが芸術および理想に対して、しかるべき尊敬が払われる時期が来るのを喜んで待とう。

いつになったら西洋が東洋を了解するであろう、否、了解しようと努めるであろう。

ちなみに『茶の本』の原本である『The Book of Tea』が出版されたのは一九〇六年で、明治時代に岡倉覚三は西洋社会に向かって、日本の主張を展開していたのである。

だが残念なことに、岡倉覚三の思いは、世界に通じなかったし、日本そのものが変質していった。日本はこの後、西洋の真似をして軍備を増強し、戦争に突き進んでいったのである。

もちろん、帝国主義のまっただ中で、弱い者は強い者に食べ尽くされるという時代

であったから、日本の選択肢は限られてもいた。世界の八割が、西洋の植民地になり果て、これに抗ったのが日本だった、という見方も可能である。

白人キリスト教徒の論理

幕末の砲艦外交によって、日本は鎖国政策を改めざるを得なくなった。そして「平和ボケ」していた日本は、弱肉強食という荒波の中に、突然投げ出されたのである。武器を突きつけて開港を迫る人々に、平和の論理は通用しなかった。岡倉覚三の「正論」は、そう簡単に西洋人に通じるはずもなかった。けれども、『茶の本』を書き残したことによって、「はたして西洋人の論理に巻かれたままでよいのか」という疑念を、現代人に自覚させる力を持っていたのである。

ところで、日本の過ちのひとつは、「強い者は弱者を支配することができる」という帝国主義のルールの裏側に、「強い者でも、それは白人のキリスト教徒に限る」という暗黙の了解が隠されていたことに気づいてはいなかったことだ。ここに、近代日本の悲劇が隠されていたのである。

このことがよくわかるのが、明治時代のロシアの新聞記事（「ノーヴォエ・ヴレーミャ」

一八九五年四月二十一日）である。

日露戦争が始まる十年ほど前、日清戦争に勝利した日本を罵倒する次のような記事が載っていた。長くなるが引用する。

ロシアは黄色人種の文明など認めていないので、偶然の勝利によって勢いづいた野望の膨張を押し止めなければならない。わが国にとって、またヨーロッパのキリスト教諸国にとって、朝鮮に文明を導入しようなどという日本の野心はお笑い草でありナンセンスだ。日本での文明開化推進者の理性だとか人道的感覚というものは、いかに彼らがヨーロッパのお手本を完璧に学ぼうとも、文明化の道を朝鮮に本当に歩ませることができるなどとは考えられない。（中略）われわれは声を大にして朝鮮保護統治に対する自分の権利を主張しなければならない。そして、この権利と義務がロシアのものであるのはごく当然だ、ということを否定するような声は、ヨーロッパにおいてさえもおそらく見つからないだろう。ヨーロッパのキリスト教諸国はこの問題の全般的な意義を理解するだろう。つまり、どんなに開化された異教であっても、意識の高いキリスト教徒にとってそれはキリスト教文明の高みよりはるかに低いものであり、キリスト教文明と対等な地位を主張するなどもってのほかだ、ということだ。「これ［キ

リスト教」にて汝は勝つであろう」があくまでも世界の先頭に立つ旗印であるべきだ。（『外国新聞にみる日本』毎日コミュニケーションズ）

なぜキリスト教徒だけが、他の民族を支配する権利を持っていたというのだろう。そしてなぜ、日本は他国を侵略してはいけなかったのだろう。

もちろん、侵略行為そのものが、本来許されてはならぬことであった。だが、当時の白人キリスト教社会は、「異教徒を教化する」という大義名分の元、侵略を続け、植民地政策を「正義の戦い」と定義づけ、正当化していたのである。

そして、黄色人種でクリスチャンでもない日本人が、キリスト教文明の物真似をする姿勢を、鼻で笑い、批難していることになる。

この後日本が各国から包囲されていく理由も、このようなキリスト教の論理と無縁ではなかったはずである。

ここに、多神教世界に対する一神教世界の偏見と、一神教世界の独善が見え隠れするのである。

民主主義も共産主義もキリスト教のなれの果て

西洋キリスト教社会の論理が絶対でないことに、日本人は気づき始めている。そして、西洋文明が万能ではないことは、誰の目にも明らかになりつつある。

しかしその一方で、いまだに世界中でキリスト教社会の論理が罷り通っているのも事実である。

アメリカ合衆国は、キリスト教的発想に基づく「民主主義」を世界に広めようとしているし、旧ソ連は、共産主義という、キリスト教のなれの果ての論理を、世界中に広めようとしていた。

なぜ、民主主義や共産主義がキリスト教的発想に基づいているかというと、これにはすこし説明が必要だ。

岸田秀（きしだしゅう）氏は、「科学や理性がすべての謎を解き明かし、人類の生活を飛躍的に向上させてくれる」という発想そのものが、実は一神教的発想の延長にあったといい、『二十世紀を精神分析する』（文春文庫）の中で、次のように述べる。

近代西欧人が理性と呼んだものは、要するにキリスト教の唯一絶対の神の後釜であった。このことは神と理性の多くの共通点からも明らかである。神と理性との唯一の違いは、神は個人の外にあり、理性は個人の内にあるという違いで（中略）、理性とはいわば外なる神を殺して内在化したもの

つまり、ニーチェが述べたように、キリスト教世界の「神は死んだ」のであり、人間の理性や科学が、全知全能の神に成り代わったということになる。岸田秀氏は、これを「誇大妄想の一形態」と述べる。

では、なぜ一神教は多神教を蔑むのだろう。なぜ一神教社会は多神教社会を呑みこもうとするのだろう。

そこで、一神教と多神教の違いについて、考えておかなければならない。

キリスト教がローマ帝国の国教となり、各地に布教される以前、ヨーロッパには、多神教的世界が広がっていた。ゲルマン人やケルト人の宗教観は、樹木崇拝や、動植物を神にみたてた典型的な多神教だった。ところが、五世紀から七世紀にかけて、彼らはローマ帝国に圧倒され、森の奥深くに追いやられ、野蛮視された。そして、キリスト教徒は、森を悪魔の住む場所と考えたのである。

世界支配を目指すキリスト教的史観

ローマ以前

ゲルマン人
ケルト人
樹木崇拝など動植物を神にみたてる多神教

ローマ帝国

キリスト教を国教として世界制覇を目指す

土着信仰を否定して、森を悪魔の住む場所とする

現代

近代西欧人のいう「理性」とは

キリスト教的絶対神の後釜

▶米国はキリスト教的民主主義を世界帆布

▶旧ソ連はキリスト教の別像「共産主義」で世界制覇

その一方で、ヨーロッパの土着の信仰は、そう簡単に消えなかったようなのだ。教会建築の骨組みは、深い森林を象っているとする指摘がある。また、マリア信仰は、本来キリスト教にはなかったものだ。神は男性であり、女性は淫乱な存在と考えられていた。ところが土着の信仰にキリスト教がかぶさっていく段階で、彼らを懐柔するために、女神的存在を編み出したものらしい。

つまり、多神教世界の住民は、一神教世界の住民に圧倒されても、その根っこの部分で、「三つ子の魂」を守り続けていたのである。

なぜ一神教は多神教を野蛮視するのか

ならば、なぜ一神教は多神教を野蛮視するのだろう。

人類の宗教観は、アニミズム→多神教→一神教と進歩してきたというのが、一神教の言い分である。

アニミズムとは、太古の人類が、まだ農耕を知らなかった頃の信仰で、彼らは万物に精霊が宿ると信じていたのである。

山、海、川、大地、大空、草木、吹き渡る風、路傍の石。ありとあらゆる物や現象

に精霊が宿るのであり、人間にも「生霊」や「死霊」があって、霊的存在であると考える。

万物に精霊は宿るが、特に目印となるような老木や大きな岩（磐座）に、精霊や神は宿りやすいと信じられた。諏訪大社の御柱や正月の門松、榊も、神の宿る依代である。

アニミズム的発想から見れば、動物の死は、体から生きる力が抜け落ちることであり、アニミズムとは、「自然の生命化」「自然の霊化」とも呼ばれるわけである。

この信仰が、やがて多神教に引き継がれ、日本では、八百万の神々が生まれたのである。

いたる場所に神社が建てられ、思い思いの神々が祀られているのだから、まさに日本は多神教の国である。

以後、日本人は、多神教的信仰を守り続けていくことになる。

インドから中国（あるいは朝鮮半島）を経由してもたらされた仏教が受け入れられたのも、多神教的発想に起因する。大勢の神々の中のひとつに、「仏様」が加えられただけの話だからである。

また仏教は、あらゆる動物には仏性があると説き、もともと多神教的発想で彩られていた。だからこそ、日本に定着したのだろう。十一世紀には、天台本覚論が編み出

され、「草木国土悉皆成仏（動物だけではなく万物に仏性があり、皆成仏する、ということ）」と唱え、まさに、アニミズム的で多神教的な教義が、喧伝されていくようになるのである。

やがて修験道が盛行すると、神道と仏教の「良いとこ取り」をして、神仏習合という現象を引きおこしていく。神社と仏寺が同じ境内に建てられ、神官がお経を唱えるという、奇妙なことまで起きてくる。これも、多神教世界だからこそ、起こりえた現象といえよう。

日本人があいまいなのは多神教信者だから

ノーベル文学賞を受賞する一方で、日本の文化勲章を拒否した大江健三郎は、日本をさして、「あいまいな国」と侮蔑し、卑下して見せた。じつに、明治時代が生んだ「インテリ」の化石のような人物だが、あいまいな国民性にも一長一短があることを、この人物は忘れている。あいまいだから悪いというのは、お門違いである。

日本人があいまいなのは、多神教的信仰形態を守り続けたからだ。イエスかノーか、はっきりと判断を下さないのは、「神様がひとりでないように、物事に答えはいっぱい

ある」と考えるからだ。唯一絶対の神をいただく一神教とは、ここが、本質的にちがうのである。

多神教は、「現世利益（げんせりやく）」の宗教観でもある。

神社仏閣には、かならず「おみくじ」があって、たわいもない占いに、人々は一喜一憂する。神や仏に手を合わせ、手の届きそうな幸せを祈願する。困った時には、かならず神頼みをする。

一神教から見れば、これは野蛮で、未開人の宗教にしか見えないのであろう。現世的世界は、不完全というのだ。これに対し、ひとりの絶対の神をいただき、はっきりとした「善」や「観念」、超越的な秩序を構築した一神教こそ、多神教世界の渾沌（こんとん）から抜け出した正義だ、と唱える。そして、だからこそ、不完全な信仰にすがる者たちを導いてやる必要があるといい、植民地支配を正当化したのが、一神教でもあった。

その一神教は、砂漠地帯に誕生したことは、よく知られている。それはなぜかといえば、「無の世界」に人間が放り込まれ、抽象的思考をするようになったから、とする考えが根強い。

乾燥化と一神教の誕生が、因果関係を持っていたことは、科学的データからも、裏付けられている。土の中に埋まった花粉を調べることによって、古い時代の気候変動

を復元できるのである。

そして紀元前千二百年ごろ、西アジア一帯が気候変動に見舞われていたことがわかってきた。北緯三五度以南が乾燥化していたのだ。ナイル川の水位は急速に低下し、インダス川の周辺でも、乾燥化が進んでいたのである。

安田喜憲（国際日本文化研究センター教授）は、乾燥化によって豊穣をもたらすのは大地ではなく、天の嵐や雷だったことに人々は気づき、豊穣の女神（地母神・蛇）から男神の「天候神」を崇拝する気運が高まったとする。そして、天候神がやがてユダヤ教やキリスト教、イスラム教といった一神教へと変化していった、というのである（『蛇と十字架』人文書院）。

一神教が砂漠で生まれた意味

さらに、もともと天候神は牧畜民のもので、彼らが砂漠を追われ、農耕民の居住地域に侵入したことも、大きな意味があったという。そして、このころトルコのヒッタイト帝国が崩壊し、鉄器生産の技術が流出したことにも、大きな意味があったようだ。大地を効率的に掘削するための道具を、人類は手に入れたのである。

けれども、一神教が砂漠地帯で生まれた理由は、もうひとつ考えられるのではあるまいか。そもそも、なぜ彼らは砂漠に暮らしていたのだろう。

考えてみれば、彼らはエデンの園から追放された者たちではないか。

誰が、好き好んで、無機質で苛酷な場所に住みたいと思うだろう。すなわち、一神教を生み出した砂漠の民は、豊穣の地を追い出され、迫害された人々だったと考えられること。復讐心に燃える砂漠の民には、復活を目論み、反撃するための大義名分が必要だったのではあるまいか。

つまり、誰も砂漠には住みたくはなかったのである。けれども、力のある者は弱者を追い出し、弱者は流浪し、砂漠に追いやられた。だから、弱者である砂漠の民は、観念上の王国を構築するために、一神教を築きあげたのではなかったか。

人類が戦争を選びとっていった原因は、農業を発明したことではないかとする説は、すでに触れた。

一神教は砂漠で生まれたといわれているが、だからといって農業とかかわりがないわけではない。

人々は農地を奪いあい、その過程で、多くの人々が、豊穣の大地を追い出されたのである。

砂漠にはじき飛ばされた彼らが、無機質な空間の中で、敵を呪い、復讐するための大義名分を求め、唯一絶対の正義を生み出していったのではあるまいか。

一神教の限界

一神教が砂漠で生まれたことに、多くの意味が隠されているように思える。一神教の限界も、ここにある。

たとえば、モーゼの十戒の中には、自然と人間の関係にまつわる記述がまったく無い。先述の安田喜憲は、「(モーゼは)その後の人類を幸福と繁栄に導く戒めを公布した」と言い、ただ自然と人間の関係を述べなかったことに「キリスト教世界に発展した文明が背負わなければならない原罪」が秘められていたという。つまり、もしモーゼが、ここで自然と人間の関係に言及していれば、今日人類が直面している環境問題も、起こらなかったのではないか、とする。また、次のように述べる。

禿山(はげやま)のシナイ山に立ち、あたりには燃える薪(まき)と天に光り輝く星しかない。命あるものは、天に光り輝く星と砂漠に立つ我としての人間しかないのである。そのような砂

漠の風土の中で、一体どうして自然の生命と人間のかかわりを意識できようか。ここにユダヤ教とその後のキリスト教が背負わなければならない風土的限定が存在するのである。（『蛇と十字架』）

この指摘にあるように、一神教が砂漠で生まれた意味は、とてつもなく大きいように思われる。変わることのない殺風景な景色の連続の中で、人間は「思索（夢想）」の中に、「生きる場」を見出すのであろう。だからこそ、観念的で、陶酔感のある「独善」が生まれたにちがいないのである。季節の移ろいを愛で、花鳥風月に酔う日本人には、想像を絶する世界が、砂漠なのである。

生命を寄せ付けない極限状態から生まれた信仰が一神教であり、このことが「自然を無視した信仰」を産み落とし、さらには、地獄のような世界に追い落とされた者たちの恨みつらみが、一神教の闇となって、人類を呪っているように思えてならないのである。

一神教世界の住民は、「労働は、神から与えられた罰」であるといい、生まれながらの支配者と被支配者が存在すると考える。そして、異教徒たちを奴隷にし、搾取することの正当性を述べるのである。

大航海時代、スペインとポルトガルは、世界を二分して、それぞれの支配領域を取り決めている。そして、キリスト教を布教するという大義名分の元、非西洋諸国を次々と植民地に組み込み、奴隷を生み出している。その後も、キリスト教徒は、世界に進出し、地球のほとんどの地域を、わがものにしていったのである。

そして彼らは、神の名のもとに、正義の支配を行なったと信じ、いまだに過去の植民地支配を反省していない。

このように、一神教とは、おそろしい信仰なのである。キリスト教徒（中でも白人）が優秀な、支配すべき人々であるという発想は、いまだに払拭されていない。国際情勢を分析する上で、このようなキリスト教徒たちの論理を無視していては、何もわからないのである。

見直されつつある多神教

砂漠で生まれた一神教に対し、多神教は森と深くかかわる。たとえば『日本書紀』の神話の中に、次のような話がある。

出雲神の祖素戔嗚尊は、天界（高天原）から地上界に舞い下りるのだが、一書（別

伝）には、まず朝鮮半島に舞い下りたと記される。その後、スサノオは日本列島にやってくるのだが、素戔嗚尊はここで次のように述べている。

「韓国には、金（金属）の宝がある。これに対し日本には、浮宝（船や建材に用いるための樹木）がなければならない」

そして、各地に種を蒔いて歩いたといい、日本列島を青山に変えていったという。

この一節から、『日本書紀』の記された八世紀、ヤマト朝廷は、「日本列島には豊富な森林資源が存在する」と感じていたこと、その原因を、出雲神の活躍に求めていたことがわかる。

一神教が「砂漠の宗教」とするならば、多神教は、まさに「森の宗教」であり、日本に一神教が馴染まないのは、深い森にわれわれが守られてきたからではあるまいか。

平安貴族たちが競って都に寺院を建立する中、空海は、深い山の中に寺を建てた。その空海は、「森は天上世界よりも美しい」と述べる。この思想は、多神教世界の住民にしか理解できないであろう。

しかし、日本人自身が忘れかけていた、「多神教的発想のありがたさ」も、次第に注目を集めるようになってきたのである。

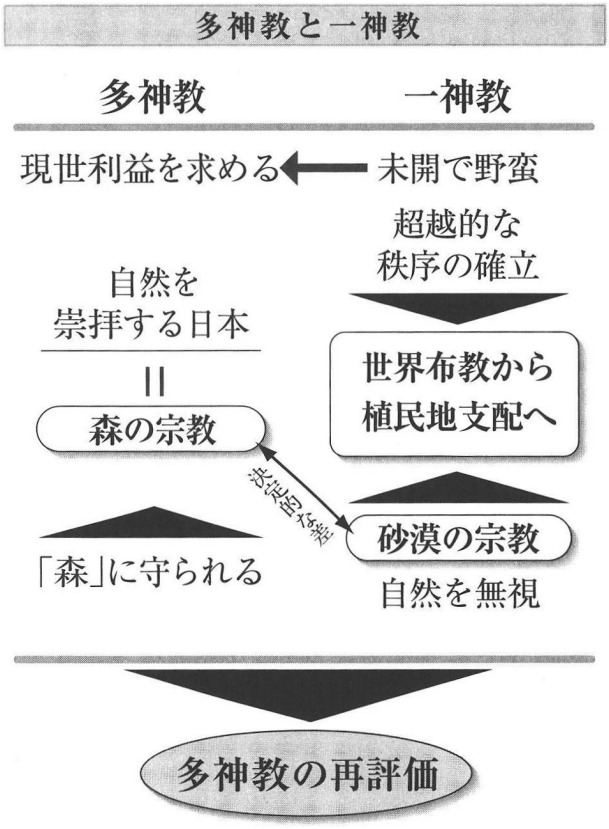
これは、日本人だけの独善ではない。

『出羽三山と日本人の精神文化』（松田義幸編　ぺりかん社）の中でウーズラ・J・リットンは、次のように語っている。

キリスト教ではこの世は二つの要素で成り立つのではなく、聖書によれば唯一の男神によって作られたとされています。

この神は地球の我々が住んでいるところにいるのではなく、他の世界、天国におられるとしています。そのためにキリスト教の世界観は地球から離れたものとなり（中略）人々は自然から離れて成長しました。この考えは、今日の我々の重要な問題として持ち上がっている生態系とか社会的なものを含む問題の解決を阻害しています。そしてここに日本の修験道とか伝統的思考が果たせる役割があるのではないかとか思っています。これこそが西欧人が長らく求めてきた具体的指針なのです。

拙著『修験道がつくった日本の闇』（ポプラ社）の中で詳しく述べたように、日本人の原始から継承された信仰形態は、神道ではなく修験道に隠されている。したがって、この指摘は、大きな意味を持ってこよう。


多神教と一神教
多神教
一神教
現世利益を求める
未開で野蛮
超越的な
秩序の確立
自然を
崇拝する日本
＝
森の宗教
世界布教から
植民地支配へ
対立
砂漠の宗教
「森」に守られる
自然を無視
多神教の再評価

反発する一神教的世界

もっとも、一神教見直し論が、西洋社会で一般化しているわけではないし、多神教的発想の復権を目論むにしても、理念だけを掲げ、一神教の限界を主張しているだけでは、何も変えることはできない。

第一、一神教を否定するかのような言動は、多くの反発を招くことは容易に想像のつくところである。

西洋文明を築いてきた一神教的な倫理観、宗教観のすべてを否定すれば、一神教的世界から、アイデンティティそのものを踏みにじられたと、攻撃されるに決まっているのである。

前述の安田喜憲も、多神教の復権を早くから唱え続けてきたひとりだ。彼は『一神教の闇』（ちくま新書）の中で、超越的秩序の宗教（一神教）は、現世的秩序の宗教（多神教）を不完全で劣等でけがれていると見下してきたことを批判し、現世的秩序を重視する多神教の復権を目論む。

だが、キリスト教世界の学者から、多くの批判を浴びているという。

安田喜憲は、まず多神教について、

この世の生きとし生けるものの秩序であり、他者の命に対する畏敬の念と慈悲の心である。そこでは空想の産物でしかない超越的秩序より、目の前にあるこの現実世界の調和ある営みこそが最大の価値をもつ

といい、現実と無縁の観念から出発した一神教に疑問を投げかける。そして、「アニミズム・ルネッサンス」を提唱し、英文で世界に訴えかけたのだった。けれども、世界中から、多くの反論が寄せられた。

「生贄（いけにえ）を生み出すような未開地に文明をもたらしたのが、一神教だった」

といった内容の反論であった。つまり、一神教の優位性という発想を、変えようとしないのだという。また、「国際的な研究機関に、こんな人間を助教授で置いておくのは問題だ（前掲書）」という激しい抗議まで受けたというのである。

これは当然のことで、一神教の否定は、キリスト教世界が展開してきた「野蛮な多神教世界を文明世界に引き上げる」という帝国主義の論理（植民地政策の正当化）そ

のものを否定しかねないし、キリスト教徒のアイデンティティの否定、ヨーロッパやアメリカの歴史の否定にも直結するからである。

なぜクジラを捕ってはいけないのか

ではわれわれはどうすればよいのだろう。もっとも身近な例に、「捕鯨問題」がある。キリスト教世界の人間は、鯨を捕ってはいけないと、日本を非難する。

理由はいくつもあるだろう。聖書には、巨大な魚（鯨とは限らないのだが）が、聖なる生き物であるかのような記述がある。イルカや鯨といった海のほ乳類が、他の魚に比べて知能が発達していることも、大きな原因であろう。

彼らは、鯨に銛を突き刺すのは野蛮だという。牛を飼育し、屠殺するが、苦しまないように殺しているという。

だが、これらはキリスト教世界の独善である。キリスト教は、神が万物を創造し、人間がこれを支配してもよいと考える。そして、動物を飼育し、家畜化することに罪を感じない。

はたして動物たちは、柵に囲まれ、鎖につながれ、自由を奪われたあげくに屠殺さ

れることを、幸せに思っているのだろうか。

一度でいいから、キリスト教徒に二者択一の質問をしてみたい。

(1) いつか銛で突かれ殺されるかもしれないが、自由に暮らし、のびのびと野原を走り回る（あるいは大海原を自由に泳ぎ回る）ことができる生活

(2) エサと家は提供するし、苦しまずに殺してやるが、一生家から出られない

彼らは、「もし私が牛ならば」「もし私が鯨ならば」という発想はもっていない。なぜなら、人間と他の動物は、「支配する者と支配される者」の関係だからである。

そして、動物たちの「苦しむ死」には思いは馳せても、動物の「生きる喜び」には、無頓着である。それはなぜかといえば、動物の生殺与奪の権利は、人間が握っていると信じているからである。

だから、キリスト教徒が「殺してはいけない」と判断した動物を殺す日本人は野蛮人と目され、日本人に危害を加えても、それは正義の戦いとして、許されるという発想に結びつくのである。

これに対し、多神教世界では、他の動物から命をいただくのであり、殺した動物に

対し、鎮魂の祈りを捧げるのである。

人間も動物も、大自然の一部に過ぎず、食し、循環すると信じているのである。なぜこの発想が、野蛮なのだろうか。

多神教的信仰が、けっして野蛮で未開な発想ではないことを、徐々に一神教世界に理解してもらうほかはないのである。

そして、科学の時代に「王」などという前近代的な存在は、消えてなくすべきだと世界中が考えたとしても、日本人は天皇の存在意義を、世界に向かって主張するべきだろう。なぜならば、「天皇」こそ、アニミズム、多神教の真髄を表しているからなのである。

そこでいよいよ、天皇とは何か、なぜ天皇は崇るのか、多神教的発想をもって、解き明かしておく必要がある。

多神教の神は正義の神ではない

多神教世界の「神」は、一神教世界の唯一絶対の「神」とは、性格を異にする。多神教の神は、「正しい存在」ではない。恵みをもたらすありがたい存在であると同時に、

ときに暴れ回り、祟りを振りまくおそろしい存在に化けるのである。

たとえば、出雲神の祖・素戔嗚尊は、天照大神の弟だが、高天原に登ってくるとき、雷のようで、荒々しかったと神話にあり、事実、高天原で大暴れをして、天照大神を驚かせている。天照大神が天の岩戸に隠れてしまったのも、素戔嗚尊の乱暴狼藉に辟易したからで、このため世界中がまっ暗になってしまったという。

おそろしい神の例なら、いくつも挙げることができる。『日本書紀』や『古事記』だけではない。各地の伝承を記録した『風土記』にも、おそろしい神の話はいくつも登場する。たとえば、『出雲国風土記』嶋根郡の加賀の神埼（加賀の潜戸）をめぐる説話には、次のようにある。

加賀の神埼には窟があり、ここは佐太大神（サルタヒコのことではないかとされている）が生まれた場所だ。この窟の近くを通るときは、かならず声を轟かせていく。もし黙って通ろうとする者がいると、神が現れ、風を巻き起こし、船は転覆してしまうのだという。

『播磨国風土記』賀古郡鴨波の里の段には、昔荒ぶる神がいて、舟に乗った人を半分留め、殺したとある。飾磨郡の伊和の里の段には、大汝命（大己貴神）の子・火明命（『日本書紀』には、天津彦彦火瓊瓊杵尊の子とある）は、強情で行いが荒々

しかったといい、父は憂えて捨てようと考えた。そこで因達の神山で火明命に水を汲みに行かせ、船を出してしまった。

火明命は水を汲んで帰ってくると、船が去っていくのが見えた。大いに怒った火明命は、波風を起こし、船を追った。すると父の船は進まなくなり、大破してしまった。大汝命は妻に、「悪い子から逃れようとして、波風に遭い、ひどくつらい思いをした」と述べたという。

つまり、神様が親子喧嘩をしたというのだ。多神教の神は、人間とまったく変わらない。

『常陸国風土記』行方郡の段には、次のような話が載る。

古老がいうには、継体天皇の時代、箭括の氏の麻多智なる人物が、葦原を切り開き、田を作ろうとした。すると夜刀の神（蛇）が群をなしてやってきて、人が入ってくるのを防ごうとした。麻多智は大いに怒り、武装して蛇を追い払った。山の入口までやってきて、標の杖を境界に立て、夜刀の神に対し、次のように告げた。

「ここから上は、神の土地とすることを許す。ここから下は、人が田を作る。今からのち、私が神を祀る者となり、とこしえに祀る。だから、願わくは、祟らないでほしい。恨まないでほしい」

そういって社を建てて、神を祀ったというのである。

このように、古代の文書に現れる神々は、おそろしい存在なのである。そして、麻多智のように、田を作るために土地の神を追い払う一方で、祟らないように祀りあげたのである。

神と鬼は表裏一体

なぜ多神教の神々は、鬼のような祟る恐ろしい神々なのであろう。

そこで逆に、「鬼とは何か」を考えてみよう。

キリスト教で悪魔といえば、唯一絶対の正義を掲げる「神」の敵であり、滅ぼさなければならぬ者である。これに対し、日本の鬼は、単純な悪ではない。

興味深い例がある。それが、元興寺（奈良県奈良市）の鬼の話だ。

さて、ガゴゼ、ガゴウジ、ガンゴジは、鬼のことで、広辞苑にも載っているれっきとした日本語である。ガゴゼ、ガゴウジ、ガンゴジの語源は元興寺で、寺の名が鬼の代名詞になった。

『日本霊異記』には、その理由が記されている。



鬼の話が伝わる元興寺（奈良県奈良市）

敏達天皇の時代（六世紀後半）、尾張国阿育知郡（名古屋市中区）の農夫の前に、雷が落ちた。すると小子が現れ、のちに元興寺の童子になった。元興寺の鐘楼に悪霊の変化である鬼が出没し、これを雷神の申し子である件の童子が退治したという。

この話から、元興寺の鬼は、ガゴゼ、ガゴウジ、ガンゴジと呼ばれるようになったのだが、注意しなくてはいけないのは、ここにいう「ガゴゼ」は、退治された鬼ではなく、鬼を退治した童子をさしていることだ。

ここに、日本人にとっての「鬼」の本当の意味が隠されている。すなわち、鬼を退治できる者は、鬼と対等の力を

もった者であり、鬼と同等の人間は、鬼とみなされるわけである。

屁理屈をいっているのではない。昔話を思い出していただきたい。一寸法師も桃太郎も、みな鬼退治をする者は、童子だった。クマソタケルを退治したヤマトタケルも、童女の姿に化けなければならなかった。鬼のように強く、朝廷軍を何度もはね返した物部守屋を滅ぼしたのは、童子姿の聖徳太子であった。

一寸法師は「小さいのによく頑張った」と思われるかもしれないが、もともとこの童子は、父母に「こいつは化け物か何か、そういう類にちがいない」と、放逐されていたのである。ヤマトタケルも、バラバラ殺人をして平気な顔をしているから、父・景行天皇は、恐れ、遠ざけたというではないか。すなわち、彼らが鬼と対等に渡り合えたのは、彼ら自身も、鬼のようにおそろしい者たちだったからで、ようするに、彼らも鬼だったのである。

ならばなぜ、おそろしい鬼が、人に危害を及ぼす鬼を退治し、人様のお役に立ったのだろう。

簡単なことなのだ。鬼を裏返すと、神に化けるのである。

つまり、日本人にとって、神と鬼は、表裏一体で、人々に恵みをもたらす「神」は、ときに人々に災いをもたらす「鬼」に化けると考えられていたのである。

基本的に神は祟る鬼だった

平安時代、「鬼」と書いて「オニ」と読むようになったが、それ以前「鬼」は、「モノ（ちなみに「物部」には、「鬼部」の意味が秘められていたことになる。だから、物部守屋を成敗したのが、聖徳太子という童子だったことになる）」と読まれていた。その理由は、アニミズムで解き明かすことができる。

太古の人々は、ありとあらゆるモノに、精霊や神は宿ると考えた。そのため、「モノ」といえば、精霊や神を意味するようになったのである。

たとえば、「もののけ姫」の「モノノケ」は、「物の怪（もののけ）」で、「モノ」は霊的な意味をもっている。「モノに憑かれた」も同様である。

国語辞典『辞林21』（三省堂）には、「もの」について、「正体のとらえにくい対象を畏怖していう語。もののけ」とある。「正体のとらえにくい対象」とは、「霊」であり、「鬼」であり、「神」のことをいっている。

悪霊も神も、モノに宿るのだから、「物」は神とも、鬼ともなりうる。

ではなぜ、日本人は、「物」に善と悪の二面性を見出したのだろう。

原理は至って簡単なことだ。日本人にとって「神」とは、大自然そのものだったのである。

恵みは大自然からもたらされる。大地、海、川、空、風、雨、雷、山、谷、湿地、樹木、石、草、花、すべてが恵みをもたらす。その一方で、ひとたび大自然が牙をむけば、人間はひとたまりもなく死ぬ。恵みをもたらす者が神とすれば、災いをもたらす者は鬼である。けれども、どちらも根源は同じで、人々は神々が怒り、呪い、祟ることをおびえ、ひたすら恭順し、畏敬の念をもって祀りあげたのである。

年に一度の祭りで神を神輿（みこし）に乗せ、大暴れさせるのは、神々の無聊（ぶりょう）をなぐさめ、エネルギーを発散してもらうことによって、祟る気持ちを抑え、災害から逃れようとする、先人の「知恵」である。

つまり、神は基本的におそろしい鬼なのであり、鬼をなだめすかす（祀る）ことによって、ようやく人々に安寧がもたらされるのである。

ここまでわかってくれれば、天皇の正体、日本の歴史の根本が、少しずつ見えてくるはずである。

日本人に横たわる諦念

ところで、日本人の信仰といえば、世俗的で現世利益的なものと考えられ、低俗な宗教観とする見方がある。

具体的には、神社仏閣に詣で、神頼みをし、お祓いをし、お守りを買い、おみくじを引き、吉凶を占う。そこに高邁な哲学や教義があるわけではなく、また、神は人々を救済するわけではない。いわば、気休めの宗教であり、だからこそ一神教から低い次元と見なされるのだ。

しかし、なぜ一神教の神が、人々を救済するのかといえば、それは「正義の名のもとに他者を傷つけているから」にほかなるまい。

くどいようだが、農業の発明とともに、人類は戦争を始めた。そして、砂漠に追いやられた人々は、失地回復と復讐を胸に秘め、戦うことの正当性を編み出していった。これが一神教の本質であろう。

けれども、正当性を掲げる一方で、人を傷つけることは、罪深いことだ。心の奥底、本能でそれを知っているからこそ、一神教は人を救済する必要に迫られたのではある

日本人が一神教になじめない理由

一神教 … 唯一の「正義」のもとに他者を支配
＝
自然も

▶ **西洋蜜蜂** → 巣を攻撃されると外に向かって攻撃的になる

多神教 … すべての物が大自然の一部であらゆる場所に「神」は存在する

▶ **日本蜜蜂** → 巣を攻撃されるとお尻を出して攻撃しない

日本人にとって「攻撃」の発想はなじまない

「大自然＝神＝天皇」という思想に行き着く!?

まいか。

ただし、日本列島でも、紀元前から農業は行なわれていたのだから、一神教的な信仰が生まれても良かったし、キリスト教が伝来して以降、信者が増えてもおかしくはなかったのである。

なぜ日本人は、一神教になじめないのだろう。原因は、日本の風土に隠されているように思えてならない。

一神教が野蛮視するアニミズムや多神教的発想の根源には、「大きな諦念」が横たわっているように思えてならない。人間が大自然の一員であり、どんなにあがいても、大自然（神）の力にはおよばないという「あきらめの気持ち」である。

だから、人々は教義や救済を求めるのではなく、神を敬い、神の前では無力であることを、あからさまに訴えるのだろう。ここにいう「神」とは、大自然といった方がわかりやすい。

こんな話がある。西洋蜜蜂（みつばち）は、巣を攻撃されたとき、外に向かって攻撃的な防衛手段をとるが、日本の蜜蜂は、お尻を外に出して、抵抗をしないのだという。このような多神教的な習性が、なぜ日本の蜜蜂に備わってしまったのか、不思議というほかはない。

けれども、ひとつ言えることは、蜜蜂に限らず、日本人にとって、一神教的で「正義を振りかざして他者を攻撃する」という発想は、馴染まない、ということなのである。

それはなぜかといえば、火山の爆発、津波、地震や台風など、自然災害に見舞われ続けた風土で、「こうすれば、救われる」という「理念」「理屈」は通用しない、ということではなかろうか。

日本人は、災害列島の中で、どんなにあがいても、大自然の猛威には勝てないことを、長い歴史の中で、学んできたのである。おそらく、自然界の動物たちも、同じように、日本の風土の中で、諦念を身につけたということではなかろうか。

キリスト教の信者が一パーセントという謎も、このような「災害王国日本」という要素を組み込まないと、理解できないのである。

そしてここに、「なぜ日本には天皇が存在するのか」「なぜ天皇は、守られ続けてきたのか」という謎に対する、ひとつの答えが導き出されるのである。

それは、「天皇」は「神」だからであり、ここにいう「神」とは、「大自然そのもの」をさしている、ということである。

すなわち、「天皇」は現人神であって、「神」であるとともに「荒人神＝鬼」でもあり、それはなぜかといえば、「天皇」が、災害をもたらす日本列島の風土そのものを表象し

ているからではないかと、察しがつくのである。

けれども、そうなると、ひとつの謎が新たに浮かんでくるのである。

それは、なぜ日本人は、「天皇」という存在に、「神のようにおそろしい人」という幻想をかぶせていったのであろう。

それは、何者かが仕組んだことなのか。あるいは、自然発生的に、「天皇は神だ」と、信じるようになったのであろうか。

その具体的なプロセスを、知りたくなるのである。

そしてこの謎解きは、それほどむずかしくはないと思われる。

ヒントは、いくつも転がっている。そのひとつが、「祟る天皇が、祟られる天皇でもあった」ことだ。

これがいったい何を意味するのか、その謎解きを、次章で進めていこうと思う。

第3章　祟られる天皇の謎

なぜ天皇は崇られるのか

天皇は崇る恐ろしい存在であった。天皇家が世界で最も長く続いた王家であったその理由は、「崇る恐ろしい王」だったからではないか、と考えることもできる。

ただし、天皇という王権は、それほど単純な存在ではない。たとえば、天皇にはもうひとつの側面があった。それは、「崇る者」であると同時に、「崇られる者」だった、ということである。

なぜ崇る天皇が、崇られねばならないのであろうか。じつはここに、天皇と日本人の本質を考える上で、重要なヒントが隠されているように思えてならないのである。しかもそれは、「なぜ天皇は崇るのか」という最大の謎を解き明かすための具体的なヒントを、われわれに与えてくれているように思えてならないのである。

そこで、崇られる天皇の例を、いくつか挙げてみよう。

すでに触れたように、『日本書紀』によれば、ヤマトの初代王は神武天皇だが、実際には第十代崇神天皇が実在の初代王で、この人物を分解して、神武天皇の説話が編み出されたのではないかとされている。

問題は、崇神天皇とその子の垂仁天皇の時代、すなわち、ヤマト朝廷の黎明期、彼らが崇る神の脅威にさらされていたということなのである。

まず、崇神天皇から話を進めよう。おそらく、三世紀後半から四世紀にかけての話だろう。

崇神元年から四年にかけて、これといった事件はない。三年に都を磯城に遷し、瑞籬宮と呼んだこと、四年に、「皇祖の天皇が皇位を継承し、政事を行なってきたのは、自分自身のためではなく、人と神を養い、天下を治めるためである」と述べ、自らもこれを継承し、また群卿らも忠誠を尽くし、ともに天下の平安のために努力しようと述べたとある。

ところが、崇神五年、思わぬ事態が出来する。国内に疫病が蔓延し、人口が半減してしまったという。翌年になると、百姓が流離い、背く者も現れたという。天皇の徳をもってしても、これを抑えることはできなかった。そこで崇神天皇は、一日中恐れかしこみ、天神地祇に謝罪をくり返したのだった。

ところで、これよりも前のことになるが、天照大神と倭大国魂の二柱の神を天皇の大殿の中に祀っていたと『日本書紀』はいう。天照大神は、天皇家の祖神で女性の太陽神である。かたや倭大国魂は、ヤマト（大和）の土地の神、国土鎮護の神という

ことになる。

ところが、二柱の神の神威は強く、二柱の神と同じ場所に暮らすことは不安であった。そこで崇神天皇は、天照大神を娘の豊鋤入姫命（とよすきいりひめのみこと）に託し、倭の笠縫邑（やまとのかさぬいのむら）に祀り、神籬（ひもろぎ）（神の宿る森）を建てた（奈良県磯城郡田原本町秦荘（たわらもとまちはたしょう）か、桜井市三輪の檜原（ひばら）神社のどちらかと考えられる。おそらく現在の檜原神社であろう。ここは元伊勢（もといせ）の異名をもつ）。また、日本大国魂神（やまとのおおくにたまのかみ）（倭大国魂神）を、やはり崇神の娘の渟名城入姫命（ぬなきいりひめのみこと）に託し、祀らせた。ところが、渟名城入姫命の髪の毛は抜け落ち、やせ細り、祀ることはできなかったという。

ちなみに、ここに登場する倭大国魂神は、出雲神・大国主神と同一ではないかとされている。

出雲神・大物主神の祟りにおびえたヤマトの初代王

どうにも不思議でならないのは、なぜ、天皇が丁重に祀っていたにもかかわらず、二柱の神々を、宮から遠ざける必要があったのだろう。少なくとも、天照大神といえば、天皇家の祖神であり、御先祖様がおそろしいという話は理解できない。

そして、『日本書紀』の説話は、ここからさらに謎めいていく。

翌崇神七年春二月、天皇は次のように詔する。

「昔、わが皇祖は、大いに鴻基（王の事業の礎）をお開きになり、その後、聖業（天子の事業）はいよいよ高く、天皇の徳風もさらに高まった。ところが、思いもよらず、私の代になってみると、数々の災難に見舞われている。おそらくは善政が敷かれず、咎を天神地祇から受けているのではあるまいか。神亀のトいによってその理由をはっきりとさせずにいられようか」

こういって神浅茅原（桜井市茅原）に神々を集め、トってみると、倭迹迹日百襲姫命（第七代孝霊天皇の娘）に神が憑依し、次のように述べた。

「天皇よ、なぜ国の治まらないことを憂えるのだ。もしよく私を敬い祀れば、必ず平穏が訪れるであろう。」

そこで天皇が名を問うと、

「我はこれ、倭国（これは大和国）の中にいる神で、名を大物主神という」

と述べた。そこで、そのとおり、この神を祀ってみた。だが、何も変化はなかった。

そこで天皇は、沐浴し斎戒して身を清め、殿内を清浄にして次のように祈った。

「私は神を充分敬っていないのだろうか。なぜ、祈りを受け入れてもらえないのだろ

う。願わくは、夢の中でお教えいただき、神恩を与えていただきたい」

と述べた。するとその夜、夢の中にひとりの貴人が現れ、自ら大物主神であることを名乗り、次のように語った。

「そう憂えなさいますな。国の治まらないのは、私の意志なのだ。もしわが子・大田田根子をして私を祀らせれば、たちどころに平穏は戻り、海の外の国は自ずから帰服してくるだろう」

唐突な感じのする神託である。大物主神とは、もともと出雲の神であった。なぜ大物主神が、脈絡もなくここで登場し、崇神天皇に神託を下しているのだろう。

『古事記』には、のちの時代に、大物主神が祟ったと記されている（再び触れる）。大物主神は、ヤマトの王家を恨んでいたのだろうか。そしてなぜ、大物主神は、ヤマトにいたのだろう。

なぜ神話の世界で去っていった出雲神がヤマトに蘇ったのか

ところで、大物主神のお告げは、崇神天皇だけが聞いたのではなかった。この年の秋八月、倭迹速神浅茅原目妙姫（倭迹迹日百襲姫命）と穂積臣の遠祖・大水口宿禰

と伊勢麻績君（麻の和衣を織り伊勢神宮に奉納する一族）の三人も、夢をみていたという。

それによると、

「昨夜の夢にひとりの貴人が出ていらっしゃいました。そして、大田田根子をもって大物主神を祀る主とし、また、市磯長尾市をもって倭大国魂神を祀る主とすれば、必ず天下太平になるだろう、というのです」

天皇はこの話を聞いて、ますますうれしくなった。天下に告げ、大田田根子なる人物を捜し求めたのだった。すると、茅渟県の陶邑（大阪府堺市）で見つかった。天皇は自ら神浅茅原に出向き、大田田根子に問いただした。

「あなたは誰の子なのか」

「父を大物主神と申し、母は、陶津耳（陶邑の長）の娘の活玉依媛と申します」

ちなみに、ここに登場する陶津耳の別名を奇日方天日方武茅渟祇ともいい、「日方」には、日の方角（東）から吹く風の意味がある。

それはともかく、崇神天皇は、これで繁栄がもたらされることを確信した。そして、物部連の祖の伊香色雄をして「神班物者（神に捧げる幣帛をわかつ人）」に任ずることをトうと吉と出て、他の神を祀ろうとトうと、不吉と出た。

同年十一月、伊香色雄（物部氏の祖）に命じて、物部八十手（物部の多くの人々）がつくる祭神之物を用い、また、大田田根子を大物主神を祀る主とした。さらに、倭大国魂神を祀る主に長尾市を指名した。その後に、他の神を祀ることをトうと、吉と出た。そこで八十万の神々を祀り、天社（天神を祀る社）、国社（国神を祀る社）、神地（神社をまかなう田）、神戸（神社に属する家と民）を定めた。そうすると、疫病の流行は終息し、国中が静かになった。五穀は実り、豊饒がもたらされたのである。

これが、崇神天皇の時代の、天照大神や倭大国魂神、大物主神にまつわる説話である。この説話は、一種の神話として片づけられてきたように思う。ありていにいえば、「これは歴史でも何でもなく、深く考える必要はない」ということである。

けれども、崇神天皇が初代王であるとするならば、なぜ、ヤマトの黎明期に、出雲神とヤマトの王家が深くかかわりをもっていたという説話を、用意する必要があったのだろう。神話は観念的な説話としても、その中で王家の祖と出雲神は、すでに、政治的に決着をつけていたはずなのである。

『日本書紀』は出雲神を「邪しき神」と罵り、素戔嗚尊を「暴れ者で高天原の厄介者」と表現している。天皇家の祖神＝正義、出雲神＝悪という図式を用意し終えた上で、なぜ現実の歴史に、再び出雲神を呼び覚ます必要があったのだろう。

だいたいなぜ、出雲の神が、ヤマト建国の中心・纒向のすぐ近く、三輪山に鎮座しているのだろう。

大物主神がヤマトにやってきたいきさつ

出雲神・大物主神がヤマトにやってきたいきさつを、『日本書紀』は神話の時代に、書きとどめている。

大物主神は、出雲を造成した大己貴神（大国主神。中世以降、七福神の大黒様とも習合していく）のことだ。けれども大物主神は、大己貴神とまったく同じ存在、というわけではない。その理由は、以下の神話の中に、記されている。

さて、大己貴神は少彦名神とともに国土の基礎固めを推し進めていた。そして少彦名神が去ると、大己貴神は国中の未完成なところをひとりで巡り、造成していき、出雲国に至った。ここで言挙げをして、次のように述べたという。

「それ、葦原中国は、もとより荒廃して、磐石や草木に至るまで、みな強暴だった。しかし私はすでに砕き伏せ、まつろわないものはない。今この国を治めるのは、私ひとりだ。私とともに天下を治める者はいるのだろうか」

と述べると、神しい光が海を照らし、忽然と浮かびあがってきた。そして、大己貴神に、次のように語りかけた。

「もし私がいなければ、あなたはよくこの国を平定できただろうか。私がいたからこそ、あなたは国を平定するという大業が成し遂げられたのだ」

そこで大己貴神は、

「ならば、あなたは誰ですか」

と問うと、

「私はあなたの幸魂・奇魂である」

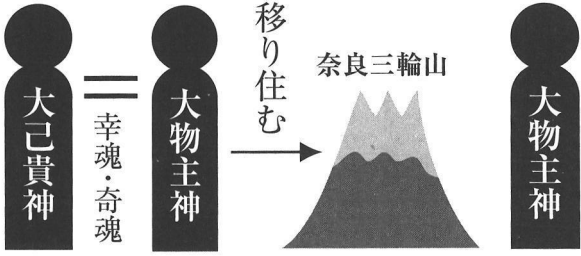
という。大己貴神は、どこに住みたいかを聞いてみた。すると、

「私は日本国の三諸山（奈良県桜井市の三輪山）に住みたいと思う」

というので、宮を建て遷し祀った。これが大三輪の神・大物主神である。神の子は甘茂君、大三輪君、姫蹈鞴五十鈴姫命であった。ここに登場する甘茂君（賀茂氏）は葛城山の東麓に、大三輪君（三輪氏）は、三輪山周辺に勢力圏を持っていた古代豪族として知られている。また、姫蹈鞴五十鈴姫命は、のちに神武天皇の正妃になる。

いっぽう出雲では、この直後天界（高天原）の神々の手で、国譲りが強要され、大己貴神や子の事代主神（言代主神）は、屈辱的な敗北を味わうのだが、大物主神はそ

出雲神がヤマトにやってきた背景





れ以前に、ヤマトに遷っていた、ということになる。

そして、出雲の国譲りを強要した神々の末裔が、天皇家ということになる。

すると、出雲神は天皇家の祖神の仕打ちを恨んでいて、ヤマトの初代王・崇神天皇に対し、「われわれを祀れ」と強要した、ということなのだろうか。

垂仁天皇と出雲

「そもそも、出雲神など、架空の存在なのではないか」

と、首をかしげるかたも少なくあるまい。たしかに、つい二十年ほど前までは、それが常識だった。しかし、第一章で触れたように、数多くの驚異的な遺跡が発見され、山陰地方には、ヤマト建国の直前、大きな勢力が存在していたことがわかってきている。しかも、出雲がヤマト建国に尽力していたこと、それにもかかわらず、なぜかその後、没落していたこともわかってきている。

そうなると、ヤマトの王家が出雲神を恐れたという話、まったくの絵空事とは言えなくなってくるのではあるまいか。

ヤマトの王家と出雲神の関係は、これだけで終わらない。崇神天皇の子で、第十一

代垂仁天皇の時代にも、王家は出雲神と強くかかわっている。

『日本書紀』垂仁二十三年秋九月条には、次のような説話が載る。垂仁天皇と皇后・狭穂姫との間に生まれた誉津別命（誉津別皇子）にまつわる話である。

さて、垂仁天皇は群臣に向かって、

「誉津別命は、すでに三十歳になった。八握髭をたくわえているが、いまだに子供のように泣き止まない。言葉も発せないのは、どうしてだろう。みなで考えて欲しい」

と、詔した。

すると十月、大殿に侍っていた誉津別命は、鵠（白鳥）が大空を飛んでいくのを仰ぎ見て、

「あれは何でしょう」

と、つぶやいたのである。

垂仁天皇は御子が言葉を発したことを喜ばれ、左右の者どもに、

「誰か、あの鳥をうまい具合に捕獲できる者はおらんか」

と尋ねると、鳥取造の祖・天湯河板挙が挙手して、

「かならず捕ってきて、献上しましょう」

と奏上した。そして、鳥の飛んでいった方角を望み、追い、出雲に至り、捕獲した。

あるいは、但馬国で得たともいう。

十一月、天湯河板挙は鵠を献上した。誉津別命は鵠で遊び、ついに言葉を話すようになった。このため、垂仁天皇は天湯河板挙に「鳥取造」の姓を下賜し、鳥取部（鳥を捕まえる部。職業集団）、鳥養部（鳥を飼う部）、誉津部（誉津別命を養育するための部）を定めたのである。

ではなぜ、鵠は出雲に飛んでいったのだろう。なぜ、鵠を捕まえ、連れてきたことで、誉津別命は言葉を話すようになったのだろう。『日本書紀』の記事からは、深意が伝わってこない。

出雲大神の祟り

これに対し、『古事記』には、次のような詳しい説話が載っている。

垂仁天皇の御子・本牟智和気（誉津別命）は、八拳鬚が胸にかかるまで（成人しても）言葉を発することができなかった。

そうこうしているうちに、舟遊びをしているとき、高く飛ぶ鵠の声を聞き、はじめて言葉を発したのだった。そこで山辺（奈良県山辺郡）の大鵠なる者を差し向け、鳥

を追わせた。鳥は木国（和歌山県）から、針間国（兵庫県南部）、稲羽国（鳥取県）、旦波国（京都府中部から兵庫県東部にかけて）、多遅摩国（兵庫県北部）へと逃げ、さらに東に向かい、近淡海国（滋賀県）、尾張国（愛知県）、そして科野国（長野県）、高志国（北陸地方）の和那美の水門（不明）にいたり、ここで網を張り、ようやく捕まえることができたといい、献上したのだった。

ところが、鳥を観れば言葉を発すると思っていたのに、御子は、何も言わなかったという。

垂仁天皇は憂えた。すると、寝ているとき夢に神が現れ、

「わが宮を、天皇の宮と同じように整えたら、御子は言葉を発するであろう」

と、告げたのだった。目を覚ました垂仁天皇は、占ってどの神の意思であるか確かめると、「その祟りは出雲大神の御心」だったという。

そこで御子は、お供を引き連れ、出雲に赴いた。そして出雲の大神を参拝し終えた一行は、肥河（斐伊川）に仮宮を建て、そこに泊まった。出雲国造の祖・岐比佐都美は、青葉で山の形の飾りを造り、川下に建て、食事を献上しようとしたとき、御子が次のように述べられた。

「この川下の青葉の山のようなものは、山に見えて山ではない。もしかして、曾宮（所

在地不明）におわします葦原色許男大神（大己貴神の別名。祟る荒々しい神だから「色許男」）を祀る神主の大庭（祭場）ではないか」

と、問うたという。この言葉を聞いて、お供の者たちはみな喜び、都の天皇に報告したのである。

この後、垂仁天皇は出雲に大神を祀る宮殿を新たに造らせたという。これが、『古事記』に載る本牟智和気（誉津別命）と出雲神の話である。

この話で興味を引かれるのは、最初垂仁天皇は、本牟智和気とともに、磐余池に船を浮かべて遊んでいた、とあることで、しかもその船は、尾張（愛知県西部）の二俣楯を刳り抜いた二俣小舟だったことなのだ。二俣楯には神が依り憑くとされていて、この舟遊びは神事なのだが、出雲の国譲りと尾張氏が深くかかわっていたのではないかというのが筆者の推理で、だからこそ、尾張の二俣楯の話、無視できないが、詳しくは、『伊勢神宮の暗号』（講談社）の中で語ったので深入りしない。

それよりも、ここで問題にしなくてはいけないのは、やはり、出雲神が祟り、ヤマトの王家が丁重に祀った、という話である。

やはり、ヤマトの王は祟られ、しかも、祟る神は出雲神だったことになる。

巨大建造物だった出雲大社

出雲大社の本殿は、高さ十六メートルで、日本でもっとも大きな神社建築として知られているが、その昔は今の倍、あるいは三倍の高さを誇っていたという。

平安時代、すでに出雲大社の本殿は、日本一の建造物だったという。有名な、「雲太、和二、京三」という言葉が、その状況を今に伝えている。出雲大社が一番大きく、大和の東大寺大仏殿、京都の大極殿は、これに次ぐ、というのである。

この言い伝えを信じるならば、当時の出雲大社の本殿は、伝承通り、現在のものよりも倍以上の高さがあったはずである。そして、出雲大社には、この伝承を裏付けるかのような、巨大木柱を三本束ねて一本の柱にし、これを九本使用した巨大本殿の設計図（『金輪御造営差図』）が残されていたのである。

もっとも、このような設計図を、まともに取りあげる学者はいなかった。近代以降、日本海側は太平洋側から比べて、発展の速度が遅かったから、現代人的感覚で、出雲にそのような建造物が存在したはずがないと、鼻で笑われていたものだ。

ところが近年、出雲大社境内遺跡から、『金輪御造営差図』とまったく同じ、三本柱

を束ねた宇豆柱が発見され、出雲大社が伝承通り、巨大建造物であった可能性が高まってきたのである。

それにしても、なぜ、出雲大社は特別大きく造られたのだろう。

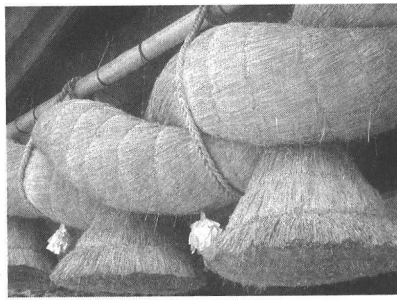
出雲大社がいつ建てられたのか、はっきりしたことはわかっていない。『古事記』によれば、神代の時代に、すでに建立されていた、ということになる。それは、出雲の国譲りの場面でのことだ。

天つ神・建御雷神（武甕雷神）の国譲りの要求に対し、大国主神（大己貴神）は、子の事代主神に判断を委ね、事代主命は要求を応諾し、最後まで抵抗した建御名方神も、科野の州羽（長野県諏訪市）に去った。すると建御雷神は、大国主神の元にやってきて、

「あなたの子、二柱の神は、天つ神の御子の仰せに従い、背かないことを誓った。あなたはどうする」

と問い詰めた。すると大国主神は、次のように述べたのである。

「二柱の子らが申しあげたように、私も背きません。この葦原中国は、命令のままに献上いたします。ただ、私の住処だけは、天つ神の御子が天津日継知らすとだる（「とだる」とは、「充分」「満ち足りた」の意）天の御巣のごとき（高天原の宮のように）、



出雲大社の巨大な注連縄



古代の出雲大社を支えたとされる柱



底津石根（大きな石）に宮柱太く、高天原に千木を高くそびえさせ、祀っていただければ、私は道の曲がりくねり奥まったこの出雲の地に隠れていましょう」

高天原の宮と同じような宮を出雲に建ててくれれば、黙って従いましょう、ということになる。逆に捉えれば、大きな殿舎を建ててくれなければ、祟って出る、といっているようなものである。

そうなると、出雲大社の「大きさ」は、ヤマトの王家の出雲神に対する恐怖心の裏返し、ということになるのだろうか。

天照大神も恐ろしい神だった

なぜヤマトの王家は、出雲の神々を恐れたのだろう。『日本書紀』や『古事記』の神話の中で、出雲神は乱暴者で邪しき神であった。王家の祖の敵であり、彼らを成敗したことは、むしろ当然のことであったにもかかわらず、である。

しかも、天皇家が恐れたのは、出雲神だけではない。なぜか、祖神の天照大神も、「身近に祀ることはできない恐ろしい神」と考え、遠ざけていたようなのだ。

すでに述べたように、崇神天皇は宮の中で祀っていた天照大神と倭大国魂神を外に

出していた。そして、垂仁天皇の時代、天照大神はヤマトからも遠ざけられるのである。

いきさつは次のようなものだ。

垂仁二十五年三月、天照大神を豊耜入姫命（豊鋤入姫命）から離し、倭姫命（垂仁天皇と皇后・日葉酢媛命との間の娘。日葉酢媛は丹波道主王の娘。丹波道主王は、第九代開化天皇の孫・彦坐王の子）に託した。

ここから倭姫王は、大神（天照大神）を鎮め祀る場所を求めて、さまよい歩く。まず、菟田の筱幡（奈良県宇陀市榛原区）に至り、さらに近江国（滋賀県）に入り、東の美濃（岐阜県）をめぐり、伊勢国（三重県中央部）に至ったのである。

ここで天照大神は倭姫命に次のように教えたという。

「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可怜国なり。是の国に居らむと欲ふ」

すなわち、神風の伊勢国は、常世の波がくり返し打ち寄せる国である。ヤマトから見て遠く隔たった美しい場所だ。この国にいようと思う、というのである。

そこで、大神の教えのままに、その祠を伊勢国に建て、斎宮を五十鈴川の上流に建てたという。これを磯宮という。すなわち、天照大神が初めて天から下った場所だというのである。

これが、伊勢神宮のはじまりである。

ただし、これには異伝があって、次のような説話が続く。

天皇は倭姫命を御杖（依代。神は樹木や岩に寄りつくが、倭姫命が依代となる）として天照大神に奉った。倭姫命は天照大神を磯城（奈良県磯城郡）の厳橿（神木）のもとに鎮め、お祀りした。その後（垂仁二十六年）、神の教えのままに、伊勢国の渡遇宮（度会宮。ただし、この説話の中では、外宮ではなく内宮）に遷し祀った。

このとき、倭大神（倭大国魂神）が穂積臣（物部氏の枝族）の遠祖・大水口宿禰に神懸かりし、次のように述べた。

「はじめの時に（天地開闢の直前）、約束して『天照大神は天原（天界）を治めなさい。皇御孫尊（代々の天皇）は、もっぱら葦原中国の八十魂神（天神地祇）を治めよ』と仰せられ、はっきりと、約束したのだ。それにもかかわらず、先代の王・崇神天皇は、天神地祇を祀ったと言えども、正確には、その根本を探らずに、枝葉ばかりに気をとられてしまった。それゆえ、天皇は短命だったのだ。これをもって、あなた（垂仁天皇）は、先の王の及ばなかった点を反省し、慎み祀れば、あなたたちの寿命は伸び、天下は太平になるだろう」

垂仁天皇はこの言葉を聞いて中臣連の祖・深湯主に命じ、誰に大倭大神を祀らせ

ればよいかをトわせた。すると、淳名城稚姫命（淳名城入姫命）とトいに出た。そこで、淳名城稚姫命に命じて、神田を穴磯邑（奈良県桜井市穴師）に定め、大市（桜井市北部）の長岡岬で祀らせた。しかし、淳名城稚姫命はやせ細り、衰弱し、祀ることができなかった。そこで大倭直の祖・長尾市宿禰に祀らせたという。

なぜ黎明期のヤマトの王家に恐ろしい神々がまとわりつくのか

こうして、一連の説話は終わる。

それにしても、よくわからないことばかりだ。

崇神天皇の時代、まず、疫病が蔓延し、占ってみると、出雲神大物主神の意志であることがわかった。そこで崇神天皇は、大物主神の神託に従い、大物主神の子の大田田根子を探しだし、大物主神を祀らせたのだった。その直前、崇神天皇は、神威が強すぎる天照大神と倭大国魂神を、宮の外に出した。そして、二人の娘に祭祀を託したのだった。

これで、恐ろしい神々はおとなしくなると思われた。ところが垂仁天皇の時代、天照大神は都からみて東の彼方、伊勢に向かい、倭大国魂神は、「先代の崇神天皇は、祭

祀の本質を間違えていた」と言い出したのだ。

そこで垂仁天皇は、淳名城稚姫命に倭大国魂神を祀らせるが、やせ細ってしまったという。

ここに、天皇家に危害を加える三柱の神々が出現している。そして、謎めくのは、天皇家の祖神である天照大神が、恐れられ、伊勢に遠ざけられていることだ。

通説はこの記事について、ヤマトからみて東の方角、太陽の昇る方角が、太陽神天照大神を祀るにふさわしく、また、伊勢には、天照大神が祀られる以前、土着の太陽神が祀られていて、ここに天照大神が重なっていったとする。

けれども、この説明だけでは、「神威を恐れて宮から出した」ことの理由を、語り尽くしていない。

そして、王家の祖神の敵であった出雲神が、ヤマト黎明期の都のすぐそばで祀られているのはなぜだろう。

それだけではない。大物主神を鎮めることができたのに、「崇神天皇は本質を見極めていない」と、倭大国魂神に叱責されたのは謎めく。

いったいなぜ、黎明期のヤマトには、「うるさい神」「おそろしい神」が、勢揃いしていたのだろう。そして、倭大国魂神のいう、崇神天皇の見誤った「本質」とは、いっ

たい何を意味していたのだろう。そして、崇神天皇が短命だったという話は、何を意味しているのだろう。

いじめられる出雲

これらの謎は、まだこの時点でははっきりとしない。そこで、注目しておきたいのは、「いじめられる出雲」のことである。

すでに触れてきたように、神話の中で、出雲神は天神の強要を飲み、せっかく造営した国土を譲り渡している。そしてその後、歴史時代に入っても、なぜか出雲は、ヤマトに攻められ続けるのである。

『日本書紀』垂仁二十三年に、誉津別命をめぐる例の事件が語られ、そのあとに続く説話が、二十五年春二月から三月にかけての伊勢神宮起源説話である。

そして、そのあとに続くのは、二十六年秋八月の、次の記事である。

垂仁天皇は物部十千根大連（もののべのとおちねのおおむらじ）に次のように勅した。

「しばしば使いを出雲国に遣わし、その国の神宝を検校（けんぎょう）させたが、はっきりと報告するものがいなかった。だから、お前が自ら出雲に赴き、検校してくるように」

というのだ。そこで物部十千根大連は、神宝を検校して、はっきりと報告したといい、そこで神宝の管理を、十千根に委ねたというのである。

ここにいう検校とは、神宝を管理し、祭祀権を剥奪することであり、祭祀権を奪うということは、政治権力をも手に入れることを意味していた。

この記事、じつはその前段階の話がある。それが、崇神六十年秋七月の、次の記事である。

崇神天皇は群臣に詔した。

「武日照命（武夷鳥）が天から将来した神宝は、出雲大神の宮に納められている。これを観てみたい」

ここに登場する武夷鳥命とは、『古事記』によれば、天菩比命（天穂日命）の子で、出雲臣の祖神にあたる。ちなみに天菩比命は、出雲の国譲りのために高天の原から遣わされた神だったが、出雲に同化し、天神を裏切ってしまった神だった。だからこそ、出雲の国譲り後も、出雲の地を支配するものとして、留め置かれた、ということになろうか。

それはともかく、崇神天皇は矢田部造の遠祖・武諸隅を出雲に遣わした。矢田部氏は物部氏の同族である。

出雲で起きた悲劇

さて、この時出雲の神宝を管理していたのは、出雲臣（出雲国造家）の遠祖・出雲振根であった。ところが、筑紫国に行っていたため、弟の飯入根が応対し、天皇の命令を受け、神宝を献上してしまった。

出雲振根は出雲に戻ってきて、神宝を献上してしまったことを知り、弟を責めて、次のように叱責した。

「あと数日待つべきものを、なぜ簡単に、神宝を渡してしまったのだ」

そして、年月がたっても、弟に対する怨みは消えず、いつか弟を殺してしまおうと考えていた。そこで弟を欺き、

「この頃、止屋の淵（島根県出雲市の旧斐伊川の淵と思われる）にいっぱい水草が生えている。いっしょに行って見てみよう」

と持ちかけた。弟は、兄に従った。これより以前、出雲振根は密かに真刀（本当の刀）にそっくりな木刀を造り、これを腰にさしていた。弟は当然の事ながら、真刀をもっている。

淵に至ると振根は、

「水がきれいで気持ちよさそうだ。いっしょに水浴びをしようではないか」

と誘った。

二人は刀を置き、水を浴びた。振根が先にあがり、弟の真刀を腰に着けた。弟は驚いて兄の木刀をとり、ともに撃ち合った。しかし弟は、刀を抜くことができず、古根に斬り殺されてしまった。

人々は飯入根の死を悼み、次のように詠ったという。

や雲立つ　出雲梟帥が　佩ける太刀　黒葛多巻き　さ身無しに　あはれ

飯入根の太刀に刀身がなかったことを「あはれ」と詠っているが、この歌の中で、飯入根が「出雲梟帥」と呼ばれているのにはわけがあるのだが、それはこの後説明する。

そして、この説話の続きが、垂仁天皇の時代の出雲の神宝の検校であったことは、おわかりいただけるだろう。

出雲振根が飯入根を殺したことはすぐに崇神天皇に報告された。そこで崇神天皇は、吉備津彦と武渟河別を遣わし、振根を殺させたのだった。

こうして、一件落着したが、別の問題が発生した。出雲臣たちは、恐れかしこまって、出雲大神を祀らないまま放置してしまったのである。

時に、丹波の氷上（兵庫県氷上郡氷上郷）の人で氷香戸辺という物が、皇太子の活目尊（のちの垂仁天皇）に奏上していうには、

「私には子があって、自然に物を話し始めて次のように申しました」

と言い、その内容は、次のような物であったという。

「玉菱鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神、底宝御宝主。山河の水泳る御魂。静挂かる甘美御神、底宝御宝主」

この言葉の意味は、以下のようなものだ。

玉のような水草の中に沈んでいる石。出雲の人が祀る本物の鏡、力のみなぎった神宝。水底の宝。宝の主。清らかな山河の清める御魂……。

つまり、これはたんに子供の独り言ではなく、神の言葉にちがいないと大騒ぎになり、出雲臣に、ふたたび出雲大神を祭らせるようになった、というのである。

どうにもよくわからないのは、出雲神を祀ることに、何か憚りを感じるようなことが出雲国造家にあったのか、ということである。

そして、これが作り話ではなく、何かしらの因縁を帯びているからこそ、話に整合

性がなく、謎めくのだと、思えてくることなのである。

ヤマトタケルの出雲成敗

さて、謎はもうひとつある。説話に登場する弟の飯入根が、「や雲立つ」の歌の中では「出雲梟帥」の名で登場していたのはなぜだろう。それは、もともとの話が、倭建命（日本武尊）と出雲梟帥（出雲建）の対決の話であったからなのだろう。

『古事記』の景行天皇の段には、倭建命が熊襲征伐に九州に遣わされ、その帰り道、出雲の地に立ち寄ったと記されている。

ここで倭建命は、出雲建を殺そうと、一芝居打つ。すなわち、偽の刀を用意し、肥河（斐伊川）で水浴びをしようと誘ったのだった。

倭建命はそうしておいて、先に水から上がり、出雲建の刀をとり、斬りかかり、撃ち殺してしまったというのだ。

ここで倭建命は、次のような歌を詠ったという。

やつめさす　出雲建が　佩ける刀　黒葛多纏き　さ身無しにあはれ

自分でだまし討ちにしておいて「あはれ」と同情しているのも不思議な話だが、もちろん、出雲建の悲劇を、後世の何者かが歌い上げたものに違いない。

あらためて指摘するまでもなく、これらの話のいきさつは、出雲臣にまつわる崇神紀とそっくりである。どちらのほうが本当の話だった、という類のものではなく、「出雲の悲劇」が言い伝えられ、それを、『古事記』『日本書紀』それぞれの編者が取りあげた、ということであろう。

ここで注目すべき点は、ヤマト黎明期の王家が、出雲の神宝を強奪したいと考えていたこと、つまりそれは、出雲の祭祀権を掌握することであり、出雲を政治的に支配することに通じていたことである。

考古学の進展によって、出雲が弥生時代後期に大きく成長し、四隅突出型墳丘墓という埋葬文化を日本海を伝って各地に発信していたことがわかってきた。そして、ヤマト建国に一肌脱ぎ、当時の最先端地域・北部九州と強く結ばれていたこともわかってきたのである。

それだけではない。出雲はどうした理由からか、ヤマト建国ののち、没落していたようなのだ。ヤマトの纏向に前方後円墳が誕生し、ゆるやかな同盟関係を築いていっ

た地域に広がっていく中、出雲では、前方後円墳を造ることはなく（あるいは造ることを許されず）、方墳や小振りの「前方後方墳（前も後ろも方形）」を造営していくのである。

すると、実在の初代王・崇神天皇とその子・垂仁天皇の時代、ヤマトが出雲の神宝を検校したという話、信憑性が高まってくるのである。

そして、なぜヤマト建国に一肌脱いだ出雲が、建国直後、ヤマトに裏切られねばならなかったのか、という謎が生まれてくる。

また、ヤマト黎明期に、王家が出雲神の祟りにおびえたという話と、ヤマト朝廷の出雲いじめには、何かしらの因果関係が秘められていたのだろうか。

くり返すが、考古学はヤマト建国直後の出雲の没落が、事実であった可能性が高いことを「掘り当てている」のだから、これらの記事を、軽視することはできないのである。

海の女神に呪われた皇祖神

祟られる王家の話は、神話の世界にも隠されている。それは、出雲の国譲りののち、天孫降臨を果たした皇祖神が、海の女神に呪われた、という話である。海幸・山幸神

話といった方が、通りはよいかもしれない。

いきさつは、次のようなものだ。

天上界（高天原）では、天照大神の子・彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）と高皇産霊尊（たかみむすひのみこと）の娘の間に、天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほのににぎのみこと）が生まれた。高皇産霊尊らは、天津彦彦火瓊瓊杵尊を葦原中国（地上界）の支配者にしようと考え、葦原中国に使者を送り込み、大己貴神に国譲りを強要したのだった。そして、出雲神を追い払うと、天津彦彦火瓊瓊杵尊が南部九州に降臨する。これがいわゆる、天孫降臨である。

天津彦彦火瓊瓊杵尊の子の代の話だ。兄・火闌降命（ほのすそりのみこと）（海幸彦）は、山の幸を得る力（霊力）を、弟・彦火火出見尊（山幸彦）は、海の幸を得る力をもっていた。ある時、ためしに、互いの幸を交換しようと、相談した。だが、どちらも獲物を得ることはできなかった。そして、彦火火出見尊は、兄の釣針をなくしてしまったのだった。

新しい釣針を造っても、兄は許してくれない。困り果てて浜辺を逍遥していると、塩土老翁（しおつつのおじ）なる神が登場し、「心配なさいますな」と慰め、彦火火出見尊を無目籠（まなしかたま）（水が染みこまないほど固く編んだ籠）に乗せ、海神（わたつみ）の宮に誘ったのだった。

海神は事情を聞き、魚たちに協力を仰ぎ、なくなった釣針をみつけてくれた。こうして彦火火出見尊は、海神の娘・豊玉姫（とよたまひめ）を娶（めと）り、海神の宮で三年暮らしたのだった（浦

島太郎の話とそっくりなのは、それなりの理由があってのことだ。後にふたたび触れる)。

ところが彦火火出見尊は、つい望郷の念にかられてしまう。豊玉姫が気づき、海神に伝えると、海神は彦火火出見尊に帰郷を許し、兄・海幸彦に対する仕返しの呪術を授けた。また、豊玉姫は、身籠もっていることを伝える。波風の強い日に、子を生みに海辺に向かうので、産屋(うぶや)を造って待っていてほしいと願う。

地上に戻った彦火火出見尊は、海神の教えのままに、兄に呪術を施し、懲らしめたのだった。そして、豊玉姫は、妹の玉依姫(たまよりひめ)を伴って、海辺にやってきた。いざお産という段になって豊玉姫は、

「私が子を生む姿を覗いてはいけません」

と告げた。だが、「見るな」といわれれば、見てしまいたくなるもの。彦火火出見尊も例外ではなかった。すると、豊玉姫は竜の姿に化けていたのである。

恥を掻かされたと激怒した豊玉姫は、生まれたばかりの子(彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊(ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと))を草(かや)にくるんで捨て、海と陸の道を閉ざし永久に通えないようにして、帰って行ってしまわれた。しばらくして、彦火火出見尊も、亡くなったという。

ここに登場する山幸彦こと彦火火出見尊は神武天皇の祖父であり、もちろん、天皇

家の祖神である。

つまり、ヤマト建国の直前、神話の世界で、天皇家の祖は海神の娘の恨みを買っていたのであり、豊玉姫の祟りにおびえる存在になっていたと考えられるのである。

祟られる天皇の共通点

長々と「祟られる天皇」の例をいくつも取りあげてきたのは、「祟られる天皇」に、ひとつの共通点が見出せるからなのである。

それは、みな「ヤマト建国の前後にトラブルに巻き込まれている」という事実である。ヤマト建国の直前直後の天皇が、なぜか祟られる要因を造り出し、あるいは祟る神に悩まされ続けているのである。

「いや、それはおかしい。ヤマトタケルは第十二代景行天皇の子なのだから、ヤマト黎明期と言えるのか」

という疑問が出てくると思う。けれども、ヤマトタケルはヤマト建国の最大の功労者だったのではないかとするのが、私見の骨子なのである。

このあたりの事情は、他の拙著の中で詳しく述べているので、簡潔に触れておきたい。

鍵を握っているのは、「神」の名をもつ天皇である。

『日本書紀』に登場する天皇には、「天智」や「推古」などといった漢字二文字の漢風諡号があてがわれている。これは、『日本書紀』編纂後に考え出されたものなのだが、すでに触れたように、歴代天皇の中で、「神」の名を冠せられた天皇が、三人存在する。それが、初代「神武」、第十代「崇神」、第十五代「応神」の各天皇で、これら「神」の名を冠する天皇は、ヤマト黎明期の王ではないかと考えている。そこでしばらく、「神」の名をもつ天皇について、考えてみたいのである。

まず、神武天皇は今から二千六百年ほど前に即位したと『日本書紀』はいうが、これは縄文時代、あるいは弥生時代にあたり、ヤマトに国家の基礎ができ上がったとは考えられない。これに対し、崇神天皇の即位は、三世紀後半から四世紀ごろと考えられ、纒向遺跡や前方後円墳の出現とほぼ重なるため、崇神天皇が、実在のヤマトの初代王と考えられている。

その一方で、通説は神武と崇神は同一人物だと考える。それはなぜかといえば、まず第一に、初代神武天皇に関しては、即位にいたるいきさつが事細かに記されているにもかかわらず、第二代から第九代までの天皇の業績が記録されず、実在が危ぶまれていること、初代神武と第十代崇神天皇ともに、「ハツクニシラス天皇（初めて天下を

治めた天皇）」と呼ばれていて、二人の始祖王が登場してくるからである。

さらに、神武と崇神について、『日本書紀』の記述には特徴があって、神武の場合、即位前後の話のあと、しばらく記述が抜け落ちているのだが、その穴を埋めるように、崇神天皇の記述ははじめが抜け落ちている。ちょうどふたつの話を重ねると、ひとつの話になるようにできていて、通説は、本来ひとりの話をふたつに分けてしまったにちがいないとする。

なぜそのような手の込んだことをするのかといえば、王家の歴史を古く見せかけ、威厳をもたせるためだろう、と通説は考えているのである。

呪われた船出をしたヤマト

これに対し、筆者は少し異なる考えをもっている。神武天皇と崇神天皇は同一人物ではなく、同時代人で、また神武天皇と応神天皇が、同一人物ではないか、と推理する。つまり、『日本書紀』の編者は、ヤマト建国の過程を熟知していて、真相を闇に葬るため、ひとつの事件を三つに分解してしまったのではないかと、考えているのである。

なぜこのような仮説が生まれたかというと、ひとつの理由は、神武、崇神、応神の

三人の天皇にだけ、「神」の名が与えられたからである。

普通「神」の名がつけば、「神のような偉大な業績を残した人物」「神のような人徳をもった人物」と、考えがちである。けれども、すでに触れたように、日本人にとっての神とは、「恵みをもたらす有りがたい神」であり、それ以上に「祟りをもたらす恐ろしい鬼」でもあったのだ。したがって、「神」の名を冠せられたから、人々が恋い慕った人物だったかというと、そう簡単に判断はできないのである。

ならば、なぜ三人だけ、「神」の名が与えられたのだろう。

こういうことではなかったか。これまでみてきたように、どうした理由からか、ヤマト建国の前後、祟る神の意志によって、人口は半減し、王家は「祟る神（鬼）＝出雲神・大物主神」におびえ、治政は思うようにならなかったのである。

そしてその祟る神（もっとも恐れられたのは出雲神なのだが）を怒らせる具体的な行動を、ヤマト黎明期の王は、行なっていたことである。つまりそれが、出雲の国譲りであり、出雲の神宝の検校である。また、ヤマトタケルや出雲振根の「だまし討ち」も、出雲が祟る原因となったであろう。

すると、ヤマト建国前後のヤマトや出雲で起きていた「政争」によって、ヤマトは呪われた船出をしていて、だからこそ、「呪われた王」＝「神の名を冠する王」が、黎

明期のヤマトの王に立ったのではなかったか。

さらに推理をたくましくすると、「崇られる王」が「崇神天皇」で、この人物は「神を崇めた」のであり、かたや神武天皇と応神天皇は、「ヤマトに祟りをもたらした恐ろしい王」だったのではないかと思いいたる。「神武」は、鬼の恐ろしさを示し、「応神」は、鬼の命に応じ、ヤマトを呪った王ということになる。

神武天皇の呪い

思い出していただきたい。崇神天皇は出雲神・大物主神の命令を実行していた。それは、大物主神の子の大田田根子を探しだし、大物主神を祀らせることだった。崇神天皇の手に負えない神を、大田田根子が祀りあげ、この結果、ヤマトに平穏がもたらされた。すると、出雲神の子がヤマトの外から迎え入れられ、ヤマトの民が恐れた神を祀りあげたことになる。そうであるならば、崇神天皇は王権を投げ出し、大物主神の子を司祭王に打ち立てた可能性も、疑っておいたほうがいい。つまりそれが、神武天皇だったのではないかと筆者は推理しているのである。

大物主神の住処である三輪山の山頂には、なぜか日向御子という聞き慣れない神が

祀られる。通説は、三輪山が太陽信仰の山であることから、「日向＝太陽に向かう」「日向御子は太陽信仰の神」と解釈するが、それならばなぜ、「日向神」と呼ばず、「御子」の字があてがわれたのだろう。

「御子」は「童子」であり、「祟る鬼」でもある。すると、「日向御子」は、「太陽信仰を表象する鬼」ではなく、「日向からやってきた祟る鬼」の方がふさわしい。該当する人物は、南部九州の日向からやってきた、神日本磐余彦（かむやまといわれびこ）＝神武天皇であろう。

神武天皇は「神のような武力」によってヤマトを圧倒したのではない。政敵を呪うことによってヤマトの王に立っている。

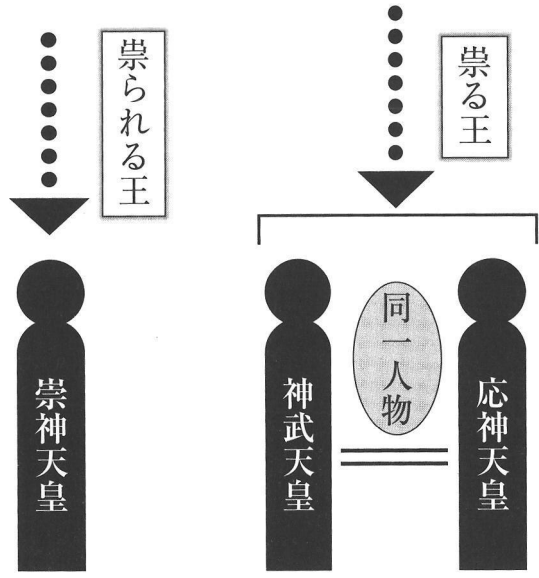
だいたい神武天皇は日向から瀬戸内海を東に向かい、生駒山（いこまやま）方面からヤマト入りを目指したが、ヤマト土着の首長・長髄彦（ながすねひこ）の抵抗に遭い、惨敗を喫していたのだ。この時ヤマトには、物部氏の祖の饒速日命（にぎはやひのみこと）が舞い下り、長髄彦の妹を娶ることで、すでに王として君臨していたのである。

やむなく神武一行は、紀伊（きい）半島を迂回し、ヤマト盆地の南側から、ヤマト入りを目指したのだった。ところが、それでもヤマトの盆地の要所要所には、神武を阻止しようとする勢力が陣取っていた。とてもかなわないと思った神武だったが、夢の中に神が現れ、密かに天香具山（あまのかぐやま）の土を使って土器（八十平瓮（やそひらか））を造り、神を祀り敵を呪えば

「神」の名をもつ天皇の謎

ヤマト建国時の「政争」を鎮める目的

「呪われた王」=「神の名を冠する王」



よいと教わり、その通り実行することで、神武は勝利を手に入れたのだった。

ただし、長髄彦は、神武がヤマトを乗っ取ろうとしているのではないかと最後まで疑った。そんな長髄彦を殺してしまったのは、饒速日命であった。どうやら最初から、「ヤマトの王＝饒速日命」は、神武に歯向かう意志はなかったようなのだ。というのも、『日本書紀』は、神武も饒速日命もどちらも天神の末裔だったと記すからである。

つまり、まずここで確認しておきたいのは、神武は「鬼（神）のような呪い」によってヤマト入りに成功したのであり、また一方で、ヤマトの前政権は、神武を受け入れるかどうかで内部分裂を起こしていた、ということである。

応神天皇がヤマトタケルの孫であったことの意味

ここで、ひとつの仮説を用意したい。

通説は、神武天皇と崇神天皇は同一人物ではないかと推理してきた。その根拠のひとつは、邪馬台国東遷論（とうせんろん）が下地にあったように思える。

すなわち、弥生時代後期の日本列島でもっとも繁栄していたのは北部九州で、邪馬台国もこの地にあって、邪馬台国が東に移動してヤマトは建国されたのだという漠然

とした（もちろん邪馬台国北部九州論者は、「漠然ではない」と反論するだろうが）前提が存在したのである。

けれども、奈良県桜井市の纒向遺跡の発掘が進むと、三世紀に北部九州がヤマトに及ぼした影響は、限定的なものであったことがわかってきたのである。

さらに、北部九州の三世紀を見つめ直すと、ヤマトや山陰からの強い影響が及んでいたことが、次第に明らかになってきた。つまり、西から東というかつての文化の流れは、ヤマト建国前後、東から西に変化していたのであって、北部九州の邪馬台国が東に遷ってヤマトが建国されたという図式は、描きにくくなってきているのである。

そうなってくると、神武と崇神が同時代人だとしても、同一人物ではなかったのではないかという疑念が頭をよぎる。つまり、ヤマトの崇神天皇は、祟りに悩まされ、祟りの原因となった南部九州（日向）の神武を、ヤマトに呼び寄せざるを得なくなったのではないか……、けれども、ヤマト内部でもこれには賛同しかねる勢力が存在し、分裂していたのではなかったか、ということである。

そして、崇神天皇を饒速日命と重ねてみれば、神武東征の意味が、一層はっきりしてくる。「祟る王＝神武」と「祟られる王＝崇神」の関係が、垣間見えてくる。つまり、神武天皇は「祟る恐ろしい人」「ヤマトを呪う人」だからこそヤマトに迎え入れられ、

司祭王として擁立されたのではなかろうか。

さらに、もうひとつ仮説を許されるならば、応神天皇と神武天皇が同一人物ではないかと思えてくるのである。

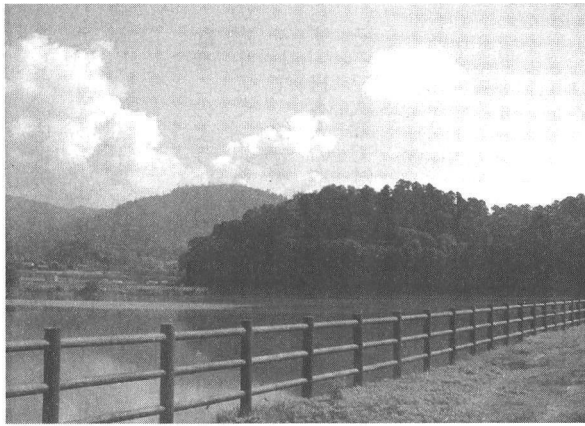
応神天皇は第十五代の天皇で、四世紀後半に実在したというのが、通説の考えだ。しかし、三巻に分かれる『古事記』の中で、応神天皇は中巻の最後を飾っていることは、注意を要する。

上巻は神話に充てられ、中巻の記述は、説話じみていて、神話の域を超えていない。その代表的な例が、ヤマトタケルの物語であった。歴史らしい記述が始まるのは、応神天皇の子の時代からで、それが下巻にあたる。

すると『古事記』の編者は、応神天皇が時代の境目に立っていたこと、ここまでが、ヤマト建国前後の混乱期だったことを暗示しているのではあるまいか。

興味深いことはふたつある。まず第一に、応神天皇は九州で生まれ、幼児のまま瀬戸内海を東に向かい、ヤマトの政敵を打ち倒していることだ。東征ルートが神武天皇とそっくりなことはよく指摘されるが、それよりも大きな問題は、応神が「童子」だったところにある。

「童子」は「鬼」であり、おそろしい神なのである。つまり、神武は「日向御子」と



古代史の解明に大きな役割を果たした纒向遺跡

して恐れられ、応神天皇は「呪う童子」と見なされていたことを、暗示している。

そして第二に、応神天皇がヤマトタケルの孫に当たっていたことである。

ヤマトタケルは九州のクマソタケル、山陰のイズモタケルを成敗し、東国に赴いたという。このヤマトタケルの行動範囲は、ほぼ、ヤマト建国時の同盟関係を結んだ地域と重なる。具体的には、前方後円墳体制を受け入れた地域を、ヤマトタケルは歩いてまわっているのである。

つまり、ヤマトタケルは、三世紀後半から四世紀にかけてのヤマト建国とその混乱と悲喜劇を、ひとりの人物に

仮託して表現したものだったのではないかと思えてくる。

そして、応神天皇がヤマトタケルの孫であったという設定は、重要な意味をもっていたはずである。つまり、ヤマトタケルのヤマト建国ののち、ヤマトは疫病の蔓延で疲弊し、祟る王を連れてきて建て直しを図ったという歴史を再現したのではなかったか。

なぜこのような雲をつかむような仮説にこだわるのかというと、複雑なヤマト建国の歴史こそ、「祟る天皇」「祟られる天皇」の秘密を解きあかす鍵だと考えるからである。

そして、なぜ天皇が祟るのか、なぜ天皇が祟られるのかを知ることで、天皇のみならず、日本人の本質がつかめてくるのではないかと思えてくるからである。

そこで次章では、これらの仮説を、さらに検証してみたいのである。

第4章　皇祖神と出雲神の謎

「崇る天皇」は古代日本人の大発明？

「崇る天皇」は、古代日本人の大発明だったと思う。

弥生時代は戦乱の時代であった。本格的な稲作がはじまり、しばらくして、人々は新たな農地と水利を求めて、隣接する集落と争い、争乱は、各地に伝播していったのである。

瀬戸内海を中心に、防御性の高い高地性集落が作られ、やがて覇権争いに進展していった。中世戦国時代を上まわるのではないかといわれるほどの、混乱の時代が到来したのである。

ところが、三世紀のヤマトに纏向遺跡が出現し、各地に前方後円墳が伝播していくと、それまでの争乱は、まるで嘘であったかのように、収拾していったのである。

つまり、ヤマト建国によって、戦うことを宿命づけられた「稲作民」は、安寧の時代を獲得したのである。この平安を築いたのが「崇る天皇」とすれば、誰がこのシステムを編み出したのか、その根源を知りたくなるのである。

そこで話を、再び「ヤマト建国」に戻そう。

なぜ神武天皇は、ヤマトを呪い、ヤマトはこの呪う恐ろしい王を受け入れたのだろう。

そして、もうひとつの謎は、神武天皇は「日向御子」と名を称えられ、三輪山に祀られていた可能性が出てきたことである。

ここに、大きな謎が秘められていたことは、いうまでもない。

そこで注目してみたいのが、三輪山の出雲神・大物主神のことである。

大物主神は出雲の国譲りの直前、ヤマトに遷し祀られたという。ということは、大物主神がヤマト建国に一枚噛んでいたということなのだろうか。

纒向遺跡には各地から土器が集まってきていたことがわかっているが、出土した土器の中には、山陰系の物が含まれていた。したがって、物証からも、ヤマト建国に出雲が参画していたことは確かめられている。したがって、ヤマトの出雲を無視することはできないのである。

それにしても、神話の中で天皇家の祖神の敵として描かれていた出雲神が、なぜヤマト黎明期の纒向のすぐ近く、三輪山に祀られているのだろう。ヤマトの王家にとってかけがえのない聖地・三輪山は、なぜ王家の敵として描かれる出雲神の山なのだろう。

天照大神と大物主神は一体分身？

三輪山の神を祀る大神神社とその周辺には、奇妙な伝承が残される。それは、「伊勢（天照大神）と三輪（大物主神）は一体分身」だというのである。

これまで、このような伝承は見向きもされなかった。それはそうだろう。『日本書紀』の中で、天皇家の祖神とされた天照大神が、なぜ出雲神・大物主神と同一でなければならないというのだろう。第一、天照大神は女神で、大物主神は男神ではないか。これは、大神神社の神官や僧（神仏習合で、大神神社にも仏教寺院が附属していた）たちが、でっちあげた胡散臭い考えに過ぎないと、斬り捨てられてきたのである。

だが、探れば探るほど、この伝承は「軽くない」と思えてくるのである。

三輪流神道の考えを盛り込んだ謡曲『三輪』は、次のようなあらすじだ。

三輪の里に住む玄賓の元に、女人が通ってくる。玄賓は尊い方なのでと、榊と閼伽（仏前に供える植物と水）をさし上げよう、という。そして、「私の罪をお助けください」とすがり、帰って行く。

じつは、この女人こそ、三輪の神だったのだ。この後、二人は三輪山の神木の元で

再会するが、この時地謡（バックコーラス）は、

「女姿と三輪の神、女姿と三輪の神」

と謡い、女人は三輪明神となってすがたを現す。そして三輪明神は、天岩戸神話をここで再現してみせ、最後に地謡は、次のように謡う。

思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神、一体分身の御事、いまさら何と磐座や

つまり、伊勢と三輪の神が同一であることなど、なぜ今さら改めていう必要がありましょう、というのである。

この時の三輪明神の身なりは不可解なもので、男性神職の服の上に、女性の服飾を着込んでいる。

この三輪明神の性別に関しては、数々の推論が提出され、今日では、神々の性は社会的、文化的な性差＝ジェンダーであり、容易に入れ替わると考えられるようになってきた。つまり、この話の男女の入れ替わりは、深く考える必要はない、というのである。

だが、どうにも腑に落ちない。

謡曲『三輪』の中で、三輪明神は、男性であって女性であるという、不可思議な裳をまとっていた。三輪明神が女神の姿をしているのは、「方便」であるかのようではないか。それはそうだろう、伊勢の天照大神が女神であることは、『日本書紀』にはっきりと記されている。その天照大神と三輪明神が一体分身というのならば、本来男神の三輪明神のままでは、矛盾する。だから、ここは何としても、女装しなければならない。

通説は、「伊勢の神は女神」という『日本書紀』の記事を大前提にして三輪の伝承を見るから、「ジェンダー」にこだわるのであろう。だが、京都の祇園祭（ぎおんまつり）で天照大神は男性の姿で登場している。この事実を、どう考えればよいのだろう。

三輪の伝承は、「本当は、三輪明神も伊勢の神も、どちらも男性だったのだ」と、訴えているのではあるまいか。

出雲神は皇祖神？

三輪神道の言い伝えは信用できないというのが、通説のおおよその考えであろう。つまり、三輪の神を無理矢理伊勢の神（女神・天照大神）と結びつけるために、男神の大物主神を女神にすり替えたに違いないという発想である。

だが逆に、「伊勢の天照大神は、本当に女神なのだろうか」という疑念を、まずもつべきではなかったか。なぜなら、太陽神は「陽」の性格なのだから、基本的に男神がふさわしいのである。

『日本書紀』には、天照大神は最初大日孁貴（おおひるめのむち）の名で登場する。これは、「大日巫女（おおひみこ）」で、太陽神ではなく、太陽神を祀る巫女を意味する。この場合、『日本書紀』の記事から消え去った男神の太陽神の存在が想定可能なのである。

ところで、大日孁貴は「ヒルメ」なのだから、対の男性の「ヒルコ」を想定しなければならず、大日孁貴と誓約（うけい）をした素戔嗚尊（すさのおのみこと）こそ、本来「ヒルコ」だったのではないかと考え、ある時期まで素戔嗚尊が皇祖神と考えられていたのではないか、とする説がある。

素戔嗚尊といえば、出雲の祖神であり、この考えを認めるならば、ヤマトの本当の太陽神は、出雲系であったということになり、三輪の伝承との間に、接点が見出せる。「伊勢と三輪の神が一体分身のことなど、なぜ今さら改まっていわねばならぬのか」という言葉の意味が、ここで明確になってくるはずなのである。

また、『日本書紀』編纂（へんさん）と伊勢神宮の整備はほぼ同時代で（七世紀末から八世紀初頭）、持統女帝（じとうじょてい）を太陽神に重ね合わせたために、本来男神であった天照大神が、女神に化け

たのではないか、とする説もある。

なぜこのような推論がいくつも飛び出すかというと、伊勢の神が男神であったという伝承や傍証が、いくつも見出せるからである。

そもそも伊勢神宮が整備される以前、土着の太陽信仰があって、男性の太陽神が祀られていた。その土着の信仰の上に、伊勢神宮は乗っかったのである。

伊勢神宮の本殿の床下には、心の御柱という「秘中の秘」があって、童女・大物忌だけが祀ることができる。この心の御柱が、土着の太陽神祭祀の名残であった可能性が高いのである。

いくら位の高い男性の神職でも、心の御柱の祭祀に手出しできない。それはなぜかといえば、心の御柱が「リンガ」「男根」であり、女性を好むからであろう。

式年遷宮に際しても、心の御柱にまつわる神事がまず優先され、本殿が建て替えられても、古い心の御柱は小さな祠で守られる。

このように、心の御柱の伊勢神宮における重要性は際立っている。

伊勢の神の妻だった斎王（斎宮）

歴代天皇は、身内の女性を伊勢に遣わしてきた。これが斎宮（斎王）で、未婚（処女）であることが大前提だった。しかも、原則的に、斎宮の任を解かれても、その後の結婚は憚られたらしい。それはなぜかといえば、斎宮が神の妻だからだろう。

五世紀後半、雄略天皇の時代の斎宮・栲幡皇女は、男性と結ばれたと疑われ、自ら命を絶った。そして、死後腹を割かれ、妊娠の有無を確認されたという。

その後、何人もの斎宮が、男性と関係をもったという理由で、解任されている。

『伊勢物語』第六十九段には、次のような話が載っている。

平安初期の歌人・在原業平が伊勢国に赴任したときのことだ。斎王は父親から「いつもの使いよりも、懇ろにもてなすように」と、伝えられた。そこで斎宮は、業平を宮に泊め、業平の部屋に忍び込み、ともに過ごしたという。

はたしてこの時、二人が男女の仲になったのかどうか、物語は何も語らない。だがこの場面、多くを語らないからこそ、タブーを犯したことを暗示している。

鎌倉時代の通海の『通海参詣記』には、奇妙な伝承が記されている。それによれば、

斎王の寝床の上には、毎朝かならず蛇のウロコが落ちていたという。何でも、伊勢の神が通ってきているのだという。

つまり、伊勢の神は蛇で、男性で、毎晩斎王と閨（ねや）をともにする、ということだろう。

巫女のもとに通ってくる蛇といえば、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）と三輪山の大物主神の神話を思い出す。

倭迹迹日百襲姫命は大物主神の妻だった。けれども、夫は昼にやってこないため、姿を見たことがなかった。「一度でよいから」と、願うと、大物主神は、

「明朝、櫛笥（くしげ）に入っていようと思うが、姿を見ても、驚かないで欲しい」

と告げる。はたして櫛笥を開いてみると、そこには美しい小蛇（おろち）が入っていたという。

倭迹迹日百襲姫命は驚いて尻餅をつき、ホト（陰部）を箸で突いて亡くなってしまったのである。

これらの伝承を総合すれば、伊勢の天照大神が男神であった可能性は高まる。少なくとも、それが古代から中世にかけて、人々の共通の認識だったのではないかと思えてくる。性を裏返してしまったのは、『日本書紀』であろう。

そして、そうなると、三輪流神道の「三輪と伊勢は一体分身」とする教義を、無視できなくなってくるのである。

『日本書紀』は何かを隠してしまったのか

三輪流神道が証言するように、天照大神が出雲系だったとすれば、ひとつの謎が解けてくる。それは、第十代崇神天皇のことだ。宮中で祀っていた天照大神の神威が強すぎて、宮の外に移した、という話である。

天照大神が天皇家の祖神であるとすれば、この話、どうにも納得できない。天皇家の守神であるはずの天照大神を、なぜ天皇が恐れる必要があっただろう。だが、天照大神が本当は出雲系であったとすれば、こののち大物主神が疫病を振りまいたという話と、整合してくる。つまり、大物主神こそ、ヤマトの真の太陽神であり、崇神天皇を震え上がらせたということになる。

『日本書紀』は、何かを入れ替えてしまったのではあるまいか。第十代崇神天皇がヤマトの初代王としても、『日本書紀』は、ヤマト建国前後の歴史の大切なポイントを改竄（かいざん）し、真相を抹殺してしまっているにちがいないのである。

通説は、八世紀のヤマト朝廷に、三世紀、四世紀の詳しい歴史は残っていなかったとたかをくくる。だから、誠実に歴史を編纂したとしても、正確な歴史を書くことは

できなかったと考えている。だが、本当にそうだろうか。考古学の発展によってヤマト建国当時の日本列島の様子がわかってくると、崇神天皇の時代の記事の中に、「物証と重なってくる」事例が散見できるようになってきたのである。

たとえばそれが、他の拙著の中で繰り返し述べてきた、前方後円墳の広がりと、四道将軍（どうしょうぐん）の行程の重なりである。崇神天皇は四道将軍を派遣し終えると、「ハツクニシラス天皇」と称えられたが、東国に向かった二人の将軍は、前方後円墳の北限付近まで遠征をしていたのである。

つまり、『日本書紀』編者は、ヤマト建国の歴史を熟知していたが、真相をのちの時代に残すことができず、肝腎なところを闇に葬り、重要人物の正体を抹殺してしまったのではないかと思いいたるのである。

その代表的な例が、ヤマトタケルであろう。この人物を探っていけば、多くの謎が解けそうな予感が、筆者にはある。

そして『日本書紀』は、ヤマトタケルを神話に仕立て上げ、正体を抹殺する一方で、歴史の解明の重要な鍵をこの人物に預けてしまったようなのだ。

拙著『伊勢神宮の暗号』（講談社）の中で、次のような推理を掲げておいた。それは、神武天皇はヤマトタケルの霊剣を受け取ることによって、ヤマトの王に立つことがで

きたのではないか、ということである。

これまでの話と脈絡がなく感じられるだろうが、のちにつながってくるので、この仮説について、少し触れておきたい。

『日本書紀』編者は愉快犯？

さて、神武天皇の一行は、日向からヤマトを目指したが、生駒山を越えることはできなかった。長髄彦の抵抗に遭い、はね返されたのである。

そこで神武天皇は、紀伊半島を大きく迂回する作戦に出た。問題は、神武天皇が熊野の荒坂津に至ったことである。

荒坂津は三重県南牟婁郡荒坂（現在の三重県熊野市二木島町）とする説があり、また『日本書紀』は荒坂津のまたの名を「丹敷浦」とすることから、本居宣長は三重県度会郡大紀町を推理した。

大紀町説の可能性が充分高いのに、通説が積極的にこれを定説化しないで逡巡しているのは、ヤマトに入るために、こんな遠回りをする必要が見出せないからだろう。ここまで来たのなら、熊野の山中に引き返すことなく、伊勢方面からヤマトに入った

方が、よほど楽だからである。

また神武東征は作り話という先入観があって、細かい地理にこだわっていられない、ということだろう。

ところで、度会郡大紀町といえば、伊勢神宮の最初の宮地とされる滝原宮まで、目と鼻の先であり、伊勢神宮も、さほど遠い場所ではない。これが、ひっかかる。もし、『日本書紀』編者が、「神武は伊勢の手前まで行っていた」と記したかったのなら、その深意を知りたくなるところだ。もしこれが作り話としても、そのような設定を築く必要性が、どこにあったのだろう。

神武天皇はここで丹敷戸畔なる人物を成敗したのだが、神が毒気を吐いて、みな病気になり、寝込んでしまったという。すると、この土地に住む高倉下の夢の中に天照大神と武甕槌神が現れ、神武を心配する天照大神が、武甕槌神の霊剣を高倉下に下賜するよう命じたのだった。高倉下はその霊剣を、神武に渡したところ、みな精気を取り戻したというのである。

ここに登場する高倉下が何者なのか、『日本書紀』は明言を避ける。一方『先代旧事本紀』には、尾張氏の祖の天香語山命のことをさしている、と記される。

尾張氏といえば、ヤマトタケルと密接な関係にある。ヤマトタケルは尾張氏の祖の

宮簀媛（美夜受比売）に霊剣・草薙剣を預け、このため伊吹山の神の毒気にやられて、死に至ったのだった。私見通り、神武天皇と応神天皇が同一人物とすれば、ここにひとつのラインが浮かびあがってくる。すなわち、祖父・ヤマトタケルが手放した霊剣を、神武（応神）が、伊勢の手前で受け取ったということである。

ヤマトタケルは霊剣を手放し、神の毒気にやられ、神武は霊剣を手に入れることで、神の毒気に勝ったのであり、この二つの話は、霊剣を通じて、つながってくるのである。

もっとも、ヤマトタケルが手放したのは草薙剣で、神武が受け取ったのは、祭霊であったから、厳密にいえば、二つの話はつながらない。だが、ここには、『日本書紀』編者の謎かけが隠されているように思えてならない。

『日本書紀』はどこか「愉快犯」のようなところがあって、後世の人間が歴史改竄に騙され、真実の歴史を解き明かせないでいるのを予見し、楽しんでいたのではあるまいか。剣がまったく同じであればすぐに気づくであろう二つの事件のつながりを、剣の名を変え、時代を逆さまにすることによって、真相を闇に葬り、その一方で、大きなヒントを残しておいたにちがいないのである。

ヤマトを恨んでいたヤマトタケルと神武天皇

ヤマトタケルはヤマト建国に一肌脱いだ人物である。ヤマトタケルが成敗した九州と出雲は、それまでの繁栄が嘘であったかのように、ヤマト建国とともに没落していた。このことは、考古学が証明している。

ヤマトタケルは東国にも赴いているが、景行天皇はヤマトタケルに軍勢を与えていない。クマソタケルやイズモタケルを成敗したときのような、具体的な戦闘や成敗の記述もなくなる。ヤマトタケルは東国では、騙され、神の毒気にやられるかわいそうな人物に豹変しているのである。

ヤマトタケルが悲劇の英雄と考えられているのは、このような「嘆いて丸腰で東国に赴いた」という説話があるからだ。

この、西国と東国のヤマトタケルの姿は対照的で、それはなぜかといえば、ひとつの理由に、ヤマト建国が「西（出雲や九州）に対しては威圧的」「東に対しては懐柔策」という、現実のヤマト建国時の政策が反映されているからだろう。

問題は、ヤマトタケルが何かしらの理由で、ヤマトを恨んで死んでいったというこ

とである。だから、歴代天皇の葬儀に際し、ヤマトタケルの死を悼む歌が歌われ続け、八世紀の朝廷は、ヤマトタケルの陵墓の鳴動に震え上がったのである。

このヤマトタケルの「ヤマトに対する怨み」は、神武天皇（日向御子）と共通なのだ。したがって、神武天皇がわざわざ東国の入口（伊勢付近）まで出向き、尾張氏の祖から霊剣を授けられた意味は、小さくないはずなのだ。神武天皇は、ヤマトタケルから、「ヤマトを恨む気持」を共有し、ヤマトに入った後、天香具山の呪術を用いて、ヤマトの敵を呪ったのである。

神武に霊剣を授けた高倉下の、別名を天香語（具）山命といい、神武天皇が天香具山の土の呪術を用いたのは、偶然ではあるまい。

そこで改めて謎めくのは、なぜ『日本書紀』編者は、神武天皇の正体を抹殺しようと考えたのか、なぜヤマトタケルという「神話」を構築してまで、ヤマト建国の詳細を抹殺しようと考えたのか、ということだろう。なぜ「ヤマトタケルと神武天皇のつながり」という謎かけまで用意して、ヤマト建国の真相を誤魔化す必要があったというのか。

まずここで考えなくてはならないのは、西暦七二〇年に『日本書紀』が編纂された最大の理由である。

これまで、『日本書紀』は、天皇家の正当性、正統性を証明するために記されたと考えられてきた。具体的には、天武天皇のために記されたと信じられている。それはなぜかといえば、壬申の乱（六七二）で甥を殺して即位したことの「弁明の書」の意味合いも隠されていたとするのである。

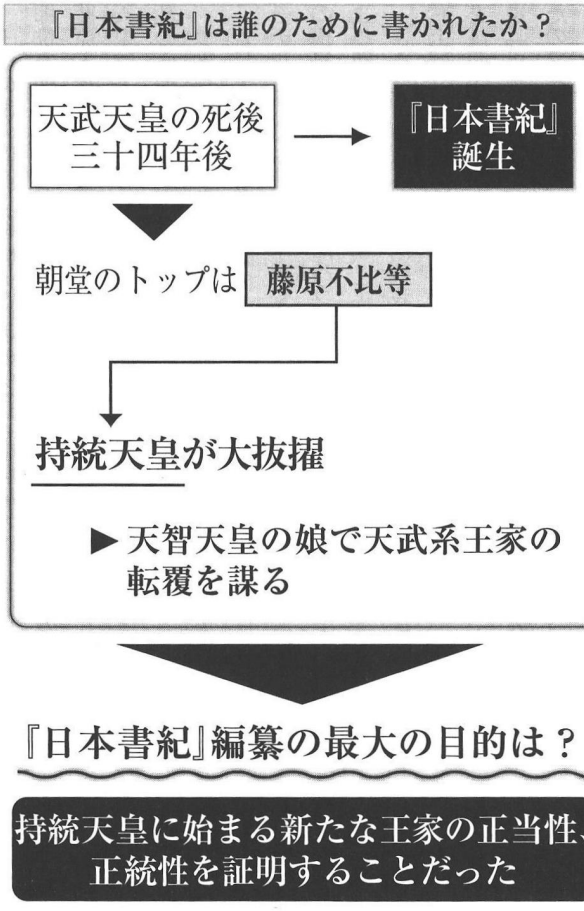
しかしこれは、大きな誤解である。

古代史の謎がいつまでも解けないのは、『日本書紀』が誰のために書かれたのか、この重要なポイントを読み間違えていたからなのである。

『日本書紀』は持統天皇と藤原不比等の歴史書

『日本書紀』の中で天武天皇の生年はわからず、前半生も定かにされていない。東国の尾張氏が天武天皇を陰から支えていたことも抹殺されている。

『日本書紀』は天武天皇の死後三十四年後に完成しているのだから、正確には、「天武のために書かれた」のではなく、「天武の死後三十四年後の政権にとって都合の良い歴史書」だったはずで、大切なのは、それがどのような政権だったのかだ。そしてこの時、朝堂のトップに立っていたのは藤原不比等であったところに、大きな問題がある。


『日本書紀』は誰のために書かれたか？
天武天皇の死後
三十四年後
『日本書紀』
誕生
朝堂のトップは
藤原不比等
持統天皇が大抜擢
▶天智天皇の娘で天武系王家の
転覆を謀る
『日本書紀』編纂の最大の目的は？
持統天皇に始まる新たな王家の正当性、
正統性を証明することだった

壬申の乱の直前、藤原不比等の父親・中臣鎌足は、天智天皇の息子の大友皇子の即位を願っていたといい、天武天皇存命中、藤原不比等は日の目を見ることはなかった。藤原不比等を大抜擢したのは、天武天皇の崩御ののち即位した持統天皇だった。持統天皇は天智天皇の娘なのだから、持統天皇と藤原不比等のコンビは、そのまま壬申の乱の直前の天智と中臣鎌足のコンビと瓜二つである。

つまり、持統天皇は天智天皇の娘として、天武の王家を転覆していたことになる。

『日本書紀』編纂と同時に太陽神天照大神が男神から女神に化けたのは、持統天皇をモデルに天照大神を創作することによって、観念上の「持統天皇から始まる新たな王家」の構築を目論んだからだろう。つまり、『日本書紀』編纂最大の目的は、持統天皇に始まる新たな王家の正当性、正統性を証明することだったのである。

さらに、藤原不比等は蘇我氏や物部氏といった旧豪族を衰弱させることで政権を立ち上げ、「藤原氏だけが栄える世」の構築を目論んでいたから、「藤原氏の正当性、正統性」を証明する必要があった。だから、『日本書紀』の中で、父・中臣鎌足の蘇我入鹿暗殺を「正義の事件」と喧伝し、蘇我氏に「天皇家を蔑ろにした大悪人」と、レッテルを貼ったのである。

また、『日本書紀』編纂の直前、西暦七一〇年の平城遷都に際し、左大臣・石上麻

呂を旧都の留守役にして捨て去ったが、石上麻呂は物部氏で、この古代最大でもっとも古い歴史をもつ豪族は、藤原不比等の手で、没落させられたのである。

『日本書紀』は物部氏の始祖である饒速日命が、すでにヤマトに君臨していたことを認めつつも、この人物が、どこからやってきたのかを記録しなかった。これも、『日本書紀』が物部氏の正体を明かしたくなかったからだろう。

つまり『日本書紀』は、藤原氏が旧政権を倒したことを正当化するために記された歴史書でもあったのだ。

蘇我氏の祖が抹殺された理由

このような『日本書紀』の性格がわかってみると、蘇我氏の祖がまったく記録されていないことに、注目せざるを得ない。

「蘇我氏は渡来系」というのが、一般的な考えである。それはなぜかといえば、蘇我氏が渡来系のテクノクラート（技術者）を活用することによって力をもったこと、蘇我氏のなかに、「高麗」「韓子」といった、渡来人を連想させる名をもった者が登場するからである。

しかしそれなら、蘇我氏を大悪人に仕立て上げた『日本書紀』が、「あいつらは海の外からやってきたエイリアンだ」と、声高に叫ばなかったのは腑に落ちない。その反対に、「蘇我氏の祖が何者なのか、まったく知らない」というように、誰から派生した氏族なのか、まったく記録しなかったのである。

それは、蘇我氏が正統な氏族だったからではあるまいか。蘇我氏が立派なヤマトの豪族であったことを正直に記してしまえば、蘇我氏を滅ぼしたことの正当性が、崩れ去ったからではあるまいか。

そうなってくると、『古事記』に「蘇我氏の祖は建内宿禰（武内宿禰）」と記されていることが、大きな意味をもってくる。

武内宿禰といえば、神功皇后の功臣であり、応神天皇に付き従った忠臣だからである。くどいようだが、筆者は応神天皇は神武天皇と同一人物と考えているのだから、『古事記』の記事が本当なら、蘇我氏の祖は、ヤマト建国の前後から、王家にもっとも近い者たちだったことになるのであり、だからこそ『日本書紀』は、蘇我氏と武内宿禰の関係について沈黙を守った、ということになろう。

ところで、北部九州一帯には神功皇后伝説が濃厚に残され、語り継がれている。『日本書紀』によれば、第十四代仲哀天皇と神功皇后は、九州のクマソが背いたため、北

部九州に陣を張ったといい、また神功皇后は、夫の死後、北部九州の沿岸地帯から南下し、山門県（福岡県みやま市）の女首長を滅ぼし、その足で朝鮮半島に渡り、新羅を打ち破って凱旋したという。そして、宇瀰（福岡県糟屋郡宇美町）の地で、応神天皇を産み落としたのだった。

この近辺では、神功皇后らを神像にして祀る例が多いが、かならず幼子の応神を守る武内宿禰が描かれている。

やはり福岡市の香椎宮の裏手には、武内宿禰にかかわりのある井戸（御飯の水、老の水）が湧き出ていて、不老水とも呼ばれている。武内宿禰が仲哀天皇と神功皇后に献上した水で、武内宿禰が三百歳の長寿を全うしたことから、長寿の水と、信仰を集めている。いまだに薬効があると信じられていて、八世紀以降幕末にいたるまで、わざわざ都に運ばれ、皇室に献上されていたのである。

この近所に、かつて「武内さん」の集落があって「武内屋敷」と呼ばれていたが、現在では一軒残るだけだ。

北部九州の神功皇后人気は、根強いものがある。そして、神功皇后、応神天皇、武内宿禰の三人はかならずセットになっていて、武内宿禰と皇室の強いつながりを示している。

民間伝承などあてにならないというのが、史学界の常識になっているが、応神天皇と同一と考える神武天皇にも、武内宿禰とそっくりな存在（神）が見え隠れするのだから、笑殺することはできない。

武内宿禰とよく似た塩土老翁

神武天皇がまだ南部九州の日向にいたときのことだ。塩土老翁（しおつつのおじ）なる神が、東の方角に四方を山に囲まれた美しい土地のあることを、神武天皇に教えた。これを聞き、神武天皇はそこに都を作ろうと決意したといい、ヤマトに向けて、「東征」を始めたという。つまり、神武天皇をヤマトに誘ったのは、塩土老翁であった。

この塩土老翁、海幸山幸（うみさちやまさち）神話にも登場していた。兄の釣針をなくし途方に暮れていた山幸彦（やまさちひこ）を海神（わたつみ）の宮に誘ったのは、塩土老翁である。

このように、塩土老翁は天皇家の祖たちを「誘う」という役目を負わされているが、塩土老翁が名にあるとおり「老人」であったこと、蘇我氏の祖の武内宿禰も三百歳という長寿で、老人のイメージがつきまとい、さらに応神天皇をヤマトに誘っているのだから、武内宿禰と塩土老翁は、そっくりである。果たしてこれは、偶然なのだろうか。

ところで塩土老翁の別名は住吉大神（すみよしのおおかみ）で、この神は神功皇后と強く結ばれている。

『日本書紀』には、このあたりのいきさつが細かく記されている。

仲哀天皇と神功皇后は、クマソを成敗するために、橿日宮（かしひのみや）に滞在するが、この時神託がおりる。

「クマソにかまっている場合ではない。海の向こうの金銀財宝の国・新羅がある。もし私を祀れば、戦わずして、かの地を服従させることができる」

というのである。ところが仲哀天皇は、丘に登って遠望するが、どこにもそれらしき国が見えないといい、「神は私を騙している」と、神を誹った。すると神は怒り、

「あれほどはっきりと見えるあの国を、なぜ見えないといって私を誹謗するのだろう。この男はかの地を得られないであろう。皇后が孕んでいるお腹の子（要するに応神）が、手に入れるだろう」

と告げたのだった。

こののち仲哀天皇は、神の言葉を無視し、熊襲を攻めてしまった。けれども、破ることができず、橿日宮に戻り、急死してしまったのである。

この場面、『日本書紀』は、仲哀天皇の死因を次のように述べる。すなわち、神の言葉を無視したから、早く亡くなってしまったのだといい、神の祟りによって、仲哀天

皇が亡くなったことを認めている。

一方『古事記』には、少しちがった記事が残されている。神託が下りた晩、仲哀天皇は亡くなったという。いきさつはつぎのようなものだ。

仲哀天皇は琴を弾き、建内宿禰（武内宿禰）は神にお伺いを立てた。神託がおり、海の向こうの新羅を撃てという。仲哀天皇はこの言葉を信じず、琴を弾くことをやめてしまった。すると神は怒り、

「この国はお前が治めるべきではない」

と告げたので、建内宿禰はあわてて仲哀天皇に、

「恐れ多いことです。どうか、琴を弾かれますように」

と促すと、しぶしぶ琴を引き寄せて弾きはじめた。ところが、しばらくして音が途切れてしまったので火をかざしてみると、すでに息絶えていたという。

何ともオカルトじみた話だが、『日本書紀』に比べて、神の怒りが強調されている。

応神の父は住吉大神だった？

ここに登場する神こそ、住吉大神なのであり、結局住吉大神は、神武と応神天皇、

双方にかかわりをもっていたことになる。神武をヤマトに誘ったのが塩土老翁で、この神が住吉大神と同一であることは、すでに触れてある。

それ以上に大問題なのが、住吉大神と神功皇后の関係である。

住吉大社（大阪府住吉区）の『住吉大社神代記』には、奇妙な記事が残される。

この夜に天皇忽に病発りて以て崩りましぬ。「是に皇后、大神と密事あり。（俗に夫婦の密事を通はすと曰ふ）」

すなわち、この夜、仲哀天皇は病でなくなったといい、ここで神功皇后と住吉大神は男女の秘め事をした、というのである。

ひょっとして『住吉大社神代記』は、応神天皇が住吉大神と神功皇后の間の子であったことを訴えているのではあるまいか。

すでに触れたように、宗像大社（福岡県宗像市）の伝承によれば、宗像の子は住吉で、住吉の子は宇佐（応神）だという。二つの神社が同じ秘密を共有していたことになる。

ここで、応神天皇をめぐる不可解な謎にぶち当たる。

仲哀天皇の崩御（天皇の死）は仲哀九年二月五日のこと。これに対し、応神天皇の

誕生日も、『日本書紀』は明記している。それは、この年の十二月十四日である。

誕生した年がわかる古代天皇は、意外に少ないのだが、応神天皇の場合「誕生日」もはっきりとしていて、これは例外中の例外なのだ。『日本書紀』は、応神天皇の生誕日をことのほか重視し強調していたとしか考えられない。

なぜ、応神天皇の誕生日が記録されていたかというと、次のようないきさつとかかわりがありそうだ。

仲哀天皇の死後、神功皇后は北部九州沿岸地帯から南下して山門県の女首長を殺した。この直後反転し、夏四月、男装して朝鮮半島遠征に向かう。この時神功皇后は産み月に当たっていたため、石を腰に挟んで「事を成したあとに、九州の地で生まれますように」と祈祷したという。つまり、おまじないをかけて産み月を遅らせたのである。

そして、すでに触れたように、宇瀰で応神天皇を産み落としたという記事が載り、だから、応神天皇の誕生日が、明確に記録されたわけである。

問題は、応神天皇の誕生日が仲哀天皇の死から計算して、十月十日だったことにある。医学的には、子供は十月十日よりも早く生まれることがわかっているが、古くから人々は、この日取りを信じていた。したがって、この日数を表示することによって、応神が仲哀天皇の子であったことを、『日本書紀』は裏付けようとしているのである。しかも、

産み月を遅らせたというのだから、本当の妊娠は、十月十日前よりも以前のこととなり、『日本書紀』は、「アリバイ証明」を二重にしていることになる。

だが、『日本書紀』の必要以上の「こだわり」が、かえってあらぬ疑いをいだかせる。すなわち、応神が仲哀天皇の子であることは当然であるはずなのに、二度にわたって強調しなければならない理由があった、ということである。

応神は住吉大神の子だった？

このできすぎた誕生日について、いくつかの疑念が提出されている。推理作家の高木彬光や安本美典は、「あまりにも作為的」と指摘する。

『日本書紀』の仲哀天皇の記事に、もうひとつ不審な点がある。それは、仲哀天皇の后妃や子女を紹介する場面で、気長足姫尊（神功皇后）を皇后としたこと、それより以前、大中姫を娶り、麛坂皇子と忍熊皇子を生み、弟媛を娶り誉屋別皇子を生んでいたと記されるが、神功皇后が応神を生んだとは記していないことだ。他の天皇の例を見ても、この記事は、普通ではない。

応神天皇を仲哀天皇の子と認められない、何かしらの要因が秘められていたのでは

あるまいか。

ひょっとして、応神天皇は仲哀天皇の子ではなく、住吉大神の子だったのではあるまいか。もちろん、神の子を人間が生めるわけはない。そうではなく、何者か、歴史には名を残せない男を、住吉大神と呼んだのではあるまいか。そしてもちろん、私見に照らし合わせれば、住吉大神は、神武天皇の父ということになる。

そこで住吉大神に注目すると、興味深い事実が次々と浮かびあがってくる。

JR博多駅から歩いてすぐのオフィス街の一角に、筑前国一宮の住吉神社が鎮座する。先述した『住吉大社神代記』は、この神社を荒魂社と呼んでいる。住吉大神の荒々しい、おそろしい魂を、ここに祀ったということだ。

『日本書紀』も、住吉大神の性格をふたつに分けて語っている。神功皇后が海で応神天皇を産み落としたとき、住吉大神は神功皇后に、

「我が荒魂を穴門の山田邑（山口県下関市一の宮住吉）に祀れ」

と告げている。また、この後、

「我が和魂を、大津の渟中倉の長峡（現在の大阪の住吉大社）に祀り、行き交う沖合の船を見守りたい」

と述べている。前段では、おそろしい祟り神を、後段では、行き交う船の守神とし

て祀られたいきさつが記録されている。

注目されるのは、荒魂が山口県や福岡県といった西側に祀られ、和魂が都に近い場所に祀られたことだ。これは自然なことで、おそろしい神をなるべく遠ざけておきたいという心情の表れである。

そして、意識的に遠ざけられたということは、それだけ、住吉大神がおそろしい神という認識が、古代人にあったからだろう。

大分県宇佐市の宇佐神宮の主祭神は、八幡大神、比売大神、大帯姫命の三柱で、八幡大神は応神天皇、大帯姫命は神功皇后と同一とされている。

ちなみに、八幡大神と応神天皇、大帯姫命と神功皇后が同一視されるようになったのは、奈良時代や平安時代まで時代が下るとされているが、筆者は応神天皇と神功皇后のモデルを祀りはじめたのが、宇佐神宮の創祀ではないかと疑っている（『古代史謎解き紀行Ⅲ　九州邪馬台国編』ポプラ社）。

それはともかく、宇佐神宮の周辺では、いくつもの特殊神事が執り行われるが、それらの祭りが、祟る神を鎮めるためのものとしか思えない。しかもそれらの祭りは、「西と東」「九州とヤマト」を意識しているところに問題がある。

宇佐の行幸会と放生会の謎

宇佐神宮の周辺で行なわれる特殊神事といえば、行幸会と放生会である。

それらの神事についてはすでに触れてあるが、重要な意味が隠されているので、もう少し詳しくみておきたい。

行幸会は四年に一度、宇佐神宮の御神体である薦枕を新調し、古い御神体を海に流す行事だ。

薦枕は中津市の三角池の薦（水草）を用い、宇佐神宮の下宮に鵜羽屋殿を建てて安置する。鵜羽屋殿といえば、海幸山幸神話を思い出す。海の女神豊玉姫が、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊を生んだのも鵜羽屋殿であり、この祭りが「水」や「海」と深くかかわっていることがわかる。

潔斎をすませた神官が、新調した薦枕を鵜羽屋殿から本宮正殿に移すと、神輿に乗せられ周辺を行幸する。だから、行幸会という。

さらに、古い薦枕は大分県杵築市の奈多八幡宮から竜宮に返すために、海に投げ込まれる。そして、薦枕は、潮に流され、かならず東に向かい、伊予の八幡宮に漂着す

るのだという。

一方放生会とは、捕獲した生き物を解き放つ仏会で、宇佐神宮の放生会は、養老四年（七二〇）に大隅と日向の隼人が反乱を起こしたこととかかわりがあるとされている。鎮圧にあたったのが豊前国司で、殺した隼人たちの霊を慰めるために放生会を始めたという。ただし、宇佐神宮の放生会は、ちょっと風変わりだ。

まず、豊前国田川郡の古宮八幡宮に火明命（尾張氏の祖）を降臨させ、宝鏡を三体造るのだといい、本来の仏会にはまったく関係のないことをする。

さらに、八幡古表神社（福岡県築上郡吉富町）と古要神社（大分県中津市）では、船団に神社の傀儡子（操り人形）を乗せ、和間浜に向かう。そして、ハマグリなどの生き物を海に放流し（これが正真正銘の放生会）、この後傀儡子舞（細男の舞）を演じる（これも本来の仏会には関係ない）。これで、放生会は終わる。

放生会のみならず、行幸会も、隼人征伐と関係が深いと一般的には考えられているが、どうにも様子がおかしい。

たとえば、傀儡子舞には、神功皇后の縁者が、登場してくるのはなぜだろう。

第一に、傀儡子は神功皇后の眷属（一族）の神々だという。その上、「住吉さま（海神）」が登場する。

行幸会と放生会

行幸会

宇佐神宮の御神体「薦枕（こもまくら）」を新調して、古い御神体を海に流す

御神体の辿り着く先は「南」ではなく「東」

放生会

捕獲した生き物を解き放つ仏会

「強い東」と「逆転する西」

本来の共通の目的は隼人の鎮魂

しかし実際には？

いずれも「南」や「西」の隼人とはかかわりがうすい

本当の目的は何？

傀儡子舞は、次のように行なわれる。まず、宇佐市北宇佐の化粧井戸（真名井）でお清めを済ませた人形は、東西二手に分かれ、古要相撲を執り行う。最初は互角、次に東軍優勢、西軍は敗れ続けるが、最後に「住吉さま」が登場し、西軍に荷担すると、形勢は逆転し、西軍の勝利で終わるのである。

敗れた住吉大神の鎮魂

宇佐神宮の特殊神事は、本当に隼人征伐と隼人の鎮魂が目的なのだろうか。

行幸会では、御神体は竜宮めがけて流されるが、たどり着くのは「東」であり、隼人の住む南部九州の方角とはまったく関係ない。放生会も、「強い東」と「逆転する西」という東西軸を重視した物語であり、宇佐から見て隼人の勢力は「南」に位置するのだから、これも隼人とはかかわりが薄い。

それよりも、行幸会が意識しているのは、海幸山幸神話であろう。それはなぜかといえば、鵜羽屋殿が築かれ、竜宮に御神体の薦枕は流されるからだ。竜宮とは山幸彦が訪れた海神の宮であり、豊玉姫が子を生んだ鵜羽屋殿を建てるのは、恨みをもった豊玉姫の霊を慰めるためではあるまいか。そして、この神話の中で、塩土老翁（住吉大神）

が大きな役目を負って登場していたことを見のがすことはできない。

後にふたたび触れるが、神功皇后は、「トヨ」の名をもつ海の女神と多くの接点をもっている。したがって、行幸会に豊玉姫がかかわりをもっていることも、笑殺できないものがある。

放生会も同様に、隼人云々では説明がむずかしい。隼人を鎮魂するために、祭りのクライマックスで「神功皇后の眷属」を登場させる必要はどこにもないし、まして「住吉さま」は、まったく脈絡がない。

大切なのは、宇佐神宮の祭りが、「東」を強烈に意識していること、「住吉さま」に一暴れさせ、憂さ晴らしをさせていることである。

これは、「住吉さまは現実には負けたが、せめて祭りのなかでは勝っていただかないと、祟りが怖くて仕方ない」ことを、暗示しているのである。

それにしても、ここで大きな謎が浮かんでくる。それは、『日本書紀』に従えば、神功皇后は歴史の勝者であり、祟るいわれはない。住吉大神も、敗者の要因は見出せない。住吉大神は神功皇后に神託を下し、その神託にしたがって神功皇后は、新羅征討を成功させ、九州に戻り、応神を生み、のちにヤマトの敵を蹴散らしたのである。

ところが神功皇后は、平安時代に至っても、祟る神として恐れられている。

ここに、『日本書紀』によって消し去られた、大きな秘密を感じるのである。

謎解きの鍵を握るのは浦島太郎

祟る神功皇后、祟る住吉大神の謎を解く鍵は、意外な人物が握っている。それが、浦島太郎である。

浦島太郎は、お伽話や昔話とは一線を画す。古代文書のことごとくが、浦島太郎（浦島子などの名で登場する）について、実在の人物として語っている。

ではなぜ、浦島太郎が、神功皇后や住吉大神とかかわってくるのかというと、話はやや長くなる。

浦島太郎の話は、『日本書紀』にも載っている。雄略二十二年七月条には、次のようにある。

丹波国余社郡（京都府宮津市）の瑞江（水江）の浦島子なる人物が、舟に乗って釣りをしていたら、大きな亀を得た。するとこの亀が女人に化けた。浦島子はこれを妻として、海に入り、蓬萊山にたどり着いた。ここで仙人たちと巡り会ったといい、詳しいことは別巻に記してある、というのである。

この『日本書紀』の別巻は現存せず、本当に存在したのかどうかも、定かではない。ただし、八世紀に記された正史の中で、浦島子＝浦島太郎が実在の人物として登場していたこと、別巻を用意するほど、特別な意味をもった人物であったことは、間違いない。何が特別なのかはわからぬが、王家とも大豪族ともかかわりのない人物が、なぜそこまで特別視されたのか、大きな謎を残すのである。

『丹後国風土記』逸文（いつぶん）には、今日に伝わる浦島太郎伝説の原型が記されている。内容は、おおよそ次のようなものだ。

浦島（浦島子）は、与謝郡日置里の筒川村（現在の宮津市）の出身で、日下部首（くさかべのおびと）の祖であった。雄略天皇の時代、浦島はひとり小舟に乗って海で釣りをして、三日三晩ののち五色の亀を得た。亀は女人（亀比売（かめひめ））となり浦島を蓬萊山（仙都）に誘う。そこで浦島と亀比売は「夫婦之理を成した」といい、夢のような年月を重ねた。だが三年後、望郷の念にかられ、亀比売は玉匣（たまくしげ）（玉手箱）を浦島に授け、

「もし私を忘れずに再び戻ってきたいと思われるならば、ゆめゆめこの玉匣を開けてみてはなりません」

という。こうして二人は別れ、浦島は故郷に帰ったのだった。ところが、あたりの景色は一変していた。人の話では、浦島なる人物が三百年前に海で遊び、そのまま帰っ

てこなかったという。

浦島は亀比売が懐かしくなり、約束を忘れて玉匣を開けてしまった。すると、若々しかった浦島は、風雲とともに空に消え失せ、老人のようになってしまい、二度と亀比売に会えなくなってしまったという……。

この『丹後国風土記』の話、今日に語り継がれた浦島太郎説話の原型といっていいであろう。

また、先述した海幸山幸神話と、あまりによく似ていることに驚かされる。山幸彦は塩土老翁の用意した無目籠（まなしかたま）に乗せられて海神の宮に赴くが、無目籠の「籠」の編み目は六角形で、亀を暗示している。産屋のなかをのぞいてはいけないというタブーを犯したことによって、山幸彦は豊玉姫と二度と会えなくなったのである。

重なってくる浦島太郎と住吉大神と武内宿禰

そしてもうひとつ、意外な場所に浦島太郎説話が残されている。それが、『万葉集』なのだ。

『万葉集』巻九―一七四〇には、「水江（みづのえ）の浦島の子を詠（よ）む一首　短歌（たんか）を并（あは）せたり」と

あり、浦島太郎伝説が歌にされている。

問題はふたつあって、第一に、歌の中で浦島太郎の故郷を「墨吉（すみのえ）」といっていること。これは、大阪の住吉であろう。

浦島太郎が住吉大社のお膝元の人間だったという話、聞き捨てならない。

そして第二に、次の短歌が、意味深長なことである。

常世辺（とこよへ）に住（す）むべきものを剣刀（つるぎたち）己（な）が心から鈍（おそ）やこの君（きみ）

つまり、常世（海神の宮、仙都）に住んでいれば良かったのに、自ら望んだとはいえ、かえってきてしまった。なんとこの人は間抜けなのだ、というのである。

行ったまま帰ってこなければ良かったのに、という話が、ここでは浦島太郎の説話の主題だったことが語られている。

この話、何かを暗示しているのだろうか。

そこでまず片づけておかなければならないのは、浦島太郎と住吉の関係である。

すでに触れたように、住吉大神の別名は塩土老翁で、この神はなぜか、老人という特徴がある。かたや浦島太郎も、三年間仙都で暮らし、故郷に帰ってきたら、三百歳

の老人になってしまったのである。

すると、『万葉集』が「浦島は墨吉の人」と述べているのは、浦島と住吉大神が同一人物だったことを、言い表しているのではないかと察しがつく。

また塩土老翁は、海幸山幸神話や神武東征に登場した神である。そして、海幸山幸神話と浦島太郎説話がそっくりなことは、何を意味しているのだろう。

そういえば、宇佐の放生会では、御神体の薦枕（こもまくら）を「竜宮」に向けて流すという神事が行われていた。これも「浦島伝説」を連想させ、行幸会では「住吉さま」が大暴れをしていたのである。

そして、浦島太郎も武内宿禰も、三百歳という奇遇……。しかも武内宿禰は、神功皇后とともに新羅征討をし、功をあげながら、九州に戻ってみると、ヤマトに裏切られるという不運に見舞われるのである。

玄界灘（げんかいなだ）に面した宗像大社（むなかた）（福岡県宗像市）には、次のような伝承が残される。それによれば、朝鮮半島遠征を企てた神功皇后は、妹を竜宮城の海神のもとに遣わし、

「その昔、海神と私（神功皇后）が親子だったよしみで、協力してほしい」

と頼んだというのである。

神功皇后は「トヨの女神とつながる」といっておいたが、「海神の娘」といえば、豊

玉姫や亀比売を思い出す。やはり、神功皇后も浦島伝説の呪縛を受けているのである。

すると、神武天皇には塩土老翁、神功皇后には浦島太郎、応神天皇には武内宿禰という、そっくりな人物がからんでいたことがはっきりとしてくる。

つまり武内宿禰は浦島太郎であり、同時に、塩土老翁（住吉大神）だったのではあるまいか。

蘇我氏の祖がヤマト建国に活躍していたからこそ、八世紀の『日本書紀』は、この事実を抹殺するために、いくつもの目くらましを用意したのであろう。そして、「消された歴史」は、浦島太郎の形になって、語りつがれたのではあるまいか。

誰も語ってはいけないタブー

ここで思い起こされるのは、仲哀天皇が亡くなられた晩のことだ。

『古事記』によれば、あの晩、現場にいたのは仲哀天皇と神功皇后、そして、建内宿禰の三人だったという。

仲哀天皇は神の言葉を信じず、急死した。残されたのは、神功皇后と建内宿禰の二人だけになる。そして、『住吉大社神代記』は、この晩、住吉大神と神功皇后は、男女

の仲になったというのである。

すると、神功皇后と結ばれたのは、実際には建内宿禰であり、これこそ、日本の歴史の裏側に隠された、「誰も語ってはいけないタブー」となっていったのではあるまいか。天皇家の祖が、じつは蘇我氏の遠祖・武内宿禰だったことを、『日本書紀』は、あらゆる手段を構築して抹殺する必要に迫られた、ということではなかったか。そしてだからこそ、「神話」となった浦島太郎説話を、誰もが語りたくて仕方なかったのではないかと思えてくるのである。

ここで注目してみたいのが、出雲神・大物主神が崇神天皇に下した神託のことなのである。

あの中で大物主神は、奇妙なことをいっていた。それは、もし大物主神を祀れば、「海外の国有りて、自づからに帰伏ひなむ」というのだ。つまり、海外の国は、自然に帰伏してくるだろう、というのである。

この一節、前後の事件とまったく脈絡がない。崇神天皇は疫病の蔓延に苦しめられていたのであって、外交問題に頭を抱えていたわけではない。あまりにも唐突な記事なのであり、この神託は単純な「作り話」ではあるまい。挿入する必要のない話だからだ。

ではなぜ、『日本書紀』編者はあえて、外交問題をここで付け足したのだろう。

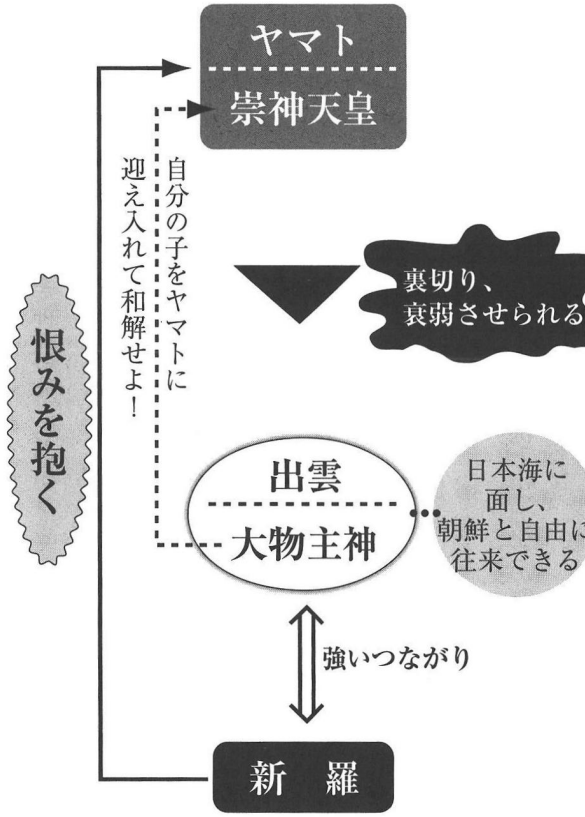
よくよく考えれば、この大物主神の神託、櫃日宮で住吉大神が仲哀天皇に授けた策によく似ていることがわかる。つまり住吉大神は、「隼人にかかわっていないで、新羅を攻めれば、自ずから帰伏してくるだろう」といい、遠征の直前、住吉大神は、「私を祀れ」と要求していたのである。

そこで、ひとつの仮説が頭をよぎる。この仮説は、七世紀の蘇我氏が、奇妙な形で「出雲」と結びついていたことから、武内宿禰を「出雲系」と捉え直すと、浮かびあがってくるものでもある。

ヤマト黎明期、出雲はヤマトに裏切られ、衰弱させられていた。その出雲は、日本海に面し、自由に朝鮮半島と往来のできる場所であった。出雲神話には、出雲と新羅の強いつながりが示されている。たとえば素戔嗚尊（すさのおのみこと）は、まず新羅に舞い下り、そのあとに日本列島にやってきたという別伝を載せているほどだ。『出雲国風土記（いずものくにのふどき）』にも、国引き神話で、新羅の余った土地を引っ張ってきて、出雲にくっつけたといっている。

すると、ヤマトが出雲を攻めたことによって、出雲とつながっていた新羅は、ヤマトに恨みを抱いたのではないかと思えてくるのである。だから、大物主神は崇神天皇に自分の子をヤマトに迎え入れ、出雲と和解すれば、新羅も自ずから近づいてくると

大物主神の神託の意味


ヤマト
崇神天皇
自分の子をヤマトに
迎え入れて和解せよ！
裏切り、
衰弱させられる
恨みを抱く
出雲
大物主神
日本海に
面し、
朝鮮と自由に
往来できる
強いつながり
新　羅

言っていたことになる。

まったくの絵空事と思われてきた神託にも、しっかりとした背景が隠されていたとしか考えられないのである。

ここでわれわれは、動かしがたい常識を、疑ってかかる必要がある。そして、浮かびあがってきた新たな仮説と向き合わねばなるまい。すなわち、神武天皇（応神天皇）とは、「出雲の末裔」であり、「蘇我系」だったということである。

ただしそうなると、私見に矛盾が生まれる。

ヤマトタケルは応神天皇の祖父だった。そのヤマトタケルは、クマソ征討の帰り道、出雲に立ち寄り、イズモタケルを殺していた。これは、ヤマト黎明期の出雲いじめにつながると指摘しておいたのである。

さらに、神武天皇は東征に際し、伊勢に近づき、ヤマトタケルの霊剣を授かっていたのではないかと推理した。したがって、もしヤマトタケルが「出雲の敵」なら、神武＝出雲系という図式は成り立たなくなる。

そこで次章では、複雑に入り組んだヤマト建国と出雲滅亡の謎を、明快に解き明かしていこう。そして、祟る天皇の正体を暴いてしまおう。

第5章　祟る天皇の正体

なぜ出雲の王家は潰され復活したのか

ここでひとつ、これまで掲げてきた設問を変える必要がある。

崇るヤマトの王が、なぜ出雲の神の祟りを恐れたのか、この設問自体が間違いであったことに気づくからである。

実在したヤマトの初代王は、第十代崇神天皇だ。そして、その子の第十一代垂仁天皇の二代の間に、崇る出雲神が、ヤマトに襲いかかった。崇神天皇は疫病の蔓延に苦しみ、出雲神・大物主神の神託を得た。垂仁天皇は、口のきけない皇子のために、白鳥を追わせ、出雲の神の祟りであることを知り、出雲神を丁重に祀った。そしてその一方で、ヤマト朝廷は出雲いじめに走っていたのである。

崇神、垂仁両天皇が出雲神の祟りにおびえたのは、彼らが出雲を裏切り、出雲を潰したからであろう。

そして、一連の事件ののち、崇神の王家は、出雲の子、出雲の末裔を捜し出し、ヤマトに招き寄せ、王に立てたと考えられる。

つまり、崇神、垂仁二代の王家と、神武(応神)天皇の王家は、まったく別の血筋であり、

『日本書紀』は、ふたつの王家が入れ替わっていたことを、神武を初代王に仕立て上げ、時間の軸をずらすことによって、もみ消していたわけである。

したがって、「祟る恐ろしい王家が出雲の祟りにおびえたのはなぜか」ではなく、「祟る王家は神武の出雲系の王家」「出雲の祟りにおびえたのは祟神の王家」であり、「なぜ二つの王家は対立し、和合したのか」と言い直す必要があったのである。

そこで、「なぜ、出雲はヤマト建国の前後裏切られ、復活することができたのか」が、新たな謎として浮かびあがってくる。それはただ単に、祟りの恐怖だけで、王家の入れ替わりが起きていたのだろうか。

ただし、このような仮説は、これまでの常識とまったく異なるので、戸惑われる方も少なくあるまい。『日本書紀』ははっきりと、「出雲は皇祖神（ヤマトの王家の祖）の敵」と記しているのだから、神武の王家が出雲の王家だったことなど、にわかには信じられないだろう。

そこで、「祟る天皇」の正体を明らかにするためにも、最終章で、ヤマト建国前後の歴史を、改めて解き明かしてみたいのである。

ヤマト建国の歴史

出雲は弥生時代後半に勃興し、ヤマト建国ののち衰弱していったと考古学はいう。この流れは、神話に描かれた出雲の国譲りとよく似ている。

出雲の神々は、国造りに励み、国が完成してみると、天界（高天原）の神々が、これを「譲れ」と迫ってくる。よくよく考えれば、これは強奪であり、正義は皇祖神側にはなく、不自然な設定だったことに気づかされる。

そして、神話をよくよく読めば出雲神たちが造り上げた国は、「出雲」と限定しているのではなく「葦原中国」であり、もっと大きな枠組みだった可能性も出てくる。

『日本書紀』によれば、出雲神・大物主神は、出雲の国譲りの直前にヤマトにすでに祀られていたといい、この後、ヤマトには、物部氏の祖の饒速日命が、そして最後に、神武天皇がやってきたと記録する。

そうなってくると、出雲の神々は、ヤマトそのものの大枠をまず造り、その後乗っ取られた可能性も疑っておいたほうがいい。

そこで、考古学が明らかにしたヤマト建国前後の歴史を簡潔にふり返ってみよう。

ヤマト建国は、纒向遺跡の出現と前方後円墳の誕生に求められる。三世紀初頭（半ばとする説もある）、それまで何もなかった三輪山麓の扇状地に忽然と、政治と宗教に特化された巨大都市が出現した。それが纒向遺跡である。

纒向遺跡には、各地の土器が集まっていた。前方後円墳も、数々の埋葬文化を寄せ集めたものと考えられている。したがって、強い王が出現したのではなく、多くの首長層の総意のもとに、新たな枠組みが形成された可能性が高まっている。

たとえば、箸中山古墳（箸墓）に代表される「定型化した前方後円墳」は、三世紀半ば（あるいは後半）ごろ、纒向遺跡で完成し（それ以前の前方後円墳を纒向型前方後円墳と呼んでいる）、その後、この新たな埋葬文化は各地に伝播し、ヤマトと地方の間に共存関係が成立し、ゆるやかな連合体が形成されていったと考えられている。

つまり、これがヤマト建国であり、時代的にも、崇神天皇が初代王にふさわしいということになったのである。

問題は、纒向遺跡に人々が集まってきたプロセスにある。

弥生時代の日本列島で、もっとも繁栄していたのは北部九州で、朝鮮半島との間の交易によって、富を貯えたのだった。

特に、鉄の保有量は他地域を圧倒し、独占状態と言っても過言ではなかった。

鉄は武器だけではなく、農具、工具として優れており、鉄の保有量がそのまま地域繁栄のバロメーターになったのである。

ところが、弥生時代後期後半になると、徐々に北部九州から見て東側の地域が、鉄を確保するようになっていく。出雲や吉備が、鉄を貯えていくのである。

一方、ヤマトや畿内の鉄器保有量といえば、まさに皆無と言って良いほど貧弱で、この状態は纒向出現まで続くのである。

ヤマト建国にもっとも貢献したのは吉備

それでは、なぜヤマト建国の直前、出雲と吉備に、鉄器が流れ込んでいたのだろう。次のような説がある。

北部九州にとって、ヤマトは危険なライバルであった。ヤマトは天然の要害で、この地が繁栄すれば、北部九州は安穏としていられなくなる。そこで北部九州の諸勢力は、ヤマトに鉄がまわらないように、関門海峡を封鎖し、協力を仰いだ出雲に鉄をまわし始めたのではないか、というのである。

この考えは、説得力がある。北部九州は「東側からの攻撃にすこぶる弱い」という

地勢上のアキレス腱があって、そのためヤマトの伸張を恐れたはずなのである。

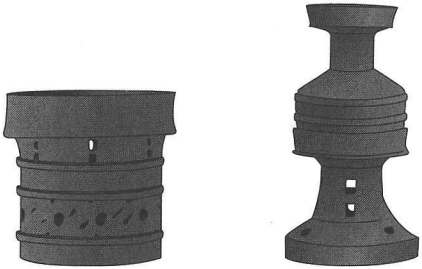
このことは他の拙著のなかで繰り返し述べてきたが、大分県日田市の盆地が、筑後川の上流にあって、ここを東側の勢力におさえられ、沿岸部を攻められたら、北部九州勢力は身動きが取れなくなるのである。

事実、纏向出現直後、日田盆地北側の高台には、環濠集落が営まれ、ヤマトと山陰系の土器がもたらされている。どうやら、ヤマトが拠点を造り、北部九州を威嚇していたようなのだ。

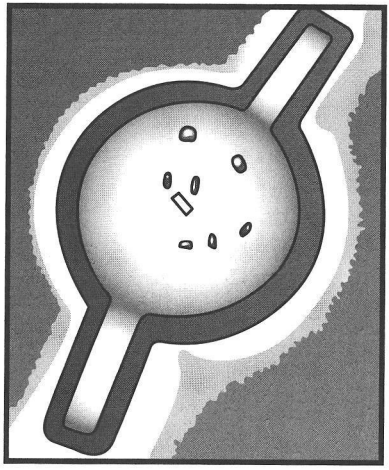
それはともかく、弥生時代後期の関門海峡封鎖という北部九州の仕掛けた策は、思わぬ展開を見せていく。

出雲と吉備が鉄器を増やし繁栄を勝ち取ると、彼らは一様に、東に向けて勢力圏を拡大しようと考えたようなのだ。出雲では四隅突出型墳丘墓という巨大で個性的な首長墓が登場し、この埋葬文化が日本海を伝って越（北陸地方）に伝播している。そして吉備が瀬戸内海を東に向かい、ヤマト進出を目論んだ疑いが強い。これが、纏向遺跡出現のきっかけになった可能性が高いのである。

なぜそのようなことが言えるかというと、纏向に集まった土器のなかで、吉備の物だけが「道具」ではなく、「宗教儀礼用」の特殊な物だったからだ。いわゆる、特殊器



纏向遺跡に集まった特殊器台形土器（左）と特殊壺形土器



吉備に出現した楯築弥生墳丘墓（俯瞰図）

台形土器や、特殊壺形土器と呼ばれているものだ。そして、これらを前方後円墳の上に並べて儀礼が執り行われたのだが、その前方後円墳の原型も、すでに吉備に誕生していた可能性が高い。

たとえば、前方後円墳が纏向に出現する直前、吉備では、楯築弥生墳丘墓のように、円墳の左右に方形の出っ張りがくっついた、独自の墳丘墓が生まれていた。これが、前方後円墳の元祖だったのではないかと疑われているのである。

つまり、ヤマトの象徴である前方後円墳にもっとも影響を与えたのが吉備であり、纏向造営の主導権を吉備が握っていたと考えられるのである。

ただし、纏向に集まった土器のなかで、もっとも数が多かったのは、東海から北陸、近江にかけてのもので、これらの地域の活躍も無視できないのだが、この点に言及すると話が煩雑になるので、ここでは割愛する。

饒速日命は吉備からやってきた？

興味が湧くのは、『日本書紀』に記されたヤマト建国の様子と、考古学の指摘が重なることである。

そこで、神々がヤマトにやってきた順番に注目してみよう。すでに触れたように、出雲神・大物主神が、まずヤマトで祀られたという。そして次に、いずこからともなく物部氏の祖の饒速日命が天磐船（あまのいわふね）に乗って舞い下り、土着の首長・長髄彦（ながすねひこ）の妹を娶り、ヤマトに君臨した。そして最後に、九州から神武天皇がやってきたのである。

ここで問題にしたいのは、饒速日命のことだ。この人物がどこからやってきたのか、『日本書紀』は黙して語らないからだ。したがって、この人物の出身地に、重大な秘密が隠されていたと察しがつく。

饒速日命は北部九州からやってきたのではないかとする考えが根強い。それはなぜかと言えば、物部氏の密集地帯が北部九州沿岸部（遠賀（おんが）川流域）に存在すること、かつて、邪馬台国東遷説が有力視されていた頃、物部氏は天皇家の尖兵（せんぺい）となってヤマトに乗り込んでいたのではないかという推理（谷川健一『白鳥伝説』集英社）が、もてはやされたからである。

しかし、纏向遺跡の発掘調査が進むにつれ、弥生時代の王者・北部九州がヤマトに乗り込んだとする考えは、通用しなくなってしまった。北部九州の纏向に及ぼした影響力は、限定的なものだったのである。

また、北部九州も、ヤマト建国の前後から凋落を始めていたことがわかってきている。

文化の流れは、それまでの「西から東」ではなく、「東（ヤマト・山陰）から西（北部九州）」へと、変化していたのである。

では、饒速日命はどこからやってきたのだろう。そしてなぜ、ヤマトに君臨することができたのだろう。

そこで物部氏の畿内における拠点となった大阪府に注目すると、大きなヒントが得られる。というのも、物部氏でもっとも有名な人物は物部守屋（もののべのもりや）で、六世紀に物部守屋は八尾（やお）市で滅びるが、その八尾市や周辺からは、三世紀の吉備系の土器が大量に発見されているからである。

それだけではない。崇神天皇と垂仁天皇の時代、ヤマト朝廷は出雲いじめに走ったが、差し向けられたのは、物部系の人物と、「吉備」の名を冠する人物であった。これは、偶然ではあるまい。

物部氏が分布していたのは、北部九州だけではない。大阪から山陽道、四国にかけて、また関門海峡周辺といった瀬戸内海の要衝を、ことごとくおさえていたのである。

吉備が瀬戸内海という古代版ハイウェイを牛耳ることで富と繁栄を約束され、ヤマト建国の中心的存在となったのであり、吉備は五世紀半ばまでヤマト朝廷を圧迫するほどの繁栄を誇るが、物部氏の支配していた領域が手に入らない限り、吉備の繁栄は

起こりえなかったことになる。

つまり、物部氏は吉備からやってきたのではないかと思えてくるのである。

そして、饒速日命を吉備出身と考えれば、なぜ彼が出雲の祟りを恐れ、神武天皇を迎え入れる気になったのか、その真相が読み解けてくるように思えてならないのである。

出雲との主導権争いに勝利した吉備

ヤマトの纏向造営の目的は、多くの地域が寄り集まって、それまで地域ごとに争っていた時代から、大きな枠組みを構築し、手をつなぎ、資源争いを収拾し、新たな時代を作り上げようとするものであっただろう。弥生時代は戦乱の時代であり、古墳時代は戦乱が収拾された時代と言っても過言ではなかった。もちろん、北部九州の鉄器独占を打破するための連合体でもあったろう。

ただし、大同団結してみたものの誰が王になるのか、あるいは、誰が主導権を握るのか、混乱が起きていたことも疑っておいたほうがいい。

そして、利害のぶつかり合うふたつの勢力の存在が浮かびあがってくる。それが、

日本海（山陰・出雲）と瀬戸内海（吉備）の対立である。

ヤマト誕生のきっかけは、いかにして北部九州が独占していた鉄器を手に入れるかであり、ヤマトが誕生してみると、西側に大きなふたつの交易ルートができ上がっていたのである。もちろんそれが、日本海と瀬戸内海である。

この時代のヤマトの王は、朝鮮半島から先進の文物をいち早く取り込み、威信財（いしんざい）を各地の首長に分配することによって、権威を保ち続けた。したがって、交易ルートの確保は至上命題で、また、ルート同士の競争も起きていたわけである。

そんななか、日本海と瀬戸内海は、互いをライバル視していたにちがいない。

日本海の長所は、直接朝鮮半島に渡れること、また、日本海を東回りに進めば、北東アジアとも交流を持てる点にあった。短所は、厳冬の時期の航海が厳しかったであろうこと、ヤマトに荷を送るには、一度若狭や敦賀（つるが）付近で陸上輸送に切り替えなければならぬことであろう。

かたや瀬戸内海はどうかというと、多島海（たとうかい）の内海であり、潮の流れが速く、労力をかけずに物資を安全に、一年中運べることだった。短所は、関門海峡を封鎖されれば、日本海に出ることができず、せっかくの安全な航路が、死に体になってしまうことだった。

ヤマト朝廷が一枚岩であれば、ふたつの航路は「本道」と「バイパス」あるいは、緊急時の予備として使えたであろう。しかし、いまだ安定した政権が育っていない渾沌のなか、ふたつのルートのそれぞれの首長が主導権争いを始めれば、争乱に発展するのは、必然だったのである。

そして、ふたつの流通ルートが激突した結果、出雲が敗れ、瀬戸内海勢力がヤマトの主導権を握ったと考えられる。

ヤマト建国後の出雲が、前方後円墳を造らず、方墳や小振りな「前方後方墳」を採用していたことは、すでに触れてある。これに対し吉備では、五世紀半ばにいたるまで、ヤマトの王家と競うかのような、巨大な前方後円墳を造営していくのである。

勝敗の行方は、はっきりと出た。

出雲と吉備それぞれの思惑

危険な徴候は、あったのだ。

三世紀、吉備の特殊器台形土器は東のヤマトに流れていったが、山陰系の土器は、北部九州で多数見つかっている。つまり、吉備は東へ、出雲は西へ、ベクトルを向け

ていたようなのだ。

もちろん、それが、日本海と瀬戸内海の、それぞれの利にかなっていたからであり、当初は反目する要素はなかったのかもしれない。しかし、北部九州と出雲が強い絆で結ばれてしまった時点で、ヤマトを重視した吉備は、次第に疑心暗鬼になっていった可能性がある。

弥生時代後期の北部九州は、ヤマトに鉄を送るまいとして、関門海峡を封鎖した可能性が高い。そしてこの時期、出雲の四隅突出型墳丘墓には、吉備系の土器が流れ込んでいたから、おそらく、出雲と吉備は手を結び、北部九州のひとり勝ち状態からの脱却を、計っていたのだろう。つまりこの時点では、双方の思惑が合致したことによって、ヤマトに纏向遺跡が出現する契機となったのであろう。

すると纏向完成後のヤマトにすれば、出雲と北部九州が接近することは、弥生時代後期に逆戻りする恐怖につながっていったのではなかったか。

つまり、ヤマトに拠点を造り、瀬戸内海を活用することによって富を貯えようと目論んだ吉備にとって、出雲の動きは油断ならぬものになっていったのだろう。

興味深いのは、石見国（島根県西部）の物部神社（大田市）の伝承である。それによれば、ヤマト建国後、饒速日命の息子・可美真手命（宇摩志麻治命）が、越（具体的には

新潟県西蒲原郡の弥彦神社のあたり）に遠征し、その後石見国に降臨し、この地に拠点を造ったという。

問題は、越と石見の位置取りである。

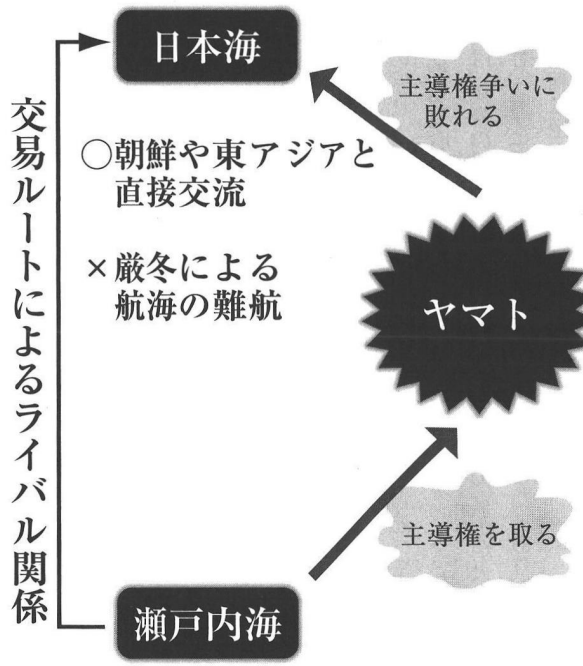
弥生時代後期の出雲に四隅突出型墳丘墓が出現し、この埋葬文化が越に伝播していたことはすでに触れてある。その、「出雲の勢力圏」を包み込むような二ヶ所に、可美真手命は楔を打ちこんだのである。

これは、明らかな出雲潰しであり、日本海の流通を押さえ込んだことを意味する。この可美真手命の行動は、第十代崇神天皇、第十一代垂仁天皇の時代のヤマトの出雲いじめの尖兵が物部氏だったことと、ぴったりと重なってくるのである。

ヤマト建国前後の景色が、このように見えてきたことによって、物部氏の思惑が、はっきりとしてくる。この可美真手命の行動が、物部氏の出身地を明らかにしているように思えてならない。

物部氏の敵は出雲であり、だからこそ、彼らは出雲潰しに積極的だったのだろう。そして、これらのことから、物部氏の祖・饒速日命は、吉備からヤマトに舞い下りたと考えられる。そして、第十代崇神天皇とは、饒速日命のことではないかと思えてくるのである。

日本海対瀬戸内海の対立



神功皇后と邪馬台国のつながり

ヤマト建国と出雲の衰弱。

ふたつの流通ルートの覇権争いは、瀬戸内海勢力の勝利に終わったのである。

このような考古学から浮かびあがってくるヤマト建国のいきさつを、『日本書紀』はしっかりと記録していた疑いがある。それはもちろん、出雲の国譲りなのだが、もうひとつ、歴史時代に、それらしき事件が記録されているのである。

近年、ヤマトの纏向遺跡が三世紀に出現したことから、邪馬台国の時代と重なると騒がれているが、『日本書紀』は、第十五代応神天皇の母・神功皇后が、邪馬台国の卑弥呼か卑弥呼の宗女・台与（壱与）だったかもしれないと述べている。

『日本書紀』神功皇后摂政三十九年是歳の条の記事が次のようなものだ。

「『魏志』には、明帝の景初三年（二三九）の六月、倭の女王が大夫難升米等を遣わし、帯方郡にいたり、天子に詣でて朝献することを求めてきたとあり、太守鄧夏は、吏（役人）を遣わし京都に至らしめたという」

さらに、四十年、四十三年に、関連記事が載り、また六十六年には、次のような記

事が残される。

「この年、晋の武帝の泰初（泰始）二年（二六六）。起居注には、次のようにある。武帝の泰初二年十月、倭の女王が通訳を重ねて貢献してきた」

というのである。

ここに登場する「倭の女王」は卑弥呼ではなく、台与と目されている。卑弥呼はすでに、亡くなっていたからだ。

この一連の記事から、『日本書紀』編者が、神功皇后を邪馬台国の時代に当てはめていたことがわかる。つまり「神功皇后は卑弥呼か台与だったのではないか」と、推理していたということになる。

もっとも、第十代崇神天皇を三世紀～四世紀初頭のヤマトの王と仮定すれば、第十五代応神天皇の母・神功皇后の時代は四世紀後半となり、時間にズレが生まれる。そこで通説は、『日本書紀』編者が「魏志倭人伝」を読んで、四世紀の神功皇后を、無理矢理百二十年干支二運ずらし、「魏志倭人伝」の記事に、神功皇后を当てはめてしまったのだろうと考えている。

さらに通説は、神功皇后は実在の人物を見なしていない。六世から七世紀にかけて活躍した女帝たちの姿をモデルに創作された偶像に過ぎないというのだ。

しかし、神功皇后伝説は、北部九州や瀬戸内海沿岸部に、濃厚に残される。あたかも、昨日そこにいたのではないかと思えるほど、臨場感のある言い伝えが、それぞれの土地に残る。はたしてこれが、八世紀の朝廷で勝手に造られたお伽話で、そのまま地方に伝播したものなのかというと、じつに怪しい。だいたい、神功皇后の祟りにおびえたのは、『日本書紀』編纂（へんさん）後の朝廷の貴族連中であった。自らが編み出した「絵に描いた餅」におびえることなどありえようか。

神功皇后は日本海の女王

逆に、神功皇后を邪馬台国の同時代人と考えると、多くの謎が解けてくる。

たとえば、神功皇后の九州遠征は、ヤマト建国前後の混乱を、正確に言い当てているのではないかと思えてくる。

まず最初に指摘しておきたいのは、すでに触れたように、神功皇后が「海のトヨの女神」といたる場所でつながりをもっていたことで、それはなぜかと言えば、神功皇后が邪馬台国の台与だったからではないかと、筆者は疑っている。そして、神功皇后を台与と見なせば、多くの謎が解けてくるのである。

仲哀天皇と神功皇后は、隼人が背いたことを知り、まず穴門豊浦宮（山口県下関市）に拠点を造る。ここに数年滞在し、北部九州の動静をうかがうのだが、いよいよ九州に渡ろうとすると、北部九州の沿岸地帯の首長たちが、こぞって恭順してきたという。

彼らの分布域は、纒向型前方後円墳の伝播地域と、ほぼ重なっている。つまり、ヤマトに纒向遺跡が完成し、前方後円墳の前身となる埋葬文化が生まれ、これをいち早く取り入れていた地域だったのである。

橿日宮に拠点を移した仲哀天皇と神功皇后であったが、ここで仲哀天皇が神託を無視して急逝すると、神功皇后は筑紫平野を南下し、山門県（福岡県みやま市）の女首長を滅ぼし、九州征討を終えている。

問題は、山門県こそ、邪馬台国北部九州論の最有力候補地だったことで、「トヨ（台与）かもしれない神功皇后が、邪馬台国の有力候補地の首長（女王）を殺した」となれば、ここに、「ヤマトのトヨによる邪馬台国のヒミコ殺し」という仮説が得られるのである。

「魏志倭人伝」には、卑弥呼の宗女が台与、と記されているのだから、台与が卑弥呼を殺した、という推理は、受け入れられないかもしれない。しかし、のちに触れるように、邪馬台国論争が長引いたのは、「邪馬台国の偽証」がネックになっていたからで、その偽証のなかに、卑弥呼と台与の関係も含まれると睨んでいる。

それはともかく、ここでもうひとつ指摘しておきたいことがある。それは、神功皇后の遠征の行程で、彼女はヤマトから九州に向かったのではない、ということである。『日本書紀』によれば、クマソ反乱の報に接し、仲哀天皇は瀬戸内海を西に向かったが、神功皇后は角鹿（福井県敦賀市）から日本海づたいに出雲を経由して、下関に向かったという。

この説話、ようするに弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓の分布域をピンポイントで通過しているのであって、神功皇后は「出雲」「日本海」の女王だったと推理することが可能だ。

通説は、「神功皇后など、どこにもいなかった」と高をくくるが、それならばなぜ、このような奇妙な設定を、わざわざ用意する必要があったのだろう。

神功皇后が日本海から現れた意味は、じつに深い。

のちに橿日宮で仲哀天皇が神託を無視し亡くなり、神功皇后が神託にしたがって勝利を収めたということは、神託を下した神が「日本海の利を代弁する者」であり、かたや仲哀天皇が、瀬戸内海の利権獲得のために九州に赴いたことを暗示している。この図式、まさに、ヤマト黎明期の主導権争いそのものではないか。

邪馬台国論争迷走の始まり

あの晩、仲哀天皇は、神託を無視して「殺された」。つまり、この時点で、瀬戸内海勢力は出雲と北部九州沿岸部の首長たちの提唱した策に、屈したと言うことであろう。あるいは、出雲と北部九州連合が、吉備の主導するヤマトと、袂を分かったということかもしれない。

では、邪馬台国問題をどう考えればよいのだろう。神功皇后＝出雲という仮説を当てはめて、すっきりとつじつまは合ってくるのだろうか。

まず、ここで整理しておきたいのは、邪馬台国と纒向遺跡の関係である。

近年、纒向遺跡の発掘が進み、三世紀初頭に前代未聞の大都市が出現し、三世紀半ばに箸中山古墳（箸墓）が誕生したと考えられるようになって、邪馬台国はヤマトで決まったと信じられるようになってきたが、正確に言うと、まだ結論は出ていないのである。

それはなぜかというと、「時代を確定する物差し」が、いまだに明確になっていないからなのだ。

畿内論者は、集められた発掘資料の中から、自説に都合の良い物証を取りあげる一方で、データの数値に大きな誤差が内在していることに無頓着だ。その上で、「箸墓は三世紀半ばの造営」「だから箸墓は卑弥呼の墓」と言っているに過ぎない。そして、邪馬台国畿内論者の意見をメディアが大々的に取りあげるから、「邪馬台国はヤマトで決まった」という考えが、一般的に受け入れられているだけの話なのである。

したがって、いまだに邪馬台国論争は、決着していない。

そもそも邪馬台国論争は、なぜ迷宮入りしてしまったのだろう。

そこで、邪馬台国論争を見つめ直す必要がある。もっとも、あまり拘泥していては、話が複雑になるだけだから、あらましだけを語っておこう。

邪馬台国論争が迷走したきっかけは、何といっても「魏志倭人伝」の記事が、実際の地理とうまく符合しなかったからである。

朝鮮半島から博多付近までの記述は、正確であった。ところが、そこから先が、よくわからなくなる。

南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。

つまり、邪馬台国は北部九州沿岸地帯から南に水行（船で）十日、陸行（歩いて）一月の場所にあるというのである。

いくら道の整備されていない時代の話とはいえ、往復に三ヶ月弱かかるような場所に、本当に邪馬台国はあったのだろうか。だいたい、実際の地図にこの行程を当てはめれば、太平洋に沈んでしまうのではないかと思えてくる。

そこで多くの学者が、「日程よりも距離を重視すべきだ」「南を東に読みかえれば、ヤマトにたどり着く」など、数々の推理を働かせたのである。

邪馬台国偽僭説を見直す

「魏志倭人伝」の最大の謎は、朝鮮半島から対馬（つしま）、壱岐（いき）を経由して、博多付近にたどり着くまでの記事は正確なのに、なぜその先のもっとも大切な、倭国の中心・邪馬台国に至るまでの行程があやふやなのか、ということである。

江戸時代の国学者・本居宣長（もとおりのりなが）は、「これは偽僭（ぎせん）（偽証）だから」と考えた。どういうことかというと、畿内のヤマトに対抗しようと考えた北部九州の卑弥呼が、「われわれこそ真のヤマト（邪馬台国）」と偽り、魏に朝貢してしまったからだ、とするのである。

つまり、北部九州の沿岸地帯からヤマトに至る道のりを、卑弥呼は誤魔化した、ということになる。

なぜこの卓見に、誰も見向きもしないのだろう。

ひとつの理由に、本居宣長が国粋主義者だったことが挙げられるかもしれない。本居宣長は、「ヤマトの天皇が中国の皇帝に頭を垂れるはずがない」という発想から、邪馬台国偽僭説を編み出したのだった。

もちろん、この考えを支持することはできない。しかし、「卑弥呼が偽証した」という推理まで否定する必要はない。

ここで再び、弥生時代後期から古墳時代（ヤマト建国後）の歴史をふり返ってみよう。纒向遺跡が出現したことを知った北部九州は、大きなショックを受けただろう。畿内周辺だけではなく、出雲、吉備、近江、東海、北陸がひとつに固まったとなれば、いくら鉄器を大量に保有していても、太刀打ちできないと、北部九州は悟ったにちがいない。第一北部九州は、日田盆地というアキレス腱を抱えていたのであり、纒向出現からそれほど時間をおかずに、日田盆地はヤマトと山陰地方の勢力におさえられてしまった。

そうなってしまった以上、北部九州に残された選択肢は、ヤマトの枠組みに参加す

邪馬台国論争の盲点

『魏志倭人伝』の記事

方角有効説…ヤマトに位置

距離有効説…北九州に位置

いまだ未解決

新説　卑弥呼がわざと邪馬台国の位置がわからないように誤魔化した

なぜ？ → 親魏倭王の称号を獲得する目的で

邪馬台国を滅ぼした
ヤマトがとった行動とは？

るか、あるいは徹底抗戦のどちらか、ということになる。

北部九州は朝鮮半島にもっとも近いという地の利を生かし繁栄を誇ってきたが、九州の東側の勢力から見れば、朝鮮半島への通り道であり、両者は並び立たない関係にある。

そして、北部九州の沿岸地帯が纏向型前方後円墳をすばやく取り入れたのは、この地域がヤマトの枠組みに収まったことを意味していよう。

これに対し、筑後川南岸地域、つまり内陸部には、纏向型前方後円墳は伝播していない。つまり、彼らは、新たな枠組みに入ろうとはしなかったのだろう。それはなぜかと言えば、ひとつの理由に、日田盆地をヤマトにとられても、天然の要害・高良山（久留米市）を擁する山門（久留米市の南側）が、沿岸地帯に比べて防衛力で勝っていたからだろう。そして彼らは、中国の魏が朝鮮半島に進出してきたその一瞬のチャンスを見のがさず、帯方郡に使者を送り込み、「われわれが倭国のヤマト（邪馬台国）」と称え、親魏倭王の称号を獲得してしまったということになる。

ではなぜ、北部九州沿岸地帯から邪馬台国に至る行程が曖昧なのかと言えば、「本物のヤマト（邪馬台国）」が別の場所にあって、魏に露顕することを恐れたのだろう。北部九州から邪馬台国まで往復三ヶ月弱という旅程は、魏から遣わされた人間に邪馬台

国訪問をあきらめさせるに充分な距離である。

卑弥呼と台与のカラクリ

ここまでくれば、多くの謎が、面白いように解き明かされていく。

邪馬台国の卑弥呼は、魏に対し、「南方の狗邪国と交戦している」と報告し、このころ死んでいる。このため、卑弥呼は戦争で殺されたとする考えがある。ここに大きなヒントが隠されている。

邪馬台国が北部九州とすれば、卑弥呼の南側の敵はクマソ（隼人）ということになりそうだが、実際の敵は、「北と東から攻めてきたヤマトの軍勢」であろう。それを「南」と言ったのは、まさか「本物のヤマトが攻めてきた」とは報告できなかったからにちがいない。

卑弥呼の死後、男王が立ち、国中服さず、戦乱が起き、あまたの人々が亡くなったという。この混乱を経て、卑弥呼の宗女・台与が王位に就いたと「魏志倭人伝」はいう。ここに言う台与こそ、『日本書紀』に登場する女傑・神功皇后であったと筆者は見る。

しかし、台与は中国の王朝が魏から晋に替わって、晋に使者を派遣するも、冷たく

あしらわれたあと、歴史からフェイドアウトするのである。

いったい台与は、どこに消えてしまったのだろう。『日本書紀』に従えば、神功皇后は御子・応神を引き連れ、ヤマトに戻ってくるのだが、これは事実ではあるまい。

おそらくこういうことではなかったか。ヤマトは邪馬台国の卑弥呼が親魏倭王の称号を獲得してしまったことに、頭を悩ませた。そこで、一気にこれを攻め滅ぼし、どさくさに紛れ、台与を卑弥呼の宗女ということにして、ヤマトが邪馬台国になりすましたのだろう。つまり、正真正銘のヤマトは、魏を敵に回すことを避けたのであろう。

だが、ここに危険な図式ができ上がってしまったのである。それが、日本海と瀬戸内海の対立だ。台与（神功皇后）の政権の誕生は、「出雲＋北部九州」が主導権を握ったことを意味する。だが、この状態を放置しておけば、ヤマトの吉備は、干し上がってしまう。

台与が親魏倭王である間は、ヤマトの吉備（きび）は静観せざるを得なかっただろう。だが、魏の滅亡と晋の勃興（ぼっこう）によって、一気に形勢は逆転したのだろう。中国の後ろ盾を失った台与は、ヤマトの吉備に裏切られたにちがいない。いわば、台与は「ミイラ取りがミイラになった」のである。

では、その後の台与の姿を追うことは可能なのだろうか。

ヒントは天孫降臨神話に隠されているように思えてならない。

天孫降臨神話最大の謎は、出雲から強制的に国を譲り受けた皇祖神であったのに、なぜか南部九州に降臨していたことである。

一般にこれは、史実とは考えられていない。北部九州に比べて、南部九州は先進地域とは言い難い。そのような場所に、なぜ皇祖神が舞い下りたのかと言えば、それは「天皇家の歴史を古く、遠く語る必要があったから」とするのである。

だが、この神話、何かしらの歴史を意識して組み立てられたのではあるまいか。

そう考える理由は、三つある。まず第一に、天孫降臨をとりまく人脈が、「勝者の栄光」を背負った者たちとは考えられないからである。

天孫降臨神話は史実だった

天孫降臨神話で地上界に降ろされるのは、天照大神の孫の天津彦彦火瓊瓊杵尊だが、この時、神々の一行の行く手には、奇怪な神が立ちはだかっていた。それがサルタヒコ（猿田彦大神）で、『日本書紀』神代下第九段一書第一には、次のようにある。

サルタヒコの姿は、鼻の長さが七咫、座っても七尺、背の丈は七尋もあったという。

口と尻が光り、目が八咫鏡のようで、照り輝く姿は、まるでホオズキのようだったという。

そこで、眼力に引けを取らない天鈿女命を向かわせ、大男に立ち向かわせてみた。天鈿女命は胸元を露わにして裳の紐をゆるめ臍の下に垂らし（性器を露出し）、大笑いして対峙した。すると、大男はサルタヒコと名乗り、天照大神の御子たちを出迎え、お待ちしていたと言い、一行を先導したのだった。

このサルタヒコ、いったい何者なのだろう。

サルタヒコは天の八衢で光り輝いていたといい、太陽神の条件を備えている。このことは、通説も認めている。

サルタヒコは、照り輝いていただけではない。長い鼻は男根のイメージで、だからこそ、天鈿女命は性器を露出している。男根は「陽」で、太陽神の「陽」と共通する。

天鈿女命はこれよりも前、高天原の太陽神・天照大神が天の岩戸にこもってしまったとき、ヌードショーを行っているが、これも、太陽神をおびき出すための神事である。天照大神は天神で、かたやサルタヒコは国神なのだから、サルタヒコは国神の中の太陽神ということになろうか。天鈿女命は、二つの太陽神を祀る巫女であったことになる。

つまり、天孫降臨しようとする天津彦彦火瓊瓊杵尊を、国神の太陽神が導いていた

と『日本書紀』は記録していたのである。

なぜここで、国神が大きく取りあげられたのだろう。

それだけではない。すでに触れたように、天津彦彦火瓊瓊杵尊の子の彦火火出見尊（山幸彦）は、塩土老翁に助けられ海神の宮に向かっていたが、塩土老翁は住吉大神で、神功皇后と深くかかわりのある神である。

住吉大神はなぜか祟る神で、おそろしい神であるにもかかわらず、彦火火出見尊を助けている事実を無視できない。

また、天孫降臨神話の別伝（一書第四）によれば、地上界に下りた天津彦彦火瓊瓊杵尊の前に、塩土老翁が現れたともいう。すなわち、塩土老翁は深く皇祖神にかかわりをもっていたのである。

祟る神が、なぜ天孫降臨神話に登場してくるのであろう。しかもこの神は、神功皇后と夫婦の秘め事をした神である。

このような怪しげな人脈が皇祖神にまとわりついているのは、この説話が作り話ではなかったからではあるまいか。

天孫降臨の地にリアリティがある

第二の理由は、天孫降臨の場所に、リアリティがあることだ。

『日本書紀』によれば、天津彦彦火瓊瓊杵尊は日向の襲の高千穂峰（比定地に二説ある。宮崎県と鹿児島県の県境の高千穂峰と宮崎県西臼杵郡高千穂町。いずれにせよ、南部九州）に降臨したという。神が天から山に舞い降りたという設定は、明らかに「神話」である。したがって、問題は「その次の一歩」ということになる。それが、笠狭碕（薩摩半島の西海岸、野間岬）で、天津彦彦火瓊瓊杵尊らは、尾根づたいに徒歩でこの地に向かったという。すると、本当の降臨の地は、野間岬であろう。

そこで地図を広げると、興味深い事実に気づかされる。私見にあるように、もし神功皇后が高良山付近でヤマトの軍団に敗れ、逃れたとしたら、どのような逃亡ルートが想定できるだろう。

北と東から攻められたのだから、逃げ道は、西か南である。筑後川を下り、有明海に出て、多島海を辿っていけば、自然とたどり着くのが、野間岬ということになる。これは、偶然ではあるまい。

つまり、天孫降臨とは、神功皇后（台与）の逃避行であったと考えられるのである。

そこで、第三の理由である。

神功皇后が南部九州に落ち延びたとすれば、応神天皇も、南部九州に足跡を残しているはずである。

まず、応神天皇の東征が、天津彦彦火瓊瓊杵尊の姿によく似ているという指摘がある。それはなぜかといえば、天津彦彦火瓊瓊杵尊は天界から降ろされるとき、真床追衾（まとこおうふすま）にくるまるが、これは、御子が胞衣（えな）にくるまれた様子を描写したもので、生誕直後だったことを意味する。かたや応神天皇も、産まれ落ちてすぐ、東征に向かっている。

応神天皇は、南部九州とも強く結びついている。『古代日本と海人』（黒住秀雄・薬師寺慎一・藤岡章共著　大和書房）には、次のような指摘がある。それを要約すると、次のようになる。

（1）『宇佐八幡託宣集（うさはちまんたくせんしゅう）』に、応神天皇が大隅（おおすみ）国（鹿児島県）の辛国（からくに）の城（き）に降臨したとある。

（2）『水鏡（みずかがみ）』には、神功皇后が大隅国で応神天皇を出産したとある。

（3）『日本書紀』（別伝）に、応神天皇は難波の大隅宮（おおすみのみや）（大阪市東淀川区の古い地名は「大隅」だった）で亡くなられたとある。この宮の名が、南部九州とかかわりがある。

(4)『日本書紀』と『古事記』には、応神天皇が日向国の隼人の女性・髪長媛を娶ったとある。
(5)『日本書紀』には、応神天皇の時代、髪長媛の父・隼人の諸県君牛が、忠勤の心篤かったとある。

この指摘に加えて、『今昔物語集』には、大隅国（鹿児島県）に八幡大菩薩（応神）が現れ、のちに、宇佐神宮に遷ったと記されている。やはり、南部九州と応神天皇は、強く結ばれていたとしか考えられない。

ただし、この指摘の中で、(1)と(2)は、中世文書の中の記事であることから、信用できないとする考えが一般的なのだろう。だが中世は、貴族（具体的には藤原氏）が没落し、八世紀の『日本書紀』が構築した「ゆがめられた歴史観」がことごとく覆される時代であったことを無視できない。そのいい例が、先述した三輪流神道の「三輪と伊勢」の話である。

また、鹿児島神宮（鹿児島県霧島市隼人町）は八幡神を祀っているが、八世紀に宇佐方面から大量の移民がこの地に移り住み、八幡信仰をもちこんだ可能性があることなどから、この地に応神天皇にまつわる説話が伝わってきたと、考えることができる。

しかし、この一帯にもうひとつ、零落した貴種が流れ着いたという説話が言い伝えられていたことも、無視できない。それが鹿児島神宮裏手の蛭児神社で、別名奈毛木の杜と呼ばれている。

蛭児尊はイザナギとイザナミの子だったが、足が不自由で、高天原から天磐櫲樟船に乗せられ、捨てられたのだという。そして、流れ着いたのが、蛭児神社だった。蛭児尊は、嘆き悲しんだといい、だからこの地を奈毛木の杜という。

この話、天孫降臨の「裏バージョン」であり、零落した皇祖神の説話として、むしろ真相に近かったのではなかろうか。

南部九州や隼人と応神天皇が結ばれていたのは、神武天皇と応神天皇が同一人物で、天孫降臨神話は、神功皇后の逃避行だったからだろう。また、神功皇后は邪馬台国の台与であるとともに、出雲から九州を股に掛けて活躍した、日本海の女傑だった。だからこそ、瀬戸内海勢力に疎まれ、潰され、逃げる場所を失い、南部九州に逼塞したのだろう。

祟る天皇の正体

これが、筆者の考える、邪馬台国の真相、ヤマト建国のいきさつである。このような図式が明らかになったことによって、天皇家誕生の真相は、明快に語ることができるのである。

ヤマトの崇神天皇（吉備出身の饒速日命）は、流通ルートの主導権争いに勝ち、出雲を追い落とすことに成功したのである。しかし、ヤマトを疫病が襲い、人口は半減したといい、崇神天皇は震え上がったのである。

崇神天皇が恐れた出雲の神は、祟る神であった。そして、出雲神の祟りを抑える方法は、「祟り神の子を探しだし、ヤマトに連れてきて、出雲神を祀らせること」だったのである。そして、南部九州から、「零落（れいらく）した出雲の末裔（まつえい）」「恨む神功皇后の子」「日向（ひむかの）御子（みこ）」が、連れて来られたのだろう。

「出雲の子＝神武天皇」がヤマトタケルの霊剣を得ることによってヤマト入りが可能となったのは、ヤマトタケルがヤマト建国時の主導権争いのすべてをひとりの人間に仮託されて述べられたからであり、そのドタバタの歴史が、霊剣という形で神武に引

き継がれたことを意味していたと考えられる。

もちろん、「出雲の子」に、強大な権力を与えたわけではあるまい。実権を握り続けたのは、「吉備」であり、「出雲の子」「日向御子」は、祟る出雲の神を祀る司祭王であり、また一方で、新たなヤマトの王は、「祟る恐ろしさ」を秘めた、不思議な王でもあった。

天皇を巡る大きな謎は、「なぜ天皇は祟るのか」、「いつ、誰が、祟る天皇という幻想を編み出したのか」というものであった。しかし、「祟るヤマトの王」は、人為的に造られたものではなかったのである。

人が造った幻想は、いつか鍍金（めっき）が剥がれるものだ。それにもかかわらず、「祟る天皇」という幻想は、日本人の心の奥底に沈殿し、歴史の節目節目で、「おそろしい天皇」という幻想が、思い起こされ、機能してきた。それはなぜかといえば、「祟る天皇」という民族の信仰は、現実の祟りの恐怖から湧き出た「本物」だったのである。

このように、「祟る天皇」は、偶発的に生まれたのである。それは、奇跡的な事件といっても過言ではなかった。なぜなら、「祟る天皇」は、日本人の信仰、自然観とまったく合致していたからである。

「祟る天皇」という幻想の根底には、神道の根源である「神は大自然」という「原理・原則」が秘められていたのであり、その通り、「天皇」とは、大自然同様、穏やかで、

民を守る存在であり、その一方で、ひとたび暴れ出せば、手に負えない鬼に変化するのだった。

近代日本が犯したように、天皇を一神教的な神に見立て悪用すれば、八百万の神々は怒り、日本を奈落の底に突き落とすのである。

つまり、「祟る天皇」こそ、多神教的な発想の具現者であり、一神教的発想が行きづまりをみせる今、改めて、「大自然の王」「八百万（やおよろず）の神々の子」である天皇を、われわれは誇りにしていかなければならないだろう。そして、日本人とは何か、なぜ日本人は天皇をいただくのか、その真意を、世界に向けて、胸を張って発信していく必要があるように思えてならないのである。

おわりに

かねてより、日本の歴史、天皇の歴史を解き明かす鍵は、「地理」「地勢」が握っていたのではないかと考え続けてきた。

ヤマト建国にまつわる考古学の成果は、三世紀のダイナミックな列島諸地域の鳴動を伝えてくれた。そして、瀬戸内海を見下ろす天然の要害・ヤマトに国の中心にふさわしい都市・纏向が出現していたことがわかってきた。

このように、ヤマトは流通と軍事の一大拠点に発展したのである。

その一方で、ヤマトの危うさは、瀬戸内海と日本海のふたつの勢力の拮抗と反目を生み出す可能性を秘めていたことであった。そして、結局ヤマトの王位は、一度敗れた日本海勢力（出雲）の手に渡ったのである。

最後に指摘しておきたいのは、ヤマトに向かって「祟りがやってくる方角」が、大きな意味を持っていたであろうことである。

古代人にとってもっとも恐ろしかった祟りは、「天然痘」であった。八世紀にいたっても、わが代の春を謳歌していた藤原不比等の四人の子が、一瞬で病魔に倒れたのである。

その天然痘は、常に北部九州から東漸し、ヤマトを襲った。それは、大陸や半島から、病原菌がもたらされるからだろう。ここに、天皇誕生のもうひとつのカラクリが隠されているように思えてならない。

藤原四兄弟の全滅のときも、はじめ疫病は北部九州で流行したのだった。疫病の恐怖は次第に東に向かい、ヤマトの都はパニックに陥ったのである。

一方第十代崇神天皇の時代、疫病の蔓延で人口は半減したという。この時も、魔の手は北部九州から東に延びてきたのだろう。誰もが、北部九州で敗れた神功皇后や武内宿禰の祟りと考えたにちがいない。つまり、敗れた出雲の祟りは、現実に、確実に、西からもたらされ、ヤマトの民は、そのたびに、出雲の祟りの恐怖を再認識していったにちがいないのである。

こうして、「祟る出雲」「祟る天皇」は、日本人の潜在意識に、くり返しすり込まれていったのであろう。

なお、今回の執筆にあたっては、廣済堂あかつきの飯田健之氏、アイブックコミュニケーションズの的場康樹氏、歴史作家の梅澤恵美子氏に御尽力頂きました。改めてお礼申し上げます。

合掌

【参考文献】

『古事記祝詞』 日本古典文学大系 （岩波書店）
『日本書紀』 日本古典文学大系 （岩波書店）
『風土記』 日本古典文学大系 （岩波書店）
『萬葉集』 日本古典文学大系 （岩波書店）
『続日本紀』 新日本古典文学大系 （岩波書店）
『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』 石原道博編訳 （岩波書店）
『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』 石原道博編訳 （岩波書店）
『三国史記倭人伝』佐伯有清編訳 （岩波書店）
『先代舊事本紀』大野七三 （新人物往来社）
『日本の神々』 谷川健一編 （白水社）
『神道大系 神社編』 （神道大系編纂会）
『古語拾遺』斎部 広成著 西宮 一民編集 （岩波文庫）
『藤氏家伝 注釈と研究』 沖森卓也 佐藤信 矢嶋泉 （吉川弘文館）
『日本書紀 一 二 三』 新編日本古典文学全集 （小学館）
『古事記』 新編日本古典文学全集 （小学館）
『農業は人類の原罪である 進化論の現在』コリン・タッジ著 竹内久美子訳 （新潮社）
『異相のヨーロッパ』 海原峻 （マルジュ社）
『茶の本』 岡倉覚三著 村岡博訳 （岩波文庫）
『蛇と十字架』 安田喜憲 （人文書院）
『日本文明と近代西洋』 川勝平太 （ＮＨＫブックス）
『アニミズムの世界』 村武精一 （吉川弘文館）
『原日本の精神風土』 久保田展弘 （ＮＴＴ出版）
『ベルツの日記 上』 トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳 （岩波文庫）
『平将門』 北山茂夫 （朝日新聞社）
『江戸の闇 魔界めぐり』 岡崎柾男 （東京美術）
『白鳥伝説』 谷川健一 （集英社）
『古代日本と海人』 黒住秀雄・薬師寺慎一・藤岡章共著 （大和書房）
『外国新聞にみる日本』 （毎日コミュニケーションズ）
『二十世紀を精神分析する』 岸田秀 （文春文庫）
『出羽三山と日本人の精神文化』 松田義幸編 （ペリカン社）

【著者紹介】
関 裕二（せき・ゆうじ）
歴史作家。1959年千葉県柏市生まれ。奈良に通い詰め、独学で古代史を学ぶ。1991年に衝撃的デビュー作『聖徳太子は蘇我入鹿である』を発表以来、古代をテーマに意欲的な執筆活動を続けている。
著書に、初の小説『王剣強奪』（芸文社）、『新・古代史謎解き紀行　消えた蝦夷たちの謎　東北編』（ポプラ社）、『平城京は古代豪族の墓標だった！』（宝島社新書）、『物部氏の正体』『藤原氏の正体』『蘇我氏の正体』（以上、新潮文庫）、『伊勢神宮の暗号』（講談社）、『古代史謎めぐりの旅 』（ブックマン社）、『なぜ「日本書紀」は古代史を偽装したのか』（実業之日本社）、『天皇と歴代遷宮の謎』（PHP研究所）などがあり、他数々の古代史フィクション、ノンフィクションを執筆中。

企画・プロデュース：アイブックコミュニケーションズ
ブックデザイン：若林繁裕
本文デザイン・DTPデータ作成：立花リヒト
本文図版作成：松岡由香里
本文イラスト作成：林玲子

『日本書紀』が隠し通した天皇の正体
2010年7月2日　第1版第1刷

著　者　関　裕二
発行者　矢次　敏
発行所　廣済堂あかつき株式会社
〒105-0014 東京都港区芝3-4-13　幸和芝園ビル
電話　03-3769-9208（編集部）
　　03-3569-9209（販売部）
Fax　03-3569-9229（営業部）
振替　00180-0-164137
URL　http://www.kosaidoakatsuki.jp

印刷所
製本所　株式会社　廣済堂

ISBN978-4-331-65470-5　C0195
© 2010 Yuji Seki　Printed in Japan
定価は、カバーに明示してあります。
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。



9784331654705



1920195006009

ISBN978-4-331-65470-5
C0195 ¥600E

廣済堂出版
定価 本体600円 十税

KOSAIDOBUNKO

初代神武天皇から
41代持統天皇までを記した
現存最古の正史『日本書紀』。
そこにはさまざまな謎があるが、
最大の謎は、「天皇」そのものである。
「現人神」である天皇は、
祟りをもたらす恐ろしい存在でもあった。
その天皇が逆に祟りを恐れたのが、
ヤマトタケルや聖徳太子。
さらには、蘇我入鹿、菅原道真、平将門。
これらが暗示する古代日本史の真実とは?
考古学上の証拠と『日本書紀』との矛盾。
そして、通説への疑問。
大胆な仮説と緻密な推理によって、
次第に解き明かされていく
天皇の正体、そして日本人の正体。
人気歴史作家が古代史最大の謎に迫る